

観光文化

Tourism Culture

269

May

2026

特集①

リゾートに至る 道程

山田雄一(JTBF)

特集②

米国の マウンテン リゾート ～コロラド州～

工藤亜稀(JTBF)

巻頭言

日本のリゾート形成に 期待すること

梅川智也
(國學院大學)

特集

Re:Resort 日本の リゾートの 可能性を 考察する

特集③

国内 マウンテンリゾートの 可能性 ～長野県～

座談会 平澤 岳(山ノ内町)
丸山俊郎(白馬村)
上野雄大(野沢温泉村)

特集④

国内 ビーチリゾートの 可能性 ～石垣島～

座談会 高橋秀明(石垣市観光交流協会)
赤城陽子(石垣市観光交流協会)
我那覇宗広(八重山ビジターズビューロー)
西銘基恭(石垣市)

活動報告

① 第4回 研究懇話会
「CBTとDM」
西山徳明(北海道大学)

② 第5回 研究懇話会
「アーバニスト/
アーバニズム論からの
現代観光考」
中島直人(東京大学)

別冊付録
観光資源
一覧表

わたしの1冊 | 第39回

『Their Eyes Were Watching God
彼らの目は神を見ていた』
原 忠之(セントラルフロリダ大学)

観光を学ぶということ | 第28回

帝京大学経済学部観光経営学科 山下ゼミ
山下晋一(帝京大学)

連載

視座

観光地域づくりの 拡張を目指して

山田雄一(JTBF)



現在、インバウンドの進展に伴い、かつてバブル崩壊の象徴とされ、その概念も希薄化していた国内のリゾート地が再び脚光を浴びています。今号では、この機を捉え、日本のリゾートが国際的に普遍的な価値を持つ地域へと発展するために必要な取り組みについて考察します。



かつて日本の旅は「二宿一飯」の宿場町文化に象徴されるように、目的地へ、いかに早く着き、疲れを癒して翌朝には発つという「周遊型」が主流であった。古い歴史を持つ湯治や明治以降の別荘滞在などの「滞在型」の系譜はあったものの、戦後の高度経済成長期における都市化・工業化の波の中で、それらは急速に影を潜めていった。1970年代の新生総、1980年代の四全総という二度の大きなうねりの中で、日本でも本格的な滞在型観光地、すなわち「リゾート」開発が志向された。特に1980年代のリゾート法制定時は、国民の余暇活動の充実のみならず、円高不況下における内需拡大という経済政策の側面が強く打ち出されていた。しかし、純粋な観光政策ではなく経済政策から派生したりリゾート開発は、結果としていびつなものとなった。ハード優先、利益優先の開発が進み、巨大開発や自治体の誘致合戦などの社会問題を引き起こした。バブル崩壊後、その反動から「リゾート」という言葉自体が使いづらい「失われた30年」が長く続き、日本の学術領域でもリゾート研究は停滞を余儀なくされた。

一方で海外に目を向けると、「リゾート」という言葉が忌避されることはなく、社会の需要に応じたリゾート開発や投資が着実に進められてきた。かつて私たちが北米のスキーリゾートなどを視察した際にシステムや施設水準の高さに圧倒されたが、日本が歩みを止めている間にも、世界のリゾートは着実にさらなる進化を遂げていたのである。

そして現在、日本の観光が本格的な国際化の時代を迎え、インバウンドを含めた多様な旅行者が長期滞在

を楽しむための受け皿づくりが急務となっている。かつてバブル崩壊の象徴とされた国内リゾートが再び脚光を浴びているのは、歴史的な必然と言えるだろう。これからの日本のリゾート形成においては、過去の教訓を活かしつつ、失われた30年の空白を埋めるべく、改めてリゾートに関する研究と実践を深めることが求められる。これからは施設を造るだけでなく、データに基づく科学的な需要予測や計画策定の視点が再び重要となる。さらに、ハードの整備だけでなく、長期休暇制度の拡充といった需要を安定させるソフト面の制度づくりという「両輪」を忘れてはならない。

観光立国を標榜し、国際水準の観光地づくりが目標とされる中、これからの日本のリゾートに最も期待したいのは、「空間の質」を飛躍的に高めることである。それは優れた宿泊施設の建設にとどまらず、外部環境の整備や地域全体を快適な空間へと昇華させる取り組みだ。具体的には、植栽や景観、公共サイン、照明などの洗練されたデザイン、あえて古く見せるエイジングの手法、そしてその土地が持つ固有の風土（バナキュラー）を活かした雰囲気づくりなどが挙げられる。それらが特に求められるのは、日本を代表する滞在型観光地である温泉地である。

世界で評価される普遍的な価値を持つリゾートとは、地域に根差した本質的な豊かさを、提供する場所に他ならない。過去の知見を現代の文脈で再構築し、日本の観光地が真の意味で国際的かつ持続可能な滞在型観光地へと進化していくことを心から期待している。

日本のリゾート形成に期待すること



梅川智也

國學院大學観光まちづくり学部長・教授



(うめかわ・ともや) 公益財団法人日本交通公社で37年間、リゾート計画や観光地経営の研究・実務に従事し、スキー場開発、リゾート政策、都市観光、温泉地再生などに関わる。その間、産官学で構成された「リゾート開発研究会」の事務局長を15年間務めるなど、わが国のリゾート政策の変遷を見守り続けてきた。現在は観光地経営の実践知を次世代へ伝える教育・研究に取り組んでいる。



第269号

目次

特集

Re:Resort ～日本のリゾートの可能性を考察する～

特集 ①

リゾートに至る道程

山田雄（公益財団法人日本交通公社理事 観光研究部長）

P 4

特集 ②

米国のマウンテンリゾート

～コロラド州への 視察を重ねて～

工藤亜稀（公益財団法人日本交通公社観光研究部研究員）

P 10

特集 ③

国内 マウンテンリゾートの 可能性

～長野県「座談会」

平澤岳（山ノ内町長）

丸山俊郎（白馬村長）

上野雄大（野沢温泉村長）



P 15

【巻頭言】
日本のリゾート形成に
期待すること

梅川智也
(國學院大學観光まちづくり学部長・教授)

P
1



特集 4

国内

ビーチリゾートの可能性

石垣島「座談会」

高橋秀明

(石垣市観光交流協会
副会長)

赤城陽子

(石垣市観光交流協会理事
宿泊部会長)

我那覇宗広

(八重山ビジターズビューロー
専務理事)

西銘基恭

(石垣市観光文化課長
博物館建設準備室長)

視座

観光地域づくりの

拡張を目指して

山田雄一(公益財団法人日本交通公社理事・観光研究部長)

P
32

活動報告 1

第4回 研究懇話会

「CBT(community-based tourism)へDM(destination management)」

西山徳明(北海道大学観光光学高等研究センター教授)

P
40

活動報告 2

第5回 研究懇話会

「アーバニスト／アーバニズム論からの現代観光考」

中島直人(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授
一般社団法人アーバニスト代表理事)

P
44

別冊付録 観光資源一覧表

連載

わたしの1冊 第39回

『Their Eyes Were Watching God／
彼らの目は神を見ていた』……………P 39

Zora Neale Hurston(ゾラ・ニール・ハーストン) 著

原 忠之(セントラルフロリダ大学ローレンスホスピタリテ・経営学部准教授)

観光を学ぶということ 第28回

ゼミを通して見る大学の今

帝京大学経済学部観光経営学科 ……………P 48

山下ゼミ ゼミ長が振り返る1年の歩み

山下晋一(帝京大学経済学部観光経営学科教授)



P
23

① リゾートに至る

道程

公益財団法人日本交通公社
理事・観光研究部長
山田雄一

国内での デステイネーション 開発の始まり

太平洋戦争後、我が国は、世界でも例がないとされる急速な復興を成し遂げることになった。特に、1955年から1973年までは、高度経済成長期と呼ばれ、年平均10%以上の経済成長率を達成した。こうした経済成長に歩調を合わせるように、戦争によって沈滞していた余暇市場への注目も再

び高まっていった。

1950年代に入ると招待旅行、慰安旅行が再開されるようになる。1951年には日本ユースホステル協会が創設され、1952年、日本修学旅行協会が設立され修学旅行も催行されるようになる。1956年には、低廉かつ快適に国民が健全なレクリエーション、健康増進を行うことを促進することを目的とした国民宿舎の整備がスタートし、都市近郊の温泉地では施設の大規模化が進み、また、私鉄資本によって箱根や伊豆、軽井沢などの開発が展

開されるようになる。

1960年代に入ると、観光への注目度はさらに高まる。1961年には旧厚生省により、国立公園および国定公園の集団施設地区内に国民休暇村の整備が始まる。そして、1962年に策定された全国総合開発計画（以下、全総）では、地域間の均衡ある発展を目標に、拠点開発方式が構想された。その中で、観光は「観光開発の方向」として独立した章が設けられている。ここでは、「都市の過大化、社会機構の複雑化による緊張増加および所得水

準の向上と余暇の増大に伴い国民生活における観光の必需化」と「産業開発の積極的推進にともない予想される産業開発と観光開発との地域的調整の問題」が指摘されている。その上で、「低開発地域の観光開発」と「政治、経済、文化の中心地としての都市及びその周辺の観光開発」の方向性が示されている。特に後者は、1964年の東京オリンピックを控え、国際観光との関係性を意識したものとなっており、大規模な開発事業の呼び水ともなっている。



(上)ハウステンボス(2011年9月撮影)、(下)トナム(2002年9月撮影)。リゾートの象徴的な開発事例として注目されたが、その後、破綻。現在もなお、再生プロジェクトが進行している。

① リゾートに至る道程

1963年には観光基本法が公布。同年、旧郵政省はかんぽの宿の整備を開始。翌年には海外旅行が自由化され、同年の東京オリンピック開催にあわせ、東海道新幹線開業、その後の名神・東名高速道路の開通、マイカーの普及によって、人々の移動範囲が飛躍的に拡大する。これにあわせるように観光地開発の動きは全国へと広がった。その対象は広範であり、現在、我々が認知する観光リゾートは、戦前から整備が進んでいた一部地域を除けば、その多くが、この時期に開発、または、開発構想が立てられたものである。例えば、首都圏近郊の那須や房総、伊豆の別荘地や温泉地、海水浴場、観光施設などは、この時期に初期開発されたものが多い。北海道の主要スキー場の多く、例えば、ルスツやニセコ、富良野なども、この時期の開発である。

人口動態的にみると、この当時は多量な人口が大都市へ移動しており、また、団塊世代（1947～1949年生まれ）が、10代後半から20代半ばにさしかかる時期であり就職、結婚、出産の時期に合致する。つまり、大都市圏で余暇需要が急増する時期でもあった事が大きな理由と考えられる。1970年に開催された大阪万博は約6400万人もの入場者を集め、膨大な観光需要が存在することを示すと共に、旅行が職場旅行、団体旅行に加えて家族旅行、友人旅行へ拡大していく契機となった。一方、高度経済成長期は、地域疲弊が顕在化してきた時期でもある。そこで1970年、旧運輸省は、疲弊する過疎地域の振興と、増大する青少年の余暇需要を健全なものとすることを目的に青少年旅行村の整備を開始する。こうした政策の方向性は勢いを増し、オイルショック前年（1972年）、各省庁が、次年度予算に向け以下のような構想を立てるに至る（表1）。

このように、国民の高まる（レクリエーションを含む）観光需要への対応の必要性が求められる中、それに対応する施策として、全総では1964年

表1 第1次オイルショック前(1972年)の各省庁のレクリエーション構想

担当省庁(当時)	構想名
総理府	青少年レジャーランド
沖縄開発庁	海洋性レクリエーション地域整備計画
文部省	国立少年自然の家
林野庁	森林レクリエーションエリア
水産庁	レクリエーション漁場対策
運輸省	国民観光レクリエーション地区
労働省	労働者別荘村
自治省	レクリエーションエリア
厚生省	大規模年金保養基地
建設省	レクリエーション都市

(リゾート開発研究会資料[1992]を基に筆者作成)

東京オリンピック対応、新全総では各省庁のレクリエーション構想というように、国が主導して実施する観光（レクリエーション）開発事業が提示されていた。この時代、民間の開発意欲も旺盛であったものの民間事業では対応が難しい、低所得者や青少年といった市場への対応や、観光を活用した過疎地域や自然保護地域（国立公園など）などでの地域振興が志向されていたことがうかがえる。国や地域の地域振興

施策として、都市部の余暇需要を活用するという考え方は、70年代に既に形成されていたことが指摘できる。

ポスト・高度経済成長期—— デイスカバージャパン ／三全総

しかしながら、オイルショックで経済状況は一変し、官民間問わず、全国で展開されていた観光地域開発、施設整備、開発構想の多くは中止、休止に追い込まれることとなる。

その一方で、大規模開発への反動のように、歴史や文化を持った小都市に注目が集まるようになる。これは、オイルショック直前の1970年、当時の国鉄によるデイスカバージャパンキャンペーンの開始と、1970年に創刊された若い女性向けの雑誌「an・an（アンアン）」、1971年創刊の「non・no（ノンノ）」がきっかけと言われる。デイスカバージャパンで、長崎や飛騨高山、荻・津和野など地域に元々ある町並みや郷土景観を観光対象として取り上げることにより、観光地域は広がりを見せることと

なる。このキャンペーンに連動して、アンアン、ノンノでは、多数のカラー写真による旅行特集を掲載し、当時はまだ普及していなかった女性の旅行スタイルの、具体的イメージを提示した。さらに、1978年には、国鉄自身が山口百恵をイメージキャラクターに「いい日旅立ち」キャンペーンを展開することで、女性の旅行スタイルがより多面的に提示された。

キャンペーン結果によって、10代後半から20代はじめの若い女性が、グループで、ファッション誌を片手に、萩・津和野、倉敷、妻籠宿、飛騨高山といった歴史や文化の豊かな中小都市、宿場町などを訪れるようになる。これらの地域は、1975年の文化財保護法の改正以降、重要伝統的建造物群保存地区として指定され、集落や町並みが保全対象となっていくことになる。

地方部において、新たな動きが出ていたものの、1977年に策定された第3次全国総合開発計画（以下、三全総）では、「観光」という言葉は消えることとなる。「レクリエーション」という言葉は残されているものの、三全総が掲げた定住圏構想の中で、日常的な余暇需要として取り扱われており、

全総や新全総時のスキー場や海水浴場、キャンプ場といった旅行を伴う非日常的な余暇需要の概念としては用いられていない。

バブル景気期— リゾートブーム ／四全総

観光に対する意識が下がった三全総であったが、その策定後、国や地域で、観光への意識は再び高まってくる。例えば、1978年には、旧運輸省は、オイルショックによって中止されていたレクリエーション地区構想の後継として家族旅行村の展開を始め、旧厚生省は、1980年より大規模年金保養基地「グリーンピア」の整備を再開する。

1980年代になると需要面でも意識の高まりが顕在化する。1983年には、「国民生活に関する世論調査」において、今後の生活の力点として「レジャー・余暇」は「住生活」を抜き、最大の力点となるが、「レジャー・余暇」が「昨年度よりも悪くなった」とする比率は、「良くなった」とする比率の約2倍に達するなど、高い欲求がありなが

ら、それが満たされない状況となったのである（政府広報室、2012）。

こうした余暇意識の変化を受け、民間でも、観光地開発、施設整備に新たな動きが生じてくる。特に、1983年の動きは顕著であり、東京ディズニーランド、長崎オランダ村、トマムルスツ、万座ビーチ、宮古島東急など、それまで日本にはなかったテーマパーク、山岳・海浜リゾートが一気に開業した。1984年には、東急不動産が、リゾート開発の主体を別荘地開発からスキー場などのスポーツ施設の運営に移すことを発表（1984年8月25日・日経産業新聞）する。従来のリゾート開発は、基本的に、別荘地販売という単体の不動産事業であったが、集客施設としてスキー場やゴルフ場を開発し、不動産や会員権販売により初期投資を早期回収することで、低収益および長期回収のホテル事業を支えていくというビジネスモデルが提示された。このビジネスモデルは、その後のバブル期において多くの事業で援用されることになる。

こうした国民の意識高揚や、民間の投資意欲増大に伴って、国の政策面においても、観光のとらえ方が変化して

いく。当時の日本は、貿易黒字の増大による米国との摩擦が生じた時期でもあり、内需拡大が喫緊の課題であった。外国からの貿易黒字に起因する批判は、労働環境にも及び「働き蟻」「エコノミック・アニマル」と揶揄されるようにもなり、長時間労働も、一つの是正すべき課題として取り上げられるようになっていた。こうした社会経済環境の中で、前川春雄（元日本銀行総裁）は前川レポート（前川春雄、1986）において、住宅建設・都市再開発、消費拡大、地方債の活用によって内需拡大を図るといった方向性を示している。ただ、前川レポートは、現状の整理と追認という側面もある。1986年当時には、地方自治体に関わる観光地域整備事業は、事業費が5億円を超えるものだけでも100を超えていた。さらに、およそ100名の自民党国會議員によって「大規模リゾート建設促進連盟（会長…小淵恵三）」が結成され、これに應える形で都道府県レベルでは「大規模リゾート地域整備推進協議会」が設立されるなど、政治、行政サイドでもリゾート整備への関心は高まっていた（都市・地域整備局、2004）。高度経済成長期にレジャー、レクリ

表 ② 総合保養地域整備法成立(1987年)以前の各省庁のリゾート構想

担当省庁(当時)	構想名
建設省	複合リゾートカントリー構想
運輸省	アトラティブ・リゾート21構想、レクリエーション港湾整備構想
国土庁	広域リゾートエリア構想
自治省	大規模広域リゾート・ゾーン整備構想
通商産業省	余暇開発基盤施設整備事業
農林水産省	農山漁村リゾート・ゾーン整備構想
環境庁	国立・国定公園利用促進事業

(リゾート開発研究会資料[1992]を基に筆者作成)

エーションと呼ばれる概念は、リゾートという言葉で再び注目を集めることになり、オイルショック前年と同様に、各省庁から大規模な構想が提示されるに至る(表2)。

これらの構想の乱立を整理するため、各省庁間で調整が図られ、環境庁を除く6省庁によるリゾート関連法案の一本化が合意。1987年6月、総

合保養地域整備法(通称「リゾート法」が可決される。

同法の第1条では、最上位の「理念」として「国民の福祉の向上」「国土及び国民経済の均衡ある発展」を設定し、その具体的目標として「ゆとりある国民生活のための利便の増進」「地域の振興」を掲げている。その手段として「国民が余暇等を利用して滞在しつつ行う……多様な活動に資するための総合的な機能」の整備を「民間事業者の能力」を活用して行うとしている。つまり、民間活力を利用したリゾート開発を通じて、国民生活と地域経済の向上を図るというのが、リゾート法の基本概念である。

リゾート法は、同時期に策定された第4次全国総合開発計画(四全総)と密接な関係を有するものであった。四全総では多極分散型国土の形成が掲げられ、その中で交流ネットワーク構想が提示されている。東京圏への人口集中が起きていた同時期、リゾートという形態で東京圏と地方部との人口流動促進によって、交流ネットワークを構築していくという位置づけを担っていた。四全総およびリゾート法によって、再び、全国各地で大規模な観光地域開

発、施設整備が展開されるようになる。

先達が目指したもの

当時の関係者がリゾート法で目指したものは、既に欧米に存在していた成熟したリゾートを国内に現出させることであった。

ここまで整理したように、日本の観光は戦後、東京などへの人口集中を背景に高度経済成長期に連動して急速に需要を拡大させてきた。急速に需要が立ち上がったことで、温泉を含む良質な自然資源、文化資源を持ち、交通アクセスを備えた地域では、促成栽培的に観光需要に対応する施設、インフラの整備が進んだ。これらの多くは、非計画的に行われ、景観への配慮も、全体としての整合性も乏しいものであった。そうした地域、空間を訪れた人々の行動も刹那的なものとなりやすく、いわゆる物見遊山な行動が主体となっており「ゆとりある国民生活」とは言い難い状態にあった。

対して、欧米の著名なリゾートは、景観面でも、総合的な滞在環境面でもきれいに整っており、そこを訪れる人々が、ゆつくりとした時間を過ごす

さまは、当時の日本人にとって「眩しい」存在であり、日本人が目指すべき「次の次元」の観光と思わせた。

さらに、1980年代というのは、欧米においても、新しいリゾート整備が進められていた時代でもあった。欧米においても、戦後ベビーブームは生じており、彼らの観光需要を満たすためには、新しいデスティネーションが必要であったためだ。これらの開発整備は、新しい地域に都市計画的な手法を用いて大規模かつ総合的に整備するものであった。これは、リゾートには、必ずしも歴史的背景が求められず、ゼロからでも創造可能であることを示すものであり、同様の手法を用いることで、日本でもリゾートを創造できると考えることに繋がっていた。

伝言ゲームがもたらしたもの

当時、よく言われていたのは「観光地とリゾートは違う」ということだ。

観光地とは、すなわち、当時、すでに現出していた旅行先を示すが、リゾートは、それとは異なる存在であり、だからこそ、新規整備が必要であると

されたからだ。

その説明においては、リゾート (Resort) の語彙的定義がよく用いられた。それは、Re (再び) + Sort (訪れる / 仏語の sortir)、つまり、反復して訪れるところがリゾートだという説明である。これは言外に、従来の旅行先は、物見遊山行動で再訪するところではない(次の旅行は、違う旅行先に行く)ということを示している。

これは、間違った説明ではないのだが、人は言葉の定義で概念を理解できるほど優れた存在ではない。観光活動を始めて、まだ、20年程度しか経っておらず、欧米の「成熟したリゾート」を何度も訪れた人もほとんどいない状況において「反復して訪れる」という言葉の意味を理解することは難しい。

当時の人々が感じた素朴な疑問は、「なんで、何度も行くの?」「違うところに行つたほうがいろいろ見られて良いのでは?」だった。

さらに、リゾートの語彙的定義には含まれないが、従来型の観光との対比として言及されていたのは「長期滞在」である。欧米リゾートでの滞在客が、ゆつくりとした時間を過ごしているのは、それだけ滞在時間(日数)も長い

ことが前提となる。当時の(これは今も、あまり変わらないが)日本人は15時すぎに宿泊施設に入り、翌朝9時、10時にはチェックアウトしていくという滞在パターンであったが、リゾートでの滞在は、連泊することが基本であるということが、謳われていた。

ただ、これも当時の日本人には理解が難しかった。「同じ場所に2泊も3泊もして、何するの?」「それなら、周遊した方が楽しくない?」というのが、率直な感想だったからだ。

実際、当時、関係者向けに海外リゾートへ多くの視察ツアーが組まれたが、参加者たちは「なぜ、欧米人は毎年、ここに通つてきて、一週間、二週間滞在するのだろうか」ということを理解することは難しかった。

そこで、この定義と意識のギャップを埋めるロジックとなつたのが「短い滞在 / 一度の滞在では堪能しきれないだけのコンテンツがあるからだ」というものである。

実際、欧米のリゾートは、ビーチやゴルフ場だけでなく、劇場や商業施設など、さまざまな施設が整備されているところもある。また、アメリカのオランダにあるウォルト・ディズニー・

ワールド・リゾート(WDW)は、複数のテーマパークを備え、すべてを回するには一週間くらいは必要な規模であった。

結果、前述した海外での新規総合開発事例も参考に、国内でのリゾート開発は、さまざまな大型施設を組み合わせた大規模開発を志向するものとなつていった。テーマパークを付随する開発が多かつたのは、WDWに加え、東京ディズニーランド(1983年開業)の成功がロールモデルとなつていったのだろう。

これは、投資額を跳ね上げることになり、その後の破綻の主因となつたが、より重要なことは、そうした整備を行つたにもかかわらず、欧米のような滞在需要(反復して訪れ、長期滞在する)を生み出すことはほとんどできなかったことだろう。

観光は経験財である

結果として、1980年代後半、関係者が夢見た「観光活動の高次元化」は果たされることなく、1990年代後半にはバブル経済の崩壊と共に、事業の多くは頓挫し、既に開業していた

施設の多くも破綻していくこととなった。観光需要も、同様に縮小が進み、底打ちするのは2010年代になってからだ。

施設整備が大規模に行われたにもかかわらず、需要が創造されなかった事実が示すのは「供給は需要を作らない」ということである。もちろん、需要を満たすには供給が必要であるが、需要に基づかない供給が顧客を得ることはできない。これは、マーケティングの基本である。

高度経済成長期に、観光開発が進んだのは、(都市部への人口集中と経済成長によって)需要が増大したからであつて、その逆ではない。

同様に、欧米に成熟したリゾートがあるのは、「ゆつくりとした時間を過ごす」需要があるからだ。

その需要は、どのように生まれたのか。

これを考察するには、観光活動は経験すること、その価値を認識、評価できるといふ「経験財」であるということを認識する必要がある。

観光活動を多くの人が実行可能となつたとはいへ、実施には費用がかかり、これを実施できる人は限定される。

反復的かつ長期滞在となれば、その実施難易度はさらに高まる。それでも、実際に経験し、それが心地よいものだと思えば、その後のライフスタイルに組み込まれていくことになるだろう。そしてそれは、家族旅行という形で親から子へ受け継がれ、世代を超えて、その需要は培われていく。

欧州は貴族文化によって、戦前からリゾート需要が立ち上がっていたことに加え、フランスやドイツでは、長期有給休暇の取得が義務付けられたいわゆるバカンス法によって、半ば強制的に長期休暇を毎年、取得させられたことも大きい。所得の低い人々に向けた支援制度も整備されており、社会全体で観光の経験値が高まる社会となっている。

一方、日本では1960年代ごろから観光活動が広まったものの、一部、別荘を所有している人々を除けば、1980年代後半時点で反復的な長期滞在を経験している人は、ほとんどいなかった。本来であれば、少しずつ需要を拡大し、経験値を高めていくことが必要であったが、間違った解釈に基づいた供給整備を大量に行ってしまった。

これがバブル期のリゾート開発が失敗した構造である。

海外視察時に、自ら一週間、視察先に滞在し経験していたら、また、違った世界があったかもしれない。

訪日客による リゾート形成の期待

しかしながら、近年の訪日客の増加、特に欧米人の訪日は、この日本の需給構造を変える可能性を持っている。

欧米人は、反復的・長期滞在の経験値を持っている人々が少なくないからだ。彼らは、日本への旅行においても、当然に、自分たちがこれまで培ってきた経験に立脚した行動を取ろうとする。こうした彼らの需要が国内地域に入ってくることで、かつて創造できなかった滞在環境を持つたりリゾートを形成できるかもしれない。これは、観光立国政策を進める我が国にとっても、大きな強みとなることが期待できる。

さらに、そうした需要を持った人々が、日本の地域で過ごす姿を見ることが、日本人の余暇活動を変化させる可能性もあるだろう。観光は、経験しな

いと分らないものではあるが、実行している人を見ることで学べることも多いからだ。特に、現在の若者は、バブル世代の親を持つ子どもたちであり、リゾート需要への意識や経験が、日本社会の中で相対的に高い世代でもある。

30年以上前に、潰えてしまった日本でのリゾート形成であるが、その再興にチャレンジする環境は整いつつある。しかしながら、かつて、手痛い失敗を経験したように、拙速な対応は、社会をミスリードすることにもなる。ここで再度失敗したら、次のチャンスはないだろう。

日本において、どのようなリゾート形成が可能なのか、それにはどのような取り組みが重要なのかについて、検討していきたい。

米国のマウンテンリゾート

コロラド州への視察を重ねて

公益財団法人日本交通公社
観光研究部研究員
工藤亜稀

マウンテンリゾート 研究会の発足

J T B Fでは、自主財源を用いた事業として、特定のテーマについて官民の垣根を越えて関係者を募り、議論や交流を行うことを目的とした研究会をいくつか展開している。そのうち、「マウンテンリゾート研究会」は、スキーリゾートの国際化の中で、その競争力や持続性を高めていくことを目的に2019年度に創設された研究会である（発足当時の名称はスキーリゾート研究会）。2020年には、新型コロナウイルスの感染拡大がスキー場をはじめ観光産業に大きなインパクトをもたらしたほか、その後も気候変動に伴う雪質の変化や小雪・年較差、人々の価値観・ライフスタイルの変化等、ス

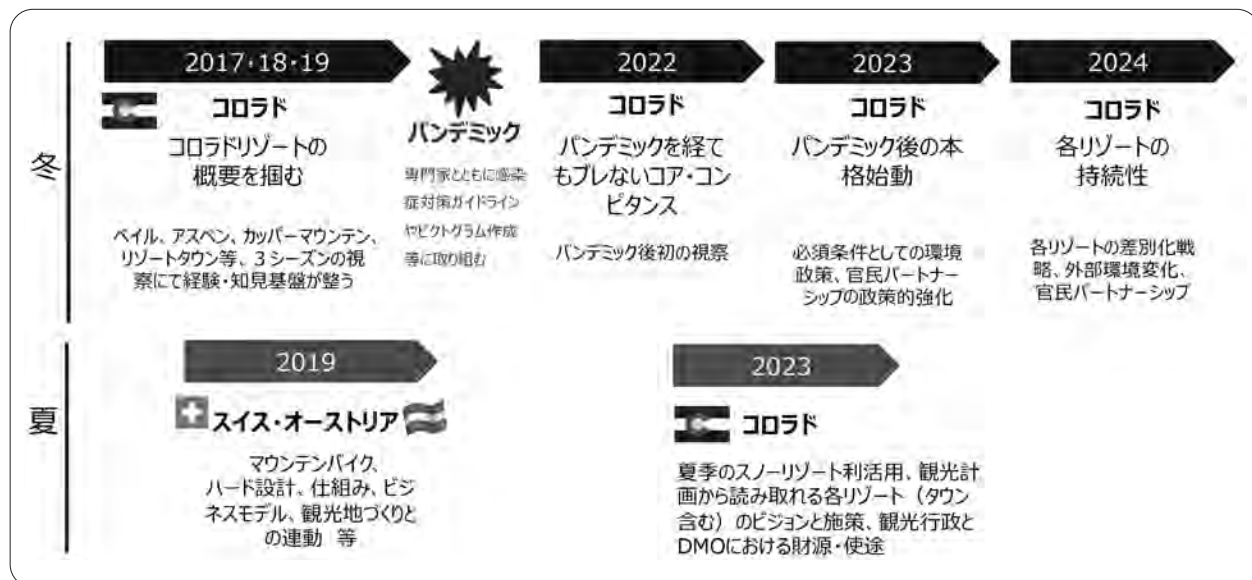
キー場をとりまく環境は変化し続けている。こうした状況の中、研究会では、これからの時代の山岳リゾートとしての再興、ひいては日本の山岳リゾート文化を創造していくことを目指し、具体的な情報提供、実践的取り組みを行いつながり、地域、事業者の支援を行っている。

研究会では、活動の一環として、会員有志メンバーにて海外先進地への視察を毎年行っている。特に米国コロラド州については、2017・2018シーズン以降（パンデミック期を除き）継続的に視察を実施しており、研究会として着実に知見を蓄積してきた。（図1）本稿では、これまでの視察成果に基づき、米国におけるマウンテンリゾート発展の背景を紐解くとともに、日本国内でも今後共通の論点となるであろう課題について考察したい。

コロラド州 スキーリゾート の発展史と顧客 セグメント戦略

コロラド州におけるスキー場開発の歴史は、20世紀初頭の娯乐的な萌芽期から、戦後の爆発的な産業化へと至る変遷を辿っている。戦前から一部の地域でスキー文化は存在し、1930年代にはすでに小規模なリフトの設置や森林局による開発計画が始まっていた。しかし、現代に繋がる大規模開発の決定的な転機となったのは、第二次世

図1 過去に研究会で実施したスキーリゾートへの視察先と概要



界大戦中にコロラド州キャンプ・ヘイルで訓練を積んだ第10山岳師団の存在である。復員した師団の兵士たちは、欧州で目にしたアルペン文化と高度なスキー技術を米国へ持ち帰り、アスペンやベイルといった世界的なリゾートの礎を築いた。1950年代から60年代にかけては、戦後の経済成長とモータリゼーションの進展を背景に、州西部の高冷地が急速に開拓される「スキーブーム」が到来した。1970年代に入ると、急速な開発に対する環境保護の機運が高まり、1976年のデューンバー冬季五輪開催を住民投票で返上するという歴史的事態を経て、開発の在り方は一変した。以降、州の公式文書や開発指針は、単なる斜面拡大から、国家環境政策法（NEPA）に準拠した自然との共生へと舵を切ることになった。現在では、かつての拡大路線を継承しつつも、歴史的な文化的遺産と脆弱な山岳生態系の維持を両立させることが開発の絶対条件となっている。

歴史的には右記のような変遷を辿りながら発展してきたが、マーケティングの視点から見ると、現在の米国のスキーリゾートの視察から顕著に感じら



ビーバークリーク Beaver Creek

ベイル・リゾートが運営するスキーリゾート。当初は、札幌の次に冬季のオリンピックを開催する予定で急ピッチに開発が進められたが、住民投票によって開催返上となったリゾート。しかしながら、このオリンピックの断念によって、開発に時間的な余裕が生まれ、グレンデとタウンとをゼロから総合的にデザインし、さらに、ベイル・スキー場の収益を開発原資とすることで、全面開業にこぎつけた。グレンデとタウンを完全一体型でゼロから開発できた「世界唯一」のリゾートとも表現される。全てが計画的に建設されたスキーリゾートであるため、グレンデとベース部、ゴルフ場、宿泊施設などが有機的に接続されているのが特徴。中心となるベースタウンは、傾斜を活かし、駐車場やシアターを埋め込むという立体的な構成となっていたり、スキーイン・スキーアウトやフェアウェイ・フロント（ゴルフ場）に対応した宿泊施設（コンドミニアム）が展開されていたりと、様々な工夫がなされている。さらに、隣接地に他の資本によって開発されたハイエンドのプライベート・リゾート（アローヘッド）を買収し、その間にザ・リッツ・カールトンを中心に据えたリゾート（バチェラーガルチ）を新規開発し接続することで、グレンデ面積を大幅に拡張するとともに、さらなるアッパー層へ展開した。スクールはプライベートのみ。ターゲット世帯年収は日本円で3,000万円以上。

なお、山岳エリアの下部にはエイボンという「一般的な街」が形成されており、安価に滞在することも可能。



ベイル Vail

アスペンと並び、コロラドを代表、象徴するスキーリゾート。ベースタウン、無数の最新索道、スクール、レストランが巧みに組み合わせられ、唯一無二のリゾート経験を創出している。もともとは、日本のスキー場と同様にスキーゲレンデとタウンは個別に、非計画的に開発されてきた（ベースとなるタウンは、スキー場の開発後に形成されている）。しかしながら、その開発の中でも、上質なリゾート空間の形成に向けた取り組みは、同時並行的に展開されてきており、80年代の後半、日本のバブル期には、日本のスキーリゾートが目指すロールモデルの一つとして多くの視察も行われた。その後も、ベイルタウンでは再開発、リノベーションが継続的に実施されてきており、2000年代以降には、多くの高級コンドミニアム、ハイブランドホテルによるパッケージクラブも立地してきている。なかでも、ベースの1つとなるライオンズヘッド・エリアは、2000年代に大規模な再開発を実施し、スキーゲレンデとタウンとが一体となったテーマパークのような空間を現出させている。

一方、スキー場を開発したベイル・アソシエーツであるが、1997年に破綻している。その後、現在のベイル・リゾートによって再建され、それから20年でベイル・リゾートは北米トップクラスのリゾート・オペレーターとなった。現時点でのスキーリゾートの一つのロールモデルであり、既存リゾートの再生事例でもある。ターゲット世帯年収は日本円で2,500万円以上。



アスペン Aspen

辺境にあった鉱山町が、第二次世界大戦をはさみ、北米を代表する超高級リゾートとなったという伝説的な街。北海道占冠村のトマムのモデルとなった地域であり、現在でも占冠村と姉妹都市提携を結んでいる。街区は米国の典型的な町と同様のグリッドパターンであるが、街中には、多くのハイブランド・ショップが立ち並び、近接するアスペン空港にはプライベートジェットが並ぶ。グリーン期には、財界人や知識人が集まり様々な社会課題について検討する「アスペン・アイデアズ・フェスティバル」の開催場所にもなっている。

運営者であるアスペン・スキーイング・カンパニーは、非上場のプライベート会社であり、その財務状況は明らかとなっていないが、非上場であるが故に短期的な収益についての関心は薄く、ベイル・リゾートとは対症的な動きをすることが多い。

確立されたブランドを持っているが、「やや古い」ものとなっていることも認識しており、若者の取り込みも積極的に行っている。XGamesの誘致は、その好例であるが、ブランドのコンフリクトにも直面している。

現在では、ベイル・リゾートに対抗するリゾートグループの象徴的な存在となっている。

れる特徴は、「顧客階層別のリゾート」が文化として根付いていることである。主に所得によって顧客セグメントを切り分け、それぞれに最適化した体験価値を構築することで、リゾートと顧客の関係性がより強固なものとなっていると考えられる。

11～13ページにかけて、研究会で定点観測を続けている7スキー場（タウンを含む）の開発の過程と、現在の顧客セグメント等について、それぞれ特徴をまとめた。

次世代の育成

コロラド州のスキーリゾートは、日本のファミリー向けスキー場と比較すると非常に標高が高く（ペイルはペイルで2476m、山頂は3527m）、上級者向けのスキー場が集積していると思える。しがしばしばある。しかし実際に足を運ぶと、初心者や小さい子供連れのファミリーが多く、その顧客層の圧倒的な厚みが印象に残った。この背景には、世代を超えて蓄積される顧客層形成に対するリゾート側の積極的な投資がある。子供や初心者は消費単価の大きさと数年後のロイヤ



カッパーマウンテン Copper Mountain

ペイル・リゾートが運営するスキーリゾートが複数立地する地域において、独立資本で運営されているスキーリゾート。1972年に個人資本によって開設されたリゾートであるが、その後、何回かの売買を経て、1997年、イントラウェストが買収。イントラウェストによって再開されたベースタウンは、2000年代のリゾート開発の1つのモデルである。特にゲレンデのベース部に、大きな広場空間をつくり、ベース部とゲレンデとの一体感を立体的に作り上げている空間構成は一見の価値がある。その後、イントラウェストの業績低迷に伴い、2009年に新興のリゾート・オペレーター、パウダーが買収。以降、イントラウェスト時代に整備されたベースタウンを活かしつつ、スキー、アウトドアの楽しさを前面に出した経営が行われている。

立地環境から早期に滑走可能となるため、アスリートのシーズン初期の合宿地としても有名。コロラド・リゾートエリアの玄関口にあたり、かつ、高速道路直結であるため、デンバーからのアクセスが良く、日帰り客が多いのも特徴。宿泊客の増大に向け、各種の施策を展開中。また、近年では、パーク施設の整備・拡充に注力することで、該当する顧客層の取り込みに成功している。これは、ペイル・リゾートがパークから徐々に撤退する動きとも連動しており、他社にとっては顧客獲得の好機となっていると考えられる。



キーストーン Keystone

ペイル・リゾートが運営するスキーリゾート。もともとは、ペイル・リゾート（スキー場）とイントラウェスト（タウンの不動産開発）が共同開発を行っていたが、2003年に分離。その後のイントラウェスト撤退、破綻によりペイル・リゾートがメインとなったが、タウン開発をイントラウェストが実施したために、ペイル・リゾートの運営でありながら、街はイントラウェスト・デザインというリゾートとなっている。

カッパーマウンテンよりもデンバーに近いが、高速道路からの距離があり、また、他の同社経営のスキーリゾートとの棲み分けのため、小さい子供連れファミリーを前面に出したマーケティングを展開。



ブリッケンリッジ Breckenridge

鉱山町として発展した旧市街地に、大規模なスキーリゾートが併設される事で形成。かつては、日本のヴィクトリアが所有していた。集客数は北米トップクラス。ゲレンデは、左右に広がった形状で複数のピークを持ち、これに合わせてベースも複数に分散する。旧市街地とスキー場、スキー場内の複数のベースを繋ぐ索道も有機的に整備されており、リゾートの一体感を高めている。ただ、旧市街地に直結しているベースは一つのみで、その他は新規開発となる。これら新規開発エリアは、ホテルやコンドミニウムなどの開発が行われ、スキーイン・スキーアウトを意識した空間設計がなされている。

ペイルに比して、ターゲット年収はやや低めとなっており（日本円で1,000万円以上）、非白人の顧客も多い傾向にある。鉱山町として形成された市街地も、現在は、歴史的街区として保全をしながら飲食や物販を楽しめる街となっている。日帰り客の増加に伴い、タウンでは宿泊税に加えリフト券に課税を行い、交通環境の整備資金としているなど、ペイル・リゾートとタウンとの共生を図っている。タウンの駐車場からスキー場へ接続されるゴンドラが象徴的。



ベイルのメインゴンドラ降車場の様子



カッパーマウンテン・スキー場の
キッズスクール専用棟(ロッジ)の様子

ルカスタマーとなる可能性、さらには次世代を育む可能性を十分に持つており、顧客生涯価値(LTV)最大化の観点からも重要な顧客として捉えられている。

例えばベイルでは、初心者向け斜面はリゾートの中心エリアに存在しており、大人向けの初心者スクールの客も多く見られる。初心者に対し、景色や斜面の質、アクセスなど、全てにおいてリゾートの中で「最良の条件」を提供している。ゴンドラ降車場はロードヒーティングによって雪が積もることはなく、ブーツの装着や移動にストレスを感じることもない。

また、カッパーマウンテンでは、ファミリー層を重要顧客と位置づけ、大人用チケット1枚に対し、15歳未満の子供用チケットを無料で付与するなど、



アラパホー・ベイスン Arapahoe Basin

カッパーマウンテンと同様にベイル・リゾーツ傘下の大型スキーリゾートが密集する地域において、独自色を強く打ち出す独立系のスキー場。1946年に開業し、北米有数の標高(ベース:約3,290m/山頂:約3,980m)を誇ることから、コロラド州内でも最も長いスキーシーズンを維持してきた。例年10月中旬に滑走可能となり、年によっては7月まで営業する年もある。特徴的なのは、初心者からエキスパートまで対応する多彩なコース構成と、イースト・ウォールやスティープ・ガリーズといったチャレンジングな上級エリアの存在である。こうした地形を活かし、競技者・エキスパート層からの支持も厚い。長らく独立運営を続けてきたが、2024年にはアルテラ・マウンテン・カンパニーによる買収が発表された。とはいえ、地域コミュニティとの結びつきやアットホームな雰囲気、手作り感のあるイベント運営などは維持されており、ベイル・リゾーツとは異なる顧客層からの支持を獲得している。また、山岳地形を活かした開発のため、ベースタウン型の大規模再開発は行われておらず宿泊機能は付帯していないが、標高約3,800mに位置する高所レストランや、予約制の駐車場システムなど、小規模ながら独自性のある運営がなされている。リゾートとしての派手さは抑えられているものの、一定の顧客層から厚い支持を得ている。

チケット料金による囲い込み戦略を取っている。スキー場内にはキッズスクール専用の棟(ロッジ)が設けられ、休憩スペース、おやつやランチ用の飲食スペース、専用のレンタル・フィッティングスペース等が完備されている。

従業員を含む 地域住民との関係

前述のように所得階層別に別れているリゾートエリアとは異なり、町(タウン)にはリゾート顧客と住民とが混在し、混雑・渋滞や生活スタイル・階層の違いからも各種問題が生じやすく、両者にとって居心地の良い環境を

創出することは、多くのリゾートにおいて課題となる。コロラド州のスキーリゾートにおいては、ブリックケンリッジやフリスコが従業員の住宅需要を賄う町となっている。このうちブリックケンリッジでは、20年以上にわたりタウンで働く従業員向けの住宅施策を取ってきた。特にコロナ禍での休眠期間を経たことで、行政にとってもその重要性がより強く認識されるようになり、2024年には2800万ドルを超える予算を安価な住宅供給計画に支出し、結果として2023年比で住宅戸数が3倍に増加している。

また州単位の施策としては、2022年に、これまで観光マーケティングや観光促進施策のために限定してい

た宿泊税の用途を、従業員住宅や保育サービス等に拡大させる法律が成立した(HB22・1117)。さらに、この法律をベースに2025年には宿泊税の上限を2%から6%に拡大し、その用途として、インフラ整備、環境保護、公共安全対策を新たに追加している(HB25・1247)。これらの動きからも、持続的なスキーリゾートの運営には、行政も関与した従業員向け・地域住民向けの施策が重要であることがわかる。

スキーリゾートにおける環境対策

スキー場経営において、コントロールが難しい外部要因であり、脅威になり得るのが温暖化による天然の降雪量の減少である。そのため、気候変動対策は引き続き全世界共通の重要課題である。米国のスキーリゾートでは、環境配慮は当然の取り組みとなっており、ビジネスリスクとして捉えた適応策が展開されている。例えば、ベイル・リゾートでは、基本戦略である「Epic Promise」において、「地域コミュニティへの社会的責任」、「多様性の推進」、「ガ

バナンス強化」と並び、「環境保全」を明確に掲げている。また、具体的な環境対策として「Commitment to Zero」(2030年目標)を掲げており、①CO₂排出実質ゼロ、②運用廃棄物100%転換、③森林・生態系への運用影響ゼロ(スキー場運用で失われた森林面積の復元・植林)を3つの柱としている。また、スキー場として取り

得る気候変動への適応・緩和策としては、人工降雪設備への投資(大規模投資による早期シーズンの品質保証)や、複数地域でのリゾート運営による地理的なリスク分散、人工降雪用水の大部分を春の雪解けで流域に還元する等による水資源の適切な管理などがなされている。

まとめ

本稿では、主に米国におけるスキーリゾートの開発や現在の顧客階層別のマーケティングについて、これまでの視察をもとにとりまとめた。また、スキーリゾートとして持続的な運営を行っていくための視点として、将来市場への投資、従業員を含む地域住民への施策、環境対策について記述した。

引き続きコロラドでの定点観測を続けるとともに、カナダや欧州における動向についても、研究会として知見を蓄積していきたい。

<参考文献>

Hitting moguls:The bumpy history of Colorado's ski industry and its potentially problematic future story and podcast by Stacy Nick published March 23, 2023 | updated Nov. 13, 2024(アクセス日:2026年2月23日)
<https://libarts.source.colostate.edu/the-audit-the-bumpy-history-of-colorados-ski-industry-and-its-potentially-problematic-future/>

Our History : A Legend in Colorado Ski History Since 1946(アクセス日:2026年2月23日)
<https://www.arapahoebasin.com/our-history/>

Breckenridge's 2024 affordable housing boom: What \$28 million achieved, summit daily, Jan 15, 2025(アクセス日:2026年2月23日)
<https://www.summitdaily.com/news/breckenridge-affordable-housing-inventory-cost/>

Vail resorts annual reports(アクセス日:2026年2月23日)
<https://investors.vailresorts.com/static-files/d2d0cd59-4274-433f-8a12-46b67ad4bab9>

〔座談会〕

国内マウンテンリゾートの可能性

長野県

インバウンドに

見いださされてきた

長野のスキーリゾート

「極上の雪」だけでは、人の暮らしこそが魅力の本物のリゾートへ」

世界的な雪不足の中、極上のパウダースノーが憧れの対象となる
長野県のスキーリゾート——志賀高原・白馬・野沢温泉。雪とともに地域の文化、伝統、祭り、食事などを楽しみながら長期滞在して時間を楽しむ、インバウンドのリゾート文化を日本人も自分たちのものにできるのか。

平澤 岳 (ひらさわがく)



山ノ内町長。元アルペンスキー選手、長野オリンピック日本代表。山ノ内町の中学校を卒業後アメリカ・バーモント州のストラットン・マウンテン・スクール卒業。

丸山俊郎 (まるやまとしろう)



白馬村長。白馬村出身、日本大学商学部卒業。オリエンタルランド、オーストラリアでのワーキングホリデー等を経て、白馬のしるま荘支配人。ワールドドラッグジュアリーホテルアワードで日本初のグローバルワイナー受賞。

上野雄大 (うえのゆうた)



野沢温泉村長。野沢温泉村出身、順天堂大学スポーツ健康科学部卒業。元フリースタイルスキー日本代表としてワールドカップで活躍。アウトドア関連会社の経営を通して雇用創出、空き家対策等を実践。

進行○山田雄一 (JTB F)
構成文○柳澤美樹子

特色ある三地域に暮らすように滞在

山田 日本のリゾートを見てみると、バブルの頃にリゾートブームがあった、さまざまな開発をするとか、新しいものをつくっていく、という時代がありました。それは振り返ってみると、

リゾートの箱の中で、結局のところ従来の観光をしていただけだったのでないだろうか。10年ほど前からは、インバウンドのお客さんが入って賑わうようになってきました。その人たちの過ごし方を見ることで、今ならもう一度「本場のリゾート」をやり直せるのではないかと、インバウンドのスキーヤー、スノーボーダーが訪



標高が高い長野県北部のスキーリゾートのパウダースノーは、世界的にも貴重な資源。これを求めて訪れるインバウンドが着実に増えている(写真は志賀高原)

れている白馬、志賀高原、野沢温泉に着目しました。長野県のマウンテンリゾートは、なぜそのように外国人を惹きつけているのでしょうか。

丸山 白馬には一番に、パウダースノーの魅力があります。本格的な山岳エリアに、リフトに乗ればすぐに行ける。その魅力が、20年前ぐらいから海外の人たちを招いています。その他の白馬の魅力は、ナイトライフがあることです。スキーを終えても、地域の人のコミュニケーションや温泉を、普通に楽しめるようになっていきます。ホテルや旅館、民宿などでも外国人を受け入れています。昔のペンションブームの頃に開業した宿泊施設が、日本のスキーブーム衰退後にオーストラリア人などの経営に変わり、早くから外国人を受け入れる様式にしたことも訪れやすくなった要因かもしれません。また、近年はキッチン付きの宿泊施設に泊まって自炊するケースも多く、スーパーマーケットが賑わって地元の人が買い物しづらいといった課題も出ています。

平澤 山ノ内町は少し様子が違って、志賀高原から下りてくると湯田中渋温泉郷があり、それにプラスしてスノー

モンキー(地獄谷温泉に入る猿)がいます。スノーモンキーを見に来るだけの外国人もいます。志賀に1週間ぐらい滞在しながら、朝からスキーをして、午後からは猿を見に下りてきて、夕食も温泉街の居酒屋で、という人もいます。中には、長野市まで食事に行っている人もいます。オーストラリア人やアメリカ人が少しずつ増えているところで、山ノ内町は雪プラス、猿プラス、そば打ちなどの文化的要素も組み合わさったところが、徐々にインバウンドを呼んでいます。

上野 野沢温泉は、もちろん最初はパウダースノーがフックになって来てくれるのですが、日本らしさ、もつと言うと野沢温泉らしさ、豪雪地帯での独自の暮らし、というようなところに興味・関心をもっていただいていると思います。その象徴的なものが毎年1月13〜15日に行われる道祖神祭りです。この火祭りを実際に見て感動してくれる方もいるし、日々の暮らしや街並みの中にもこのお祭りの名残のようなものがあります。それを感じてくれる方もいます。野沢温泉には「外湯」があつて、それを利用する外国人も多く見られます。とても熱い温泉なので、



温泉に入る野生の猿「スノーモンキー」として海外にも知られる、地獄谷野猿公苑のニホンザル(山ノ内町)



志賀高原の麓・湯田中渋温泉郷は日本の温泉街らしい情緒がある。志賀高原のスキーリゾートまでは、場所によってバスだと30~80分ほどかかるが、外国人は食事などをしに下りてくる

以前は熱くて入れないと戸惑っていたのが、最近では幸せそうな顔で入っている人が増えていきます。国籍を超えて楽しんでいられるのを見ると、やはり温泉の力はすごいと感じます。野沢温泉独自の文化や暮らしを求めて来てくれる人がいて、深みがあるのがいいと思います。泉なので、マナーの問題でストレスがあつたりもするのですが。

山田 リゾートとは、長期滞在したくなるようなライフスタイルのある場所だと考えているので、まさにそれですね。来ている人たちは、予め単なるスキー場ではなく、そういう場所だということを知って来ているように感じますか。

上野 そうですね。たぶんネットの情報などで知った上で来ているのだと思います。野沢温泉は、リゾートとし

ては不便な部分があると思います。どこも歩いて行くしかなかったり、パークキングも多くなかったり。しかし、そんな不便さも飲み込んで、地域の魅力を感じ取ってもらえているのはうれいですし、そういう地域なんだとこちらが改めて認識させられています。

山田 インバウンドは長期滞在するケースも多いですが、従来の1泊2食付きの宿泊スタイルからの変化はありますか。

上野 来る方も受入れ側も知恵がついて、お店が増えてきて外食に出ても選べるようになったり、2室を1室にしてキッチン付きにした部屋なども増えてきて自炊できたりと、変わってきています。村民の暮らしに近いような滞在時間を楽しむ人が増えているように思います。

山田 滞在が長

期化し、素泊まりで自炊や外食をする人が増えると、宿の収益構造や人員配置の変化がある一方、飲食店や小売店へは消費が波及します。スーパーマーケットの混雑の話がありました。リゾートのライフスタイルに合う受け皿の整備と、互いに気持ちよく過ごすためのルールの浸透が必要になりますね。

上野 インバウンドの急激な増加で、特に普通に暮らしていた年輩の方へのインパクトが大きくて、目先の問題を解決する必要に迫られています。そこで地域のルールのようなものが外国人にもわかりやすいように動画を作りました。ゴミの問題とか、温泉の使い方、騒音などのテーマ別に、5本立てにしたところ、効果が出ています。また、住民構成が変わると元から住んでいる人の肩身が狭いような雰囲気になってしまう。それは間違っているので、いろいろなところで「村民の暮らしが資源、村民自体が文化財みたいなものだ」と言って、村民のみなさんが、ここは自分たちの村で、暮らし自体に魅力があるから外から来てもらっているんだ、という心構えをもってもらえるような取り組みをしています。



野沢温泉の源泉の一つ「麻釜(おがま)」は90℃を超える温泉が湧く。
村人はここで野菜や山菜を湯がき、アケビ蔓を浸して柔らかくするなど生活に使っている

動きから逆算する 広域プロモーション

山田 日本のスキー場はパウダースノーが人気になってお客さんが増えていますが、まだ、マーケティング的には「アーリーアダプター」とか「エバンジェリスト」というような人たちが、「日本というすごいところを見つけたぞ」という感覚で来ているように感じます。それが今、世界中にジワジワと広がってきている印象です。

平澤 志賀高原は志賀高原索道協会が海外向けに積極的にPR活動をしていて、志賀高原プリンスホテルでは昨年比、オーストラリアが140%、アメリカが240%、シンガポールが500%と言っていました。シンガポールに関しては一昨年の分母が小さかったということだと思いますが、いずれにしてもオーストラリア以外が特に増えています。アメリカ向けのプロモーションに力を入れていて、アイコン・パスにも参加しています。ただ、アーリーアダプターが来ているというのは確かで、その状況がずっと続いているように思います。それに続くマー

ケットにアプローチするには、外国人が満足できるようなホテルが少なすぎます。妙高杉ノ原にシックスセンスズができる計画が発表されましたが、そういうトピックがあればチョイスに入ってくると思うのですが、現在の志賀高原のように、ローカルなホテルしかない場所に外国人のマスが来るとは思えません。

山田 アイコン・パスの話が出ましたね。ハクバ・バレーでは以前からエピック・パスに加盟していますが、やはりメガ・パス(※)はポジティブに影響していますか。

丸山 細かい数字まではこちらに入ってきていませんが、入込数を見ても、ある程度利益があるところを見ても、効果はあるのではないかと思います。

山田 野沢温泉はどちらのメガ・パスにも入らず独自の取り組みをしています。スキー場のマーケティング、プロモーションはどのようにしていますか。先ほどお話があったように、文化的な面もありますし、オリンピック会場になったり、オリンピックを輩出したというスキー競技を通じてのブランディングもあるかと思いますが。

上野 オリンピアンや競技選手が経

③ 国内マウンテンリゾートの可能性

験を活かしてスキー場の運営を下支えしています。人材育成が地域で機能していることで、結果的に競技大会や合宿なども大切に、様々なジャンルの皆様を受け入れることができる特別な打ち出しができています。また、DMOの野沢温泉マウンテンリゾート観光局では、野沢の暮らしとか祭りとか、文化・伝統という特色あるものを売っています。実際に来た方の満足度は高いので、口コミのようなものがすごく効いて、インバウンドにアプローチしているのだと思います。

山田 地球が温暖化している中、雪がちやんとあつて、しかも雪質がいい。これは世界的にも希少な資源です。お客さんの方が、日本でニセコだけではなくいろいろなところを探し始めている中で、SNSの情報などで白馬、野沢、志賀に訪れているということでしょうか。スノーモンキーなんか昔からいきましたが、いきなり発見されたかのように注目されています。

平澤 長野オリンピックの頃にもBBCや『ナショナル・ジオグラフィック』などに取り上げられて少しずつ広まっていたものが、ここ7〜8年で一気に知名度を上げたようです。SNS

の拡散力が大きいと思うのですが、今年は30万人以上入ってきて、パンク状態です。

丸山 白馬からも2006年ぐらいからスノーモンキーのバスツアーが出ていますね。

平澤 意外と冬以外にも猿を見に来るんです。春先に子猿が生まれて、足

元で遊んでいようものなら、外国人が「萌え」となっています。

山田 外国人は滞在中に2時間、3時間かけてどこかに行くのは厭わないので、白馬からスノーモンキーを見に行こうとか、野沢温泉でお祭りがあるから行ってみようとか、しているのですね。行ってみると、その上の方に

いスキー場があるらしいと。

平澤 最近、夜中にバーで出会った外国人は、1週間白馬にいて、次の1週間は志賀を拠点に野沢温泉に行ったり、斑尾まだらおに行ったり、いい雪を求めて動き回っていると聞いていました。彼らにしてみたら、「周辺にいいスキー場がいっぱいあるよね」という距離感



野沢温泉には13の外湯があり、村民が管理している。その象徴とも言える「大湯」は薬師三尊が祀られる湯屋建築で、象徴的な存在

です。それを考えると、我々も広域でブランディングして、プロモーションすべきだと思います。

山田 野沢温泉もいろいろなところ
にアクセスできるポジションにあると
思いますが、野沢のお客さんもホッピ
ングのようなことはしていますか。

上野 増えてきてはいると思います
が、アクセスがネックになっています。
白馬や志賀とは事情が違って、野沢温
泉に来る人たちのほとんどは車であ
りません。スキーに来ている人は、徒
歩圏内で遊んでいます。

山田 はじめは北海道に行つたけれ
ど、長野県で白馬に来てみたら、志賀
もあるらしい、野沢もあるらしい、と。
それなら来年は、どちらにも行ってみ
ようと、インバウンドもスキルを上げ
てきているのですね。

地域の魅力を支える コミュニティの懸念

丸山 ニセコに行っていた人たちが、
外国人ばかりになりすぎて、また物価
も高くなつてしまったから、白馬に。
また白馬もそうなってきたから野沢
に。というような話を、ここ2年ほど

聞くようになりました。白馬ではオー
バーツーリズムの課題が出てきてし
まっています。どこからでもレン
タカーで入ってこられるので制限の
しよつがありません。

上野 先ほど道祖神祭りの話が出ま
したが、今は祭りの期間は村内宿泊
者しか入れないようにしています。

丸山 野沢温泉のように、入口が1
〜2カ所しかないようなところの方
が、将来的にはとても優位性がある
と思います。地域の中で経済循環も
するし、長期的にメリットがあります。

白馬は広くて流入をコントロールす
ることが困難であるため、レンタカー
による事故なども多くなっています。

山田 需要があるのは非常に好まし
いけれど、それに伴つてハレーショ
ンも起こりえますね。北海道では地
価の高騰や物価高が問題になつてい
ますが、それはどうですか。

平澤 山ノ内ではまだ、外資に土地
を買われたというような問題は起
こつていなくて、ホテルのM&Aが
少し動き出しているところです。一
般財団法人山ノ内町づくり観光局が
委員会を立ち上げて、課題を割り出
しているところですが、最も気にし

たのは外資の参入ルールをどうするか
という問題です。これも委員会でき
たから出てきたので、現状、問題にな
っているわけではありません。今のうち
に何かしらのルールを作っておく必要
があるね、という段階です。元々志賀
高原はほとんどが和合会(地元の入会
地等を管理する団体)が所有する土地
なので、土地の売買はできず上物だけ
ですし、建物の変更には国立公園の
ルールがあるので、買う側にはそこま
で魅力的でないのかもしれない。

丸山 白馬は場所によつてですが、
長野オリンピック前のスキーブームの
頃に最も土地が高くなつた時期があつ
て、その後、10分の1から場所によつ
ては20分の1くらいまで落ちていま
す。そこからもう一度上がつて来てい
る局面なのですが、そこで元々土地を
所有していた人が手放す状況になつて
います。民間取引なので仕方ない部分
なのですが、そうなるとプレイヤーが
変わつてしまうので、地域コミュニ
ティの維持が困難になる、という問題
が生じます。

上野 野沢温泉もコミュニティの崩
壊が課題になっています。野沢温泉は
文化、歴史、伝統、祭りが観光のコン

テンツのようになっていて、それを下
支えているのが地域コミュニティ、
住民です。共同浴場もその中にありま
すが、支えてくれていた人が抜けて空
洞化する現象が起こり始めています。
本来、土地を求めたい人も観光客も、
そういうところが魅力で来るのに、地
域の良さがなくなれば離れてしまつ、
という悪循環が懸念されます。所有者
が変われば古い建物がきれいになつて
街並みもよくなるし、サービスが上
がるという側面もあるので、バランスな
のですが……。肝腎なところが薄く
なつて、気づいたら野沢温泉が野沢温
泉でなくなる日が来てしまうのではな
いかという心配があります。観光業で
恩恵を受けない、事業者以外の住民か
らすると、土地を手放そうとする心理
は当然のことかもしれないのですが。

ゾーニングや 地域通貨で守る 暮らしと地域の魅力

山田 野沢温泉では、1年ほど前に
少し高層の建物を建てたいという話が
出ましたね。野沢の温泉街は白馬のよ
うにいろいろな場所に分散しているの



白馬岩岳マウンテンリゾートには展望テラスが突き出し、正面に白馬鑓ヶ岳、白馬岳、杓子岳など3000m近い山々、下にはスキーヤーやスノーボーダーも望める。グリーンシーズンにも人気の大自然絶景スポットだ

ではなく、面積の狭いところにギョツと詰まった街並みが持ち味で、そこに投資が入るとあの空間を維持するのが難しくなりますね。

上野 確かにまとまった土地はないのですが、工夫次第でできることもあると思っています。今はほぼない、別荘のようなものや、スキーイン・スキーアウトできるようなホテルも可能性が 있습니다。またこれは計画的にやらなければならぬのですが、温泉街に住んでいる人が、土地建物を所有したまま、住みやすいエリアを整えてそちらで暮らしてもらおうとか。そうすると、価値が高いところにベッド数を確保できて、多くの人を呼び込めるのではないかと。

丸山 白馬でも用途規制の話が出てくるのですが、既に混在しているところでコンセンサスを取ることが困難であることなどが課題です。

平澤 エリア制限で言うと、山ノ内町と湯田中区では、1年以上前から議論しています。地元のコンセンサスを取りながら、温泉街を住宅にしないでお店として再生していく前提で、協定を結んでいこうというものです。法的拘束力はもちませんが、区としてその

ような事例をつくっています。

丸山 土地の価格については、県の方で監視区域の設定ができるかというところですね。あくまで監視で許可ではないのですが、一定の牽制機能を持ち、また実際の動きをモニタリングできる効果もあります。土地を手放すきっかけとしては、相続税も問題です。死亡日の時価評価額に基づいて計算されるので、周囲の価格が高騰すると支払えないような税額になってしまうことも生じます。これは、制度の見直しが必要だと思っています。

山田 インバウンドが入ってきて、物価はどうですか。

丸山 二重価格という抵抗があるのですが、地域住民向け価格の設定はありうると思います。とはいえ、あからさまに地元価格・それ以外の価格、というのは事業者としてやりにくい面もあると思います。白馬村と小谷村では地域通貨の「アルプスPay」を始めたので、これを使えば対外的には表示せずに、住民だけが割引きされる仕組みが作れます。スマートフォンのアプリケーションに現金をチャージすると加盟店で使えるという仕組みですが、登録するときにマイナンバーで住

民認証をするので、村民だけが使えます。事業者の協力ができないことですが、こうしたことを実践しないと将来的に地域として立ちゆかなくなるということを理解していただくタイミングなのかなと思っています。

住民の幸福な暮らしが魅力あるリゾートに

山田 野沢温泉では文化とそれを支える住民がいる、という話がありましたが、私もリゾートは住んでいる人たちが楽しんでいるライフスタイルを、お客さんもいっしょに楽しむものだと思います。なので、住民はだれもスキーをやっていないのに、お客さんだけスキーに行くというのは違うと思います。リゾートのお客さんは1週間、その土地の生活を疑似体験するというのが、リゾートの魅力です。

平澤 町としては、住民が生活しやすい環境づくりをやっているのですが、その中で、地元の人実はぜんぜんスキーをしていないじゃないかというところに課題を感じています。今回、志賀高原索道協会と議論の末、町民に格安でシーズン券を出してもらえ

とになりました。約10万円のシーズン券が、3分の1以下の金額で買えるのです。そういう細かいところで、住みやすさをつくっていつています。移住してこようという人は、そもそもここが好きになって、スキーもやりたいと思ってくるのですから、メリットも増やさないよ。

山田 野沢温泉では、村民がスキーをやらないうのはどうですか。

上野 そもそも、冬依存のビジネスモデルで走り続けたが故の弊害ですね。冬は休みなく稼いで夏は何もしないというのを、ファミリービジネスでやってきたわけです。そうなる滑りに行く余裕もないし、子どもの面倒も見られない。そんな生活が、後継者不足にもつながっています。なので、冬だけに依存せずに平準化していくよう、野沢温泉マウンテンリゾート観光局でも梃子入れしたいと思っています。冬にも週1回は休みを取ってスキーに行ける。その分、収入は夏場に穴埋めできるというものです。

山田 外から来た人が羨ましくなるような暮らしを住民がしているのが、リゾートの理想ですね。

平澤 先日、湯田中で飲んでいたら、

外国人たちから、野沢に行ってきたけれど、オーストラリア人ばかりで日本人がいなさすぎるので湯田中に来たら、ここは日本人ばかりでいいね、と言われました。野沢は経営している人たちも外国人が多いですからね。日本人に交じって食事したいのに、見回したら、提供している人も食べている人もみんな自分たちに似た仲間だったと。おかげさまで、湯田中駅前の定食屋がとても繁盛しています。外国人もたくさんいるのだけれど、昼間からカウンスターで飲んでいる地元のおじちゃんがいる。そういうのがいいのだよ。

山田 特に平日は日本人が少ないから。今でも日本人は土日しか動かないんですね。自分たちは1泊2日で慌ただしくスキーをして帰っていく横で、せっかく天気がいいのに昼下がりに外国人がラウンジでゆったりしている。自分が使っているホテルでも、そういうことができるんだということを感じて、次は2泊してそんな時間をつくってみよう、ということをしてもらえると、日本のマーケットも少しリゾートらしい過ごし方になってくれるのではないかと思います。ありがとうございます。



野沢温泉・山ノ内・白馬の各町村長。
長野県を代表するウィンターリゾートの指揮を執る

※メガ・パス……エピック・パス (Epic Pass)、アイコン・パス (Icon Pass) が、世界の名門スキーリゾートで使える二大定額シーズンパス。エピック・パスは、北米、カナダ、ヨーロッパ、オーストラリアなど66のスキー場で使用可能。日本では、ハクバ・バレー (白馬エリアの10スキー場)、ルスツスキー場。アイコン・パスはパリエーズ・タホ、マンモスマウンテンなど70以上のスキーリゾートで使える。日本では志賀高原、ニセコ、安比など。どちらも早期購入で割引率が高い。

「座談会」

国内ビーチリゾートの可能性

石垣島

石垣島の
滞在魅力を
育み続ける

地域主体の
リゾート形成へと向かう
これからの歩みを描く

「自然」と「人」の魅力で人々の心を惹きつける石垣島。
2026年度中の宿泊税導入という転換点を控え、
これまでのビーチリゾートとしての歩みを振り返るとともに、
地域が主体となる持続可能なリゾート形成に向けた
未来へのビジョンを多角的に語り合った。

出席者



高橋秀明 (たかはし・ひであき)



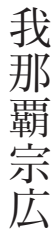
石垣市観光交流協会副会長、石垣シーサイドホテル取締役総支配人、埼玉県草加市出身。石垣島に移住して32年。島の魅力は海と空、そしてそこに暮らす人の温かさを信じて石垣島のブランド価値向上に取り組み。未来の石垣島が「世界から選ばれ続ける島」であるための新たな観光コンテンツ創出に情熱を注ぐ。



赤城陽子 (あかぎ・ようづる)



石垣市観光交流協会理事、宿泊部会長。株式会社サンシャイン石垣島ビーチホテルサンシャイン代表取締役社長。2005年に同社入社、常務取締役総支配人、代表取締役副社長を経て、2025年より現職。石垣市商工会理事兼観光部会副会長等を歴任。なお同ホテルは2025年12月、サステナブルツーリズムの国際基準GSTC認証取得。



我那覇宗広 (がなは・むねひろ)



八重山ビクターズビューロー専務理事。日本トランスオーシャン航空株式会社で監査部長、販売部長、経営企画副部長を務めた経験を活かし、観光情報の収集分析や観光客の誘致および受け入れに関する戦略作成等に従事。



西銘基恭 (にしめ・もとやす)



石垣市観光文化課課長、博物館建設準備室室長。2003年に石垣市役所に入庁。これまで石垣市観光基本計画、同改訂版の策定に従事。商工振興課長を経て2023年より観光文化課長。2024年より博物館建設準備室室長を兼務。

進行○山田雄一(JTBF) 撮影○西野嘉憲 構成・文○成田美友

圧倒的な自然と
人々の暮らしが
共存している

山田 国内において沖縄県は圧倒的な
観光の魅力を放っていますが、その中

でも石垣島は、ビーチリゾートとして
非常に勢いのあるエリアです。地理的
に見れば、本土からは「はるか彼方」
であり、物理的な距離やアクセスとい
う点では不慣れな場所といえるでしょ
う。にもかかわらず、なぜ多くの観光
客を惹きつけ、一度ならず二度三度と

訪れるリピーターを生み出し続けているのか、現地で長年、事業や行政に携わっておられる皆さんの視点から、石垣島の魅力の核心についてお話を聞きたいと思います。

高橋 私は約30年前に東京から移住してきました。石垣島の魅力といえば、やはり素晴らしい風景が最たるものだと思います。では再訪する方々にとってはどうかと考えると、実は「人」に魅力を感じておられるのではないかと長年の経験から感じています。というのも、リピーターの方々に旅の目的を伺うと「今回の旅には特に具体的な目的はない」と答える方が少なくありません。普通、旅行といえは「きれいな海でダイビングをしたい」、「あの絶景を見たい」といったアクティビティや観光を楽しむための目的があるものですが、石垣島のリピーターの場合は、例えば「あの居酒屋の親父さんと話がしたい」、「あの土産店のおばあに顔を見せに来た」といったように、人に会う、島のコミュニティと関わるためにいらっしゃる方が多いのです。

もちろん、石垣島の豊かな自然やそこで育まれる食材、受け継がれてきた伝統や文化といったいわゆる観光資源

は日本屈指のものであります。しかし、それらを包み込む「人」の温もりや、外から来た人を自然に受け入れる懐の深さこそが、何度もこの島に足を運ばせる最大の磁力になっていると実感しています。

赤城 私は石垣島で育ち、高校卒業後に進学のために上京。20年前に島に

戻ってきました。島を一度離れたからこそ、改めて感じたのは、石垣島は自然との距離感が圧倒的に近く、日常と豊かな自然が共存しているということでした。

高橋さんがおっしゃるように、「人」のつながりが再訪の決め手のひとつになっていると私も思いますが、その

背景には、最たる魅力である自然を満喫するために、高い山に登ったり、遠出をしたりと特別な行動をしなくてもいいという、八重山エリア特有の自然との距離感があると感じています。

我那覇 私たち八重山ビジターズビューローでは、「島色、無限大∞」というキャッチフレーズのもと、石垣市、竹



④ 国内ビーチリゾートの可能性

富町、与那国町の魅力を、海洋・自然・動植物、文化・芸能、食、島の人たち・島々の個性、風情、工芸・陶芸、そして星という8項目で表現しています。これほど多種多様な資源がひとつのエリアに凝縮され、かつ住民の意思によって大切に保護されている場所は、国内で八重山だけではないでしょうか。

非日常と日常が交じり合う土着感という魅力

西銘 ビーチリゾートという観点で考えると、石垣島のリゾート感は、沖縄本島とは少し毛色が違うように感じます。例えば本島の西海岸には巨大なリゾートホテルが立ち並び、その敷地内で非日常の空間が完結しています。石垣島の場合は、リゾートがもつ住民のライフスタイルに近い場所にあり、つまり、観光と人々の暮らしがインテリアとして混ざり合っていて、その土着感や生活感といったものが独自の魅力になっていると思います。南ぬ島石垣空港開港時のPRソングに「おかけり南ぬ島」という曲がありました。これが、「おかけり」という言葉がこれ



ほど似合う島はありません。

我那覇 そのライフスタイルを支えるインフラについていうと、石垣市は人口約5万人に対し、年間でその30倍近い観光客を受け入れています。常に1万人ほどの観光客が島内に滞在していることになり、宿泊施設は5000を超え、その収容人数は1万9000人に

上ります。さらに飲食や物販の施設も充実しています。

つまり、観光のおかげで実質的には約6万人の都市としての機能をもっていることになり、離島でありながら市街地は那覇市にも引けを取らない都市としての利便性と、手つかずの自然が隣り合わせになっている。こうしたイ

ンフラの厚みが、単なる観光地ではなく、長期滞在やイターン移住の候補先として、石垣島が選ばれる大きな理由になっていると思います。

赤城 また石垣島では、観光の土台をかたちづくる際、イターン移住者の新しい感性が欠かせなかったと思っています。地元のみで育てた観光では



フェリーネットワークが 生むリピータ性

我那覇 宮古島と比較すると、それ
 ぞれのよさが見えてきます。私は、
 宮古島の観光は「ブリッジネットワー
 ク」だと考えています。年齢を問わず、
 天候に左右されずに、車で橋を渡っ
 て島々を回れる利便性がある。その
 一方で、一度の旅で主要なポイント
 を回れてしまうという側面もあるか
 もしれません。

ない分、発展的で非常にオープンであ
 る一方で、地域の方々がいるからこそ、
 石垣島独自の魅力も守られてきまし
 た。そして今、その両方のバランスが
 非常にうまく機能していると感じてい
 ます。

山田 時代とともに都市サービスや観
 光インフラが進化している一方で、根
 底にあるコミュニティの心地よさや自
 然との距離感が損なわれずに、ストッ
 クとして積み重なっている。それが今
 の石垣島ならではの総合的な魅力につ
 ながっているということなのですね。

これに対し石垣島は、竹富町の島々
 を船で結ぶ「フェリーネットワーク」。
 天候や船の時間を調べ、海を越えて島
 に渡る。このプロセス自体が旅の醍醐
 味であり、一度の旅ですべての島を
 回ることは難しいため、「次はあの島
 に行こう」と「新たな楽しみ」が生ま
 れる。これがリピーターを増やす要因
 になっているのではないのでしょうか。

景観についても、透き通った海や白
 い砂浜のグラデーションに象徴される
 宮古島の「地平線に広がるアクア・ブ
 ルー」に対し、八重山は「立体的な
 デイープ・ブルー」。石垣島には沖縄
 県最高峰の於茂登岳おもとだけがそびえ、西表島

には世界自然遺産に登録されている豊
 かな森林があり、石垣島と西表島の間
 には日本最大級のサンゴ礁海域「石西
 礁湖しよこ」が広がっている。その自然が希
 少な動植物を育み、多様な生態系を
 守っています。この奥行きと幅広さが、
 何度訪れても新しい発見がある、飽き
 のこない魅力につながっていると思い
 ます。私は宮古島の自然も大好きです
 ので、八重山も宮古島も含めて、先島
 諸島全体で観光を盛り上げていきたい
 ですね。

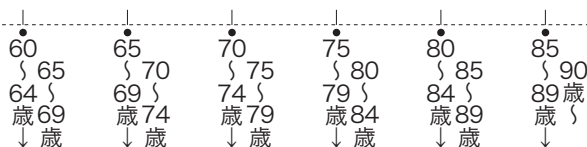
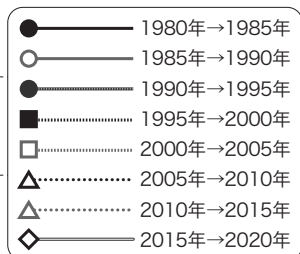
山田 車で簡単に回れないという不便

観光客と島民が お互いを受け入れ 尊重し合う

さが島のひととのタッチポイントを生
 み、リピーターの動機になっているとい
 うことですね。

山田 皆さんから多層的な魅力を伺い
 ましたが、石垣島の場合は「訪れる」
 方だけでなく、「移住する」方が多い
 のも特徴だと思います【図①】。

西銘 自然環境や独自の生活風習、そ



【出典】RESAS:総務省「国勢調査」、厚生労働省「都道府県別生命表」に基づき
 デジタル田園都市国家構想実現会議事務局作成

④ 国内ビーチリゾートの可能性



して多様な背景をもつ人々が交ざり合うことから、石垣島の風土は「チャンブルー文化」や「八重山合衆国」などと表現されることもあるくらいですからね。

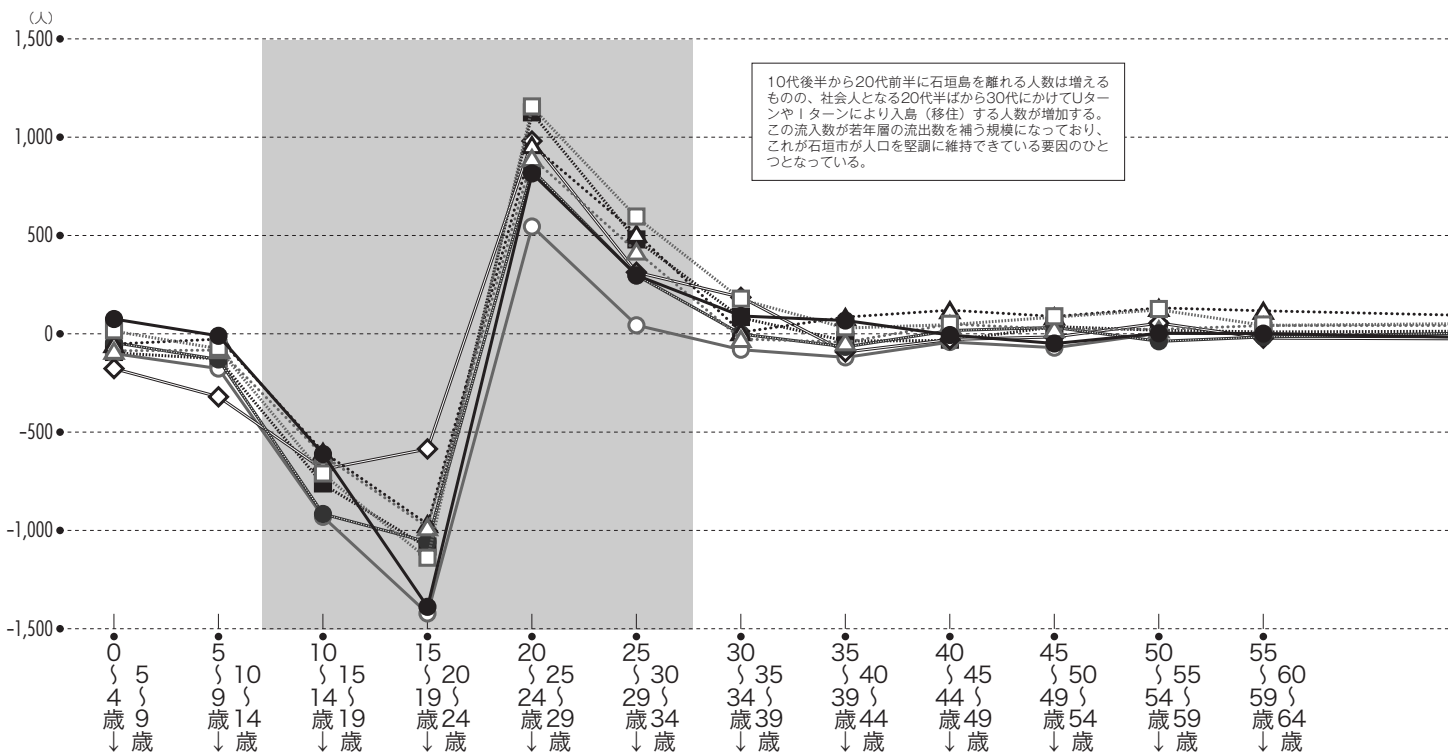
山田 実際、国内の多くの地域が人口減少に悩む中で、石垣島は移住者によって人口が維持されています。人々が「この島で暮らしてみたい」と思うのはなぜなのでしょう。

高橋 私自身が約30年前に移住して来ず感じたのは、ライフスタイルが都会とはまったく異なるということでした。言葉も食べ物も考え方も違う。そこに都会の日常とは違う解放感がありました。また地元の方々は、島の外から来た私に対して構えることなく、受け入れてくれました。その適度な距離感も非常に心地よかったですね。また、都会では始発や終電、分刻みのスケジュールなど、つねに時間に気がしながら生活していましたが、石垣島ではそれとは違う時間が流れています。そこに心の安らぎを感じました。

観光で島を訪れる方にとっても、そうした精神的なゆとりや、都会的な価値観からの解放を体験することが再訪の理由となり、「暮らしてみたい」という想いにつながっていくのではないのでしょうか。

山田 利便性といった機能的なサービスだけでなく、島の人々の飾らない日常にふれることで、心が豊かになる暮らしを疑似体験できることが人々を引き付ける力になって

図① 年齢階級別純移動数の時系列分析—沖縄県石垣市



いるということですね。

赤城 私が面白いなと思っっているのは、石垣島には伝統行事がたくさんあって、それらが閉鎖的ではないという事です。豊年祭にしても海神祭（ハーリー）にしてもメインの神事はだれでも見学できます。もちろん、ここには守るべき一線がありますが、石垣島に来てくださるお客様たちは、地元文化に敬意をもって尊重してくださる方々で、それが地域のウェルカムな雰囲気につながっていると感じています。

そうした大切なものを守るという想いが長年、自然と共有されてきたおかげで、これまで大きなトラブルもなく共生できてきたのだと思います。さらに2024年には、島の自然と暮らしを守りながら、これからもこの島で旅を楽しんでもらうための「マナー」として、石垣市が「ツーリストシップ石垣島4ヶ条」*を策定しました。そうして「マナーやルールを明確にしておくことも未来のために大切なことだ」と思います。

高橋 地元の人たちが観光を商売としてだけでなく、自分たちの日常の延長としてオープンに見せていることが、

結果として島を訪れる方々からの強い共感を生んでいるのでしょね。

赤城 そういう意味では、観光が動き始めたときに、山田さんが最初におっしゃったアクセスの不便さが実は大事なポイントだったのかもしれない。私の祖母はよく、「せっかかくここまで来たのに」と言っていました。観光客には「不便なところにせっかかく来たんだから」という想いがあり、地元民には「遠いところにせっかかく来てくれたんだから」という想いがある。それが相まってお互いを受け入れ、尊重し合う風土につながってきたのだと思います。

移住の鍵となる 自然と都市機能の 調和

我那覇 私は、石垣島へのUターン、Iターンが多い理由は、グランピングに近い感覚にあるように感じています。キャンプをするように大自然を体験したいけれど、寝る場所や食事、ネット環境といった日常の快適さは手放したくないという層がグランピングを選ぶように、圧倒的な自然を身近に感じた

けれど、仕事を含め、日常生活は不自由なく送りたいという層がいると思います。その方々にとって、極上の自然体験と質の高い都市生活のバランスを自在に選択できる石垣島は絶好の環境です。それが若い世代や子育て世代を惹きつける最大の要因かもしれません。

西銘 実際、観光が発展し、観光客が増えたことに伴い、リゾートホテルでの雇用はもちろん、独自の視点でビジネスを始める個人事業主が増えています。そうして観光で食べていける島になったことも若者の定住やUターン、Iターンを後押ししていると考えられます。

赤城 ただ、開業も多ければ閉業も多いのが現状です。なぜ事業を継続できなかったのか。単なる集客不足なのか、人材確保の問題なのか、あるいは島特有のコスト面の問題なのか。こうした課題をデータに基づいてひとつずつ紐解いていくことが、これからの持続可能な観光と地域形

成に不可欠だと感じています。

山田 観光の安定的な集客が大型商業施設を含めた企業からスタートアップまで、さまざまなビジネスの進出を促し、それがまた生活の利便性を高めて移住者を呼ぶという、都市としての自立に向けた好循環が生まれているわけ





ですね。

西銘 そうですね。また、そうした経済循環の中にチャンスがあると思つて島にやってくる方がいる一方で、逆に仕事の成功だけを追い求める都会的な価値観ではなく、「家があつて、海があつて、自分らしく暮らせばいい」という、南の島らしいライフスタイルに豊かさを見出し、移住を決める方がいるのも石垣島の特徴だと思います。そうした石垣島ならではの空気感が島全体の幸福度を支えている気がします。

石垣島のブランド力をさらに高める

山田 ここまで、石垣島の観光が積み重ねてきたものと、その中で育んできた独自のコミュニティの強みについて伺ってきました。こうした中、石垣市では2026年度中の宿泊税導入が決定しています。これは、自治体が自らの意思で独自の観光政策、地域づくりに取り組み、未来を描くための大きな原動力になるはずです。

そこで、この財源をどのように活用し、観光客と住民の双方が「観光があつ

てよかつた」と思えるような地域主体のリゾートをどうかたちづくっていったらよいとお考えでしょうか。

西銘 宿泊税によってブランド力をさらに高め、滞在日数を延ばすことで、いわゆる「数の観光」から「質の高い観光」への転換を目指していきたいと考えています。そのためには、宿泊税を単なる行政予算として消費するのではなく、地域に循環させることが鍵となります。





例えば、ビーチリゾートの核心である海の活用です。実は、石垣島では夏場に一般市民や観光客が安心して泳げる公共ビーチは限られています。それは常駐のライフガードを雇用するのが難しいなど、人件費の確保や維持管理の負担が大きいためですが、宿泊税をこうした公共インフラの安全と質の向上に充てることで、だれもが安心して海を楽しめる環境をととのえられると考えています。

ほかにも、地産地消の食材をBBQで楽しめる公園の整備やリピーターが多いダイビング業界への支援、さらには二次交通の整備など、観光客、事業者、住民の三者が宿泊税導入のメリットを感じられる施策の実施も考えられます。

赤城 私たち宿泊事業者の視点からは、宿泊税導入を機に、世界に選ばれるビーチリゾートとしての立ち位置を改めて明確にしたいと考えています。それは「アイランド」として石垣島単体で完結するのではなく、周辺の島々を含めた「アイランズ」としての魅力力をグローバルな基準で発信

していくことにつながります。そのためには、自分たちの足元にある伝統文化を守りながらも、外からの専門的な視点や客観的な評価もしなやかに取り入れる必要があると考えています。

誇りを育む教育が島の未来を守る財産になる

赤城 また、子どもたちの教育に宿泊税を活用してはどうかと考えています。島の子どもたちが、地元の素晴らしい観光資源を実際に体験し、プロの仕事にふれる。その経験が、自分の故郷に対する誇りを育み、将来的なUターン率の向上や伝統芸能の継承の鍵になると思います。地元で育った感

性豊かな若者が外の世界を見てから島に戻り、新しい観光をかたちづくる。この「人」の循環こそが、石垣島の独自性を未来へつなぐ投資になるはずです。

我那覇 確かに、観光に興味をもつことは、自分が生まれ育った島の魅力を深く知ることと同じ意味をもちます。魅力を知れば、誇りと自信が生まれやす。島を出ていく際には、その誇りを胸に飛び立つてほしい。そして、戻ってくる時には、「この島の観光を面白くしたい」という志をもって帰ってきてほしいと願っています。

将来のビーチリゾートを考えると、最大の財産であり競争力の源泉は地元の若い人材です。宿泊税という安定的な財源をこうした長期的な人づくり、そしてそのための仕組みづくりを充てていくことが石垣島の強みをさらに確かなものにすると思います。

高橋 皆さんがおっしゃるとおり、観光はホスピタリティ産業ですから、最終的には「人」がすべてだと思います。AIがどれほど進化しても、人と人のふれあいによってかわることはできないでしょう。宿泊税を活用して、まずは観光業に携わる人々が誇りをも

ち、心豊かに島で暮らし続けられるように、所得水準の向上や生活基盤の整備にも取り組んでいきたいと思っています。

地域主体で持続可能な観光を未来へつなぐ

高橋 また、石垣島の発展を考えると、さきほどのUターン率の向上と合わせて、石垣島の魅力を打ち出すプレイヤードとして、若い世代が島で活躍できる環境をととのえておくことも大切だと考えています。

赤城 そのとおりだと思います。観光の未来のためには、お客様にどうしたら喜んでいただけるかを考えると同時に、地域をどう発展させ、地元の方々にどう還元していくかということもしっかり考える必要があると思います。**我那覇** そのときに大切なのは、観光客だけに合わせたまちづくりではなく、石垣市民が自分の島を最高だと思えるためのまちづくりだと思います。多様なルートをもつ住民同士がネットワークを広げ、観光の利益が自分たちの生活や文化の向上に直結していると

④ 国内ビーチリゾートの可能性



実感できる。そんな信頼に基づいた地域づくりこそが、真の持続可能性を生むのだと思います。

西銘 宿泊税の導入は、地域社会全体のがバナナスを強化し、共通の戦略をつくるチャンスだと考えています。いきなり完璧な循環は無理かもしれませんが、狙いをもって施策を打ち出し、その結果を検証して次へつなげる。そ

のプロセスに、市民や事業者の皆さんを巻き込みながら、一緒に取り組んでいきたいと思っています。

高橋 観光は単一の事業者では成り立ちません。石垣島には、行政や事業者の枠を超えた八重山ネットワークという強力な協力的体制があります。宿泊税という共通の原資を得ることで、八重山全体がひとつのチームとして「どんな島でありたいか」を真剣に話し合い、ブランディングを共有していく。宿泊税の導入をきっかけに、そんな未来をつくっていききたいですね。

山田 自分の故郷がリゾートとして世界から高く評価されることを、子どもからお年寄りまでが素直に喜び、誇りに思える。そして、その評価が住民の暮らしの質や、子どもたちの未来の選択肢を豊かにしていく。石垣島が取り組もうとしている地域主体のリゾート形成は、日本の、そして世界の離島観光が目指すべきモデルになるだろうと思います。本日は、石垣島の新たな歩みを描く示唆に富んだお話をありがとうございました。



* ツーリストシップ石垣島4ヶ条…ツーリストシップは、旅先に配慮し、地域に貢献しながら交流を楽しむ姿勢や行動を指す（一般社団法人ツーリストシップの登録商標）。「ツーリストシップ石垣島4ヶ条」の詳細は次のURLを参照。
https://www.city.ishigaki.okinawa.jp/soshiki/kanko_bunka/tourist_information/10006.html

観光地域づくりの 拡張を目指して

公益財団法人日本交通公社
理事・観光研究部長
山田雄一

高まらないリゾートに 対する注目

特集1で整理したように、我が国にリゾートという概念が移入されたのは、1980年代の後半に、当時の観光関係者が、欧米において来訪者がゆつくりと時間を過ごす様をみて、高度経済成長長期に促成栽培的に整備された観光地を「次のステージ」に高めていこうとしたことが、内需拡大を迫られていた当時の社会環境に適合したためである。

その後のバブル経済の崩壊に伴い、リゾートとして開発整備された事業の多くは頓挫し、その後の新規投資は停止。反復的・長期滞在という需要はも

ちろん、もともと存在していた国内短期滞在需要も右肩下がりで減少し、観光全体が低迷期に入る。こうした社会環境の変化の中で、リゾートという言葉は、バブル崩壊を象徴するワードとして、ネガティブな文脈で使われるようになった。

その後、2010年代になると国内需要は底打ちし、2025年には、訪日客数が4千万人を超えるまでに拡大した。需要環境は大きく改善され、社会においても観光に対する注目はかつてない水準にまで高まっている。しかしながら、観光政策の対象は「観光」であって、リゾートというワードが使われることはほとんどない。

現在の観光政策も地方創生の手段の一つであり、需要の地方分散が課題と

なっている。そして、その手段として、マーケティングやソフト・コンテンツの造成を行うことが志向されている。一方、かつてのリゾート法（総合保養地域整備法）は、需要の地方分散を、リゾート施設整備という土木、建築の取り組みで行おうとしていた。現在でもリゾートというと、開発のイメージが付きまとうことが多い。

これは、両者（現在の観光政策とリゾート法）が想定する「地方」概念の違いも影響しているだろう。

現在の政策における地方は「人口減少が進む街・集落」が意識されているが、かつてのリゾート法時代は「人が住んでいない低未利用地」が意識されていた。既に開発されているが、空洞化が進んでいる地域と、（人を受け入

れるには）新規に開発が必要な地域では、手法が異なるのは当然ではある。ただ、バブル期ですら、うまくいかなかったのに、人口縮小が続く現在に「開発投資」なんてとんでもないという「固定観念」が強すぎるのではないだろうか。

成熟化が進む 欧米リゾート

一方、特集2で示したように、かつて、日本がロールモデルとし、追いつこうと考えた欧米リゾートは、その後も、着実に整備が進められている。1980年代は新規整備であったが、その後、整備から20年、30年経っていく中で投資先は新規からリノベーション



カナダ・ウィスラーの従業員向けアフォーダブル住宅(2025年2月撮影)。海外リゾートの多くは、従業員が地域に定着し10年、20年と勤続できるように家族を持って生活できるような住居を、彼らの所得で購入できる水準で提供する制度を整備している。

へと切り替わり、今日的な要求に耐えられる施設、空間を形成することで、魅力的なデステイネーションとしての地位を盤石なものとしている。

さらに特筆されるのは、これらリゾートは、今や単にホテルやレジャー施設が集積している地域ではなく、DMOを含む官民連携によるマネジメント・システム、ダイナミックな投資や収益性の高い事業を実現する経営技術、人材の確保・教育システムなど、

様々な仕組みが有機的につながったエコシステムをもつ地域へと変貌していることだ。

余暇で訪れる人々だけでなく、MICEによって、非観光需要での来訪者も戦略的なターゲットとして呼び込んだり、従業員が住民として定着していきけるような住宅政策を展開していたりしている。

日帰り旅行や1泊旅行が多く、その需要源は大都市に居住する人々であつ

た日本では、観光地は人口の少ない地方という感覚が強いが、国際的に見れば、都市カリゾートというのが定番である。もちろん、エコ・ツーリズムや、アドベンチャー・ツーリズムといったオルタナティブな観光行動もあるが、1回の旅行における宿泊日数が多い旅行者がどこに滞在するのかと言え、滞在環境が整っている都市カリ

リゾートである。なぜならその方が好適だからだ。

そのため、もともとは農村であったり、地方都市であったりした土地であっても、観光を地域振興の手段とする場合は、都市計画的な視点を含めた、数十年にわたる継続的な整備を行い、自地域に観光経済エコシステムを形成していくことが志向されている。

観光政策の多くがソフト的な来訪目的づくり(コンテンツ開発やマーケティング)に注力されている日本とは大きな違いである。

着実に変化しつつある地域

ただ、特集3、4で示したように国内地域にも変化が見られる。

特集3では、長野県内、3町村の首長との対談を行ったが、いずれの地域も急増した訪日客によって、大きく地域が変わり始めていることを指摘している。それまで、日帰り/1泊旅行が主体であった客層が、訪日客の来訪によって、いきなり連泊、場合によっては1週間、2週間という長さに増えることで、様々な変化が生じているため

である。

同じ場所を訪れていても、滞在時間によって時間の使い方は大きく異なる。これらの地域を訪れる人の最大の目的は、当地でスノーアクティビティを楽しむことにある。これは、日帰り/1泊旅行でも、長期滞在者でも変わらない。ただ、滞在時間によって、スノーアクティビティを楽しむ時間的シェアは変化する。日帰り客は、ほぼ100%の時間をスノーアクティビティに使うし、1泊でも、食事や睡眠時間を除けば、同様だろう。仮に、天候が悪かったとしても、来訪目的を達成するために、ゲレンデに出ていくことになる。また、ゲレンデというのは、基本的に午後になると(人々の滑走によって)雪面が荒れていく。荒れた雪面は、多くの人にとってストレスとなるが、日帰り/1泊旅行者は、滑走時間を確保したいため、雪面が荒れていってもより遅い時間まで、ゲレンデに残りたいと考えることになる。昨今、リフト券の料金高騰が指摘されているから、なおさらだ。

一方、長期滞在となると、「また、明日もある」という心理が働く。であれば、「今日は天気が悪いから止めて

おこう」「明日、ゲレンデ整備された

後に、また来よう」と考え行動することができるとも。リフト券についても、5日間、10日間といった単位で滑走可能なりフト券を持っている人からすれば、特定日・時間の滑走へのこだわりは少ない。彼らにとつて、滑走体験は、「いつでも好きな時に実施できる」一種のサブスクリプションのような存在だからだ。結果、長期滞在者の1日に占めるスノーアクティビティ時間は限定され、空いた時間が多く生まれることになる。そして、その空き時間が、バーでワインを飲みながら談笑したり、スノーモンキーを見に行ったりといった行動時間に充てられることになる。長野であれば、金沢まで日帰り観光する人々も出てくるだろう。

すなわち、5泊、10泊の滞在というのは、1泊の滞在が単純に5回、10回繰り返されるのではなく、5泊、10泊という単位で独立した滞在スタイルであるということだ。

このような滞在スタイルが地域に入り込んでくると、地域に求められるものも変わっていく。快適に連泊するために、リビングルームやキッチンを備えた住居系の宿泊施設が望まれるよう

になるし、アプレスキューを楽しむバーやカフェ、自炊するための食材を購入するスーパーへの需要も高まっていくからだ。端的に言えば、彼らは、その豊富な「時間」を利用して「暮らすように旅する」。そのため、地域との接点は、従来の客層より大きく増加する。これは、よりオーセンティックな観光活動と言えるが、対応する地域からすれば、いきなり多くの外国人が、自分たちに近い行動、それも、自分たちも可能であれば実行したいと思うような活動を行うようになる。これは、誇らしくもあり、煩わしくもある。

一方で、特集4で取り上げた石垣市は、訪日客による変化ではない。東アジアからの訪日客は増えたものの、今でも、主体は日本人であるからだ。石垣島は、沖縄県の中でもブランド力を有したデスティネーションであり、沖縄県の本土復帰以降、他の主要離島を上回るペースで観光客を獲得してきた。石垣島が持つ自然資源も、他の主要離島と同様であるし、主要インフラである空港は、新石垣空港ができるまで、久米島や宮古島より劣後する状況であった。その中でも石垣島が伸長してきたのは、竹富島などの離島を抱え

ていたことに加え、対談でもあったように、早い段階から地域住民と観光客との緩やかな交流があったからだろう。こうした交流によって獲得した顧客は、石垣島を反復的に訪れるようになり、今では、3世代にわたって石垣島を来訪する人々も出てきている。日本人客であるため、1回あたりの滞在日数は限定されているが、世代を超えて、また長い年月にわたって反復的に来訪することで、長期滞在客同様に、現地での時間の使い方が変わっていくことは、容易に想像できる。

さらに、地域住民が観光客と緩やかに交流する社会的な雰囲気は、移住者の獲得にもつながっている。特集4でも示したように、どの離島も高校卒業のタイミングで20歳前後で大きく人口が流出する。これは、石垣市も変わらないが、同市は20〜30代の転入者が極めて多いのだ。これは、「若者」として、石垣島が「住みたい場所」として認識されていて、実際の移住という行動につながっていることを示している。この理由は定かではないが、対談の中では、市街地にスーパーや飲食店、物販店が集積し、自動車は必要となるものの都市的な住環境が確保されてい

ることが理由の一つとしてあげられていた。こうした都市的機能は、住民だけでなく、反復的に来訪する人々にとつても好ましい。反復的な来訪者にとつて石垣島での生活は「非日常」ではなく、自身の日常生活が延長、拡張された日常と呼べるような時間だからだ。

安定的な観光需要を背景に、年間を通じて、東京や大阪といった国内都市との直行便も他の主要離島より多く、FSC、LCCのキャリアの選択肢も多い。

自然資源や文化資源を持ちつつ、都市的な利便性をもつ姿は、かつて、先達たちが夢見た海外リゾートの姿と重なる。石垣市の人々や、国や県が意識した行動の結果ではなく、関係者の自然な行動の積み重ねが、国内需要に基づいたリゾートを形成したということに敬意を表したい。

リゾートというのは 供給ではなく 需要である

ここまでの整理を元に、「リゾート」とは何かということ考察すれば、そ

これは、リゾート「地」という空間を示すものではなく、反復的・長期的に滞在するという需要が向かう先を指すものだということになる。

かつて、我々は「リゾート」を整備するために、ホテルを造り、ゴルフ場を造り、スキー場を造った。しかしながら、こうした整備を行ってもリゾートにはならなかった。施設があっても、日本人は反復的・長期的に滞在することとはなかったからだ。供給によって需要は創られないということを示す事象と言えよう。

リゾート「需要」を持った人々が多く集まることで、着地に消費と投資が生じ、整備が進んでいくことで、リゾート「地」としての雰囲気や施設、設備が備わっていくことはあるが、その形を造ればリゾート需要を取り込めるわけではない。

これを理解するには、日本語の観光地と、英語のデスティネーションの違いを理解する必要がある。日本では観光地として特定の地理的空間を元に発想するが、観光分野のマーケティングにおいては、旅行者（顧客）から見た旅行先（デスティネーション）として発想する。当然、旅行者によってデス

ティネーションの範囲は異なることになる。

実際、北海道の倶知安町は、今でこそ「国際リゾート」として注目され、コンドミニアムや高級ホテルなどが多く立地しているが、リゾート「需要」が同地に張り付いたのは、2001年9月のアメリカ同時多発テロによって、オーストラリア市場から、北米のリゾートが忌避されたことに端を発する。当時の倶知安町には、日本人の「観光需要」に対応した1泊、せいぜい2泊までの対応しか想定していない施設しかなかったが、いきなり、10日間、2週間という滞在が発生することになった。当初、これは一時避難的な需要と考えられたが、来訪者が日本の雪に感動し、その後、反復的に訪れるようになっていった。今日、整備されているコンドミニアムなどは、こうした需要が定着した後に、これをビジネスチャンスとみた人々が投資、整備をした結果である。コンドミニアムがあったから長期滞在したのではなく、来訪者が長期滞在を志向していたから長期滞在が生まれたのである。以来、20年

余り。国内からは「バブル」と揶揄されながらも投資は止まらず、持続的な成長を実現している。今では国内でも有数の長期滞在施設を有する地域であるが、多くの日本人にとって同地は今でも「観光地」である。なぜなら、日本人の多くは、1〜2泊程度の需要がほとんどであるからだ。需要があり、それに対応する供給がなされていくことで、外形的に「リゾート」という形が作られていくというのが、リゾート地形成のメカニズムであることを、この倶知安町の事例は示している。必然的に、観光地とリゾート地の違いも存在しない。「かつて」我々の先達が誤ったのは、ホテルやレジャー施設などの供給を整備すれば、需要が喚起され、観光行動が観光からリゾートへと拡がると思っただことである。しかしながら、観光行動は経験財であり、経験をしなければその価値を評価することができない。顕在化している（＝実需となつている）需要は、すべて、既に経験した過去の観光需要の延長線にある。日本にリゾートを造りたかつたら、やるべきことは供給の整備ではなく、需要のテコ入れであった。仮に1990年代に、日本人の旅行形態が反復的・長期的滞

在に「拡張」されていけば、その後の国内観光市場は大きく変わっていたかもしれない。

リゾートを形成するのは、ハード整備の成否ではない。反復的・長期的に滞在するセグメントを獲得するためのマーケティング／ブランディングとなる。

また、観光活動はサービスの一種であるため、姿形を捉えることが難しいが、長期滞在する訪日客の行動を身近に見て、感じることで、国内客にも意識や行動の変化がもたらされる可能性もある。そうしたマーケティングを仕掛けられれば、国内需要にも拡がりが出てくるのが期待できる。

リゾートが地域にもたらす効果

リゾートが需要を示すものだとしても、そのリゾート需要に基づいた投資と消費が行われる地域となることのメリットは大きい。

短期滞在、非リピーターが来訪者の主体であれば、1人あたりの消費額は低く、現地での行動も利他的なものとなりやすい。これは、いわゆる「観光

地化」の弊害を地域にもたらすことになる。一方で、地域にロイヤルティを感じた人々が反復的に訪れるようになったり、1週間、2週間と長期滞在する人たちが増加したりすることは、特集3、4で示したように、従来の「観光地」とは異なるインパクトを地域にもたらすことになる。

観光が地域にもたらすインパクトは正負両面において多様であるが、反復的・長期的滞在の需要が生み出す効果は、ポジティブなものが多い。その行動は利他的なものではなく、住民に近い行動となるからだ。特に人口縮小が進む我が国において重要なことは定住人口を増やすことがあるが、石垣島および主要離島の事例が示すように、一般的な観光振興でそれを実現することはできない。人々からリゾートと認知され、反復的・長期的滞在の需要を持続的に獲得することが必要である。

これは、リゾート需要がもたらす効果が観光産業に限定されず、幅広い主体に拡がることと無関係ではない。前述したように、リゾート需要は来訪目的となる主たるアクティビティだけでなく、多様な活動に拡がり、それは生活者と重なる部分が大いかに

らだ。

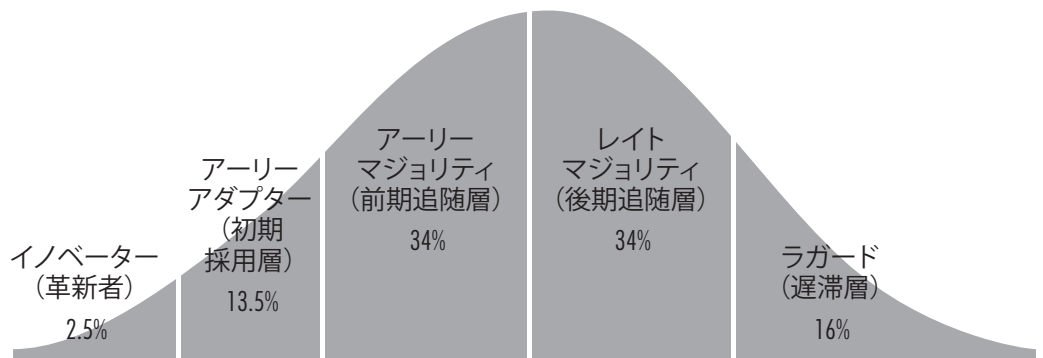
現在の訪日客の消費額統計を確認するまでもなく、発地や来訪目的などによって、滞在日数も消費額も、その消費項目も異なる。セグメントによって日本での滞在スタイルは異なり、地域にもたらすインパクトも異なるということだ。現在、我が国ではオーバーツーリズム対策として、人数を抑えながら消費額を増やすことが志向され、滞在日数の多い欧米客を増やすことが目標となっている。リゾートは、そうした需要を取り込むことができる地域であり、観光立国を目指す我が国において、本来、戦略的に重要なテーマと言えよう。

背景に膨大かつ ノーブルな需要

さらに注目したいのは、現在、日本に訪れている「長期滞在志向者」は、マーケティングのイノベーター理論で整理すれば、エバンジェリストやアーリー・アダプターに相当する人々だということだ。

例えば、日本のスノーリゾートにおいて、禁止されているコース外滑走を

図① イノベーター理論のイメージ



行ったたり、夜中に屋外で騒いだりといったことが問題視されているが、欧米のリゾートにおいては、そうした問題が殆ど出ていない。なぜなら市場の

中心を、家族客や社会的ステータスの高い人々が占めているからだ。欧米にも若者を中心に、ルールを軽視したり、騒いだりするセグメントがないわけではないが、そうした人々は地域や施設のマーケティングの一環として、そうした行動が許される一部のリゾートに集中する傾向にある。多くのリゾートは市場の主戦場となるアーリー/レイト・マジョリティで勝負をしており、同セグメントの競争ポイントは安心感や落ち着き、周辺環境も含めた快適性が求められる。幼い子供や孫に怖い思いをさせたくないし、パートナーとのゆつたりとした時間を邪魔されたくないからだ。

これはビーチリゾートでも同様である。エクストリームな体験を打ち出すことで、エバンジェリスト、アーリーアダプターの獲得に走るリゾートもあるが、多くは、より落ち着いた滞在を目的とする人々を惹きつけることが目指されている。

訪日市場が立ち上がったから10年余りだが、長期滞在需要を持った欧米市場からの認知はコロナ禍以降となる。彼らにとって、日本の「リゾート」は未知の世界であり、まだ、エバンジェ

リスト、アーリーアダプターが開拓している段階である。つまり、日本に来ているリゾート客は、世界市場から見れば、その先端にいるやや特殊なセグメントであるということだ。この後方に、より落ち着いた、価値の高い顧客層が控えており、そこまでつなげることができれば、日本のリゾートは、より成熟された姿へと進化していくだろう。

例えば、訪日客がニセコから富良野や白馬などに流れているという指摘が、ニセコに対する否定的な文脈で述べられることがある。ただこれは、ニセコを開拓したエバンジェリスト／アーリーアダプターが、ニセコが有名になり、マジョリテイへ対応するリゾートとなっていく過程で興味を失い、まだ「自由」な新天地を目指して開拓先を変えていると考えられる。実際、そうしたセグメントが抜けても、ニセコ地域の集客数も投資活動も停滞しておらず、むしろ、より高質な整備が目指されるようになっていく。国内のスノーリゾートにおいて、ニセコは、すでに市場をマジョリテイへと推移させてきているということだ。

1年間の訪日客数が4千万人を超

え、人数的には一服した感があるが、リゾート需要については、まだまだ、序盤戦にあると言ってよいだろう。

消費と投資による 物価上昇

ただ、問題もある。

訪日客のリゾート需要が、マジョリテイへと移行していくことで、顧客側の資産額、消費額が上昇していくということがある。これは、観光消費額の上昇を意味し、経済効果の点では喜ばしいものの、リゾート需要に基づく消費は、消費対象が広範に及ぶ。その結果、宿泊費用だけでなく、飲食や物販、その他個人サービスなど、日常生活に関わるモノやサービスの価格も上昇しやすくなる。住民にとっては、自身の生活コストが上昇することになり、単純に受け入れがたい。

また、行政側の負担も大きくなる。リゾート需要が増大することで、不動産投資が増え、いわゆる「コールド・ベッド」問題が起きてくるからだ。リゾート需要を持った人々が、その地域を自身の旅行先（滞在先）として好ましく思えば「ここに、自身の拠点を持

っておきたい」という発想につながる。当然、こうした需要を見越して、コンドミニアムやレジデンスなどの提供を行う事業者も登場してくる。日本では、過去の経験からリゾート不動産は危険という認識だが、国際的に見れば、リゾート不動産というのは、リゾートの成長と共に価格を維持、向上させていくものであるため、投資者にとつての投資リスクも低い。そのため、リゾートとして注目されれば、不動産投資が拡がっていくことは、当然の帰結となる。不動産投資の増大は、行政に固定資産税増という効果をもたらすが、同時に、公共インフラの整備義務も発生する。特に大きな問題となりやすいのは水道である。所有形態によるが、リゾート不動産の稼働率は、ハイシーズンとローシーズンの差が激しい。1年を通じてみれば、ほとんど稼働していない状態にある。だが、行政としてはハイシーズンの高稼働状態に合わせて、上下水のキャパシティを用意する必要がある。さらに、多くの自治体は地方交付税措置されている赤字状態にあるため、固定資産税が増え

も、全体の歳入は上昇せず、資金確保ができない。これが、稼働していない

「温まらない」「コールド」ベッド問題である。いわゆる民泊として、旅行者に貸し出し、稼働を高めることは、こうしたコールド・ベッド問題への処方の一つであるが、稼働が上がり、不動産の経済価値も高まるため、従業員を含む住民用の住宅価格も上昇してしまう。これによって、住民が転出していくようなことになれば、さらに自治体財政は悪化し、地域の衰退を早めることにもなってしまう。

住民生活こそが基盤

リゾート需要を持った人々が、多く来訪し、賑わいも形成されるが、地域住民は流出し、コミュニティが崩壊していくというのは、一種のホラーであるが、実際に海外でも生じていることであるし、日本でも、そのリスクが叫ばれるようになってきている事象である。

そもそも、リゾート需要を持った人々が「そこに滞在したい」と思う理由は、そこに素敵な、憧れる生活、ライフスタイルがあるからだ。そのライフスタイルの創造主である住民がいなくなつた地域は、核となる魅力が失い中長期的に衰退していくことになるだ

ろう。

すなわち、住民自身が、その地域を
楽しみ、自身のライフスタイルを来訪
者にシェアするという関係性を構築し
ていくことは、持続的な観光振興の実
現においても重要事項である。

国内において、それに近い姿を作り
出しているのが、特集4で取り上げた
石垣市である。当地も、不動産投資が
進みつつあるが、それを受け入れる都
市的サービス、インフラの集積も並行
して行われてきたことで、むしろ、若
い人々の転入が進んでいる。石垣市を
選好し転入してきた彼らが、家族を持
ち、次世代を育てていくことで、リゾ
ートとしての魅力を更に深めていくこと
になるだろう。実際、同地では多様な
滞在スタイルが生まれてきている。

一方で、スノーリゾートについては
「JAPOW」を目的とした訪日客の
急増によって、いきなり、リゾートへ
の転化を迫られる状況となっている。
石垣市が20年、30年かけておこなって
きた変化を、3年、5年で行わなけれ
ばならない状況にある。さらに、石垣
市は国内需要をもとに成長、変化して
きたが、スノーリゾートは訪日需要が
主体となる。文化も風習も異なる彼ら

と、新しいコミュニティを形成してい
くことの難易度は低くない。

ただ、このハードルを超えていくこ
とは、人口縮小社会の中で、サービ
スによって経済を組み立てていかなけ
ばならない我が国において、極めて重
要な課題である。

幸い、リゾート化していくことで、
地域がどのように変化し、どのような
問題が生じていくのか。また、それ
はこういった対処方法が有効なのかに
ついては、海外リゾートに豊富な経験
が蓄積されている。こうした先達たち
の経験から学び、前広に対処法策を学
んでいくことが求められる。

「リゾート」という言葉は、社会的に
封印された感があるが、顧客にとつ
ても地域にとつても豊かな可能性を有し
た活動であると、筆者は考えている。
改めて、リゾートとは何か、適切な需
要と供給の関係性を構築するには、ど
うしたらよいかを考え、行動してい
くことが重要である。その先に、かつ
て先達たちが夢見たリゾートを、国
内に現出させていくことができるだ
ろう。



米国・コロラド州のリゾート(2025年2月撮影)。旅行によって、同行者や地域との
コミュニケーションを深めたいと思う人々が集う空間がリゾートと呼ばれる

『Their Eyes Were Watching God 彼らの目は神を見ていた』

Zora Neale Hurston
(ゾラ・ニール・ハーストン)・著

1937年発行

原忠之

セントラルフロリダ大学
ローゼンホスピタリティ
経営学部准教授

・あらすじ

今から100年前、20世紀初頭のフロリダ州が舞台です。かつて奴隷であり、トラウマと恐怖に苛まれた祖母ナニーに育てられた主人公ジェイニーは、年配の農夫ローガン・キリックスとの結婚を強いられます。キリックスからは安心感を得られませんが、愛情は得られません。ジェイニーはすぐに、愛のない安定では満足されないことに気づきます。ジェイニーは、カリスマ性と野心を持つ黒人実業家男性ジョー・スタークスと駆け落ちします。ジョーは彼女をフロリダ半島中部のオーランド郊外に連れて行き、白人地主より土地を購入、売主の名前をとってイートンビル町と命名して自らが初代町長に就任します。しかし、彼の支配欲は二人の結婚生活を別の檻へと変えてしまい、彼はジェイニーを黙らせ、パートナーではなく自分の地位の象徴として扱うのです。長年の精神的監禁の後、ジェイニーは彼の死の直前に彼と対峙し、自分の声を取り戻します。

ついに自由になったジェイニーは、自立した生活を満喫して、その後、若く、明るく、冒険

・コメント

地元人口140万人の通称オーランド(行政区分はオレンジ郡)は、年間7500万人という全米の市区町村郡で最多の来訪客が訪れる観光地です。中心部から10キロほどの場所に、1887年に全米で初めて黒人自治町であるイートンビル町が設立されたという歴史があります。この小説は、圧政者である白人への非難や対峙の姿勢がないという理由で黒人社会から批判された経緯もありますが、著者ハーストンの死去後、20世紀後半に再評価され、毎年ゾラの名を冠した黒人女性文化追悼祭りがイートンビル町で開催されています。私はその黒人非営利団体の副会長を務めています。この本に影響を受けた一人です。

見出しします。

悲劇に見舞われた後、ジェイニーは市長夫人時代からは想像できないほどのポロポロの姿で故郷に戻りますが、もはや人々の噂や非難など気にしておらず、彼女は生き、愛し、苦しみ、そしてついに自分自身の内に平穏を見出します。



原忠之(はらただゆき)

セントラルフロリダ大学ローゼンホスピタリティ経営学部デニユア准教授。九州産業大学地域共創学部客員教授、宇都宮共和大学、立命館大学客員教授兼務。UNESCO ICH(文化)航空の国連統計サテライト(勘定)の技術諮問委員会委員。上智大学法学部卒。日本興業銀行、外務省を経て、米国コーネル大学ホテル経営学部博士号取得。他、ホテル経営、地域科学の3修士号を持つ。専門は観光産業の経済効果。ホスピタリティ・マネジメント。担当授業はファイナンス、応用統計学、経済効果計算、国際イベント経営等。琉球大学、橋大学、京都大学、早稲田大学など、毎年日本のいくつかの大学で集中講義を行っている。観光学の分野では大規模公開オンライン講座(MOOC)の先駆者でもある。米フロリダ州在住。

英語版で初めて読んだ時に、シヨックと開放感を覚えた小説でした。男女差別・人種差別が強かった時代の米国南部で黒人女性として生まれ、社会的制約が多い中で、一人明るく自立自由を求めて振る舞う黒人女性の

視点から見た当時の米国はこう見えるのかという、社会の少数派ながら、それら制約への直接の不平不満を述べずに自由に生きる女性の心意気を感じる小説です。

DM (destination management)

当財団では2025年度、研究顧問を招いてさまざまな角度から話題を提供いただき、研究員と対話する研究懇話会を実施している。
 全5回の開催を予定しており、11月20日に行われた今回は、文化遺産マネジメントを専門とする西山徳明氏から、「コミュニティベースツーリズム(CBT)とdestination management(DM)から見る観光開発の公益性について、国際協力の現場での知見を交えて話題提供が行われた。」

西山徳明（北海道大学観光学高等研究センター教授）

日本のDMO政策に 求められる 「公益ミッション」

今日は『観光文化』263号に私が寄稿した「観光開発の公益性を問う〜ツーリズムを通じた地域課題の解決〜」の内容をもとに、その行間を埋める形で話をしたい。destination management(以下、DM)は本来、

地域ごとに異なる課題解決に対応すべきだが、日本ではDMのミッションが十分に理解されないまま、組織づくりありきで進行しているという問題が指摘されている。

後ほど詳しく述べるが、私は2007年以降、国際協力機構(JICA)の開発途上国支援に関わり、エチオピアなどで観光開発に携わった。コミュニティベースツーリズム(以下、CBT)やDMの原点について考える

機会となり、そこで得た知見の一つが「どのような発展段階の地域であっても、DMを行う組織は社会から見て明確な公益ミッションを掲げることが不可欠」ということである。

特に途上国では、観光開発への資金投下、対象地域や国の公益につながるという明確な論理が強く求められる。日本のような先進国においても、DMOがしっかりとした公益ミッションを掲げれば、税金を投入した観光開

発は可能と考えられる。

例えば宿泊税を徴収する際も、後から使途を考えるのではなく、「このような公益を実現するためにこの金額が必要」という説明と理念がなければ実現は難しい。観光による公益とは、単に民間の収益や税収が増えるということではない。地域が観光振興に取り組むことで、従来は公共の仕事とされてきた文化遺産・自然環境の保護やそのための人材育成、地場産業の振興、定住移住の促進などの課題をDMで解決できると仮説を立て、そうした公益性を各地域でどう設定できるかを検討する研究が求められていると考える。

フィジールの CBTから学ぶ 「公共の財布」という 考え方

私が勤める北海道大学観光学高等研究センター(CATS)は、CBTの考え方をベースに、日本の課題解決をモデル化して世界の途上国に技術移転するプロジェクトを行ってきた(図1)。技術移転を行ったのは山口県萩市で展開した「萩まちじゅう博物館」

① CATSの取り組み事例

CATSの取り組み事例

CATSの参画するプロジェクトは北海道内はもとより、全国・世界に広がっています。各地が抱える様々な課題に対して、先端的な研究と地域との協働を通じ、観光創造における地域貢献・国際貢献に取り組んでいます。

二七〇町、霧島野町

● 観光振興
地域の観光資源やアトラクションに関する調査や観光客の誘致などを行っています。

札幌市

● 国際観光
道庁観光課・札幌市観光課と連携し、観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

南砺市

● 3ヶ所包括連携推進事業
文化力が“発祥”する地方創生
CATS、南砺市、(一社)地域発新研究支援センターを主体とした高専等の連携による地方創生を目指したメディア・コンテンツと観光との複合的連携推進活動を行っています。

広島県(尾道市・呉市)

● 国際観光
尾道市観光課・呉市観光課と連携し、観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

竹島島

● 観光・教育連携
観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

琉球大学

● 観光・教育連携
観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

札幌市

● 国際観光
道庁観光課・札幌市観光課と連携し、観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

美瑛町

● 包括連携推進事業(2012-)
美瑛町景観計画/観光マスタープラン
北海道を代表する「丘のまち」として有名な美瑛町の「景観町景観計画」「観光マスタープラン」の策定やコミュニティ・施設と駅前通りの整備提案などの観光まちづくりを実現しています。

川白村

● 包括連携推進事業(2012-)
世界遺産マスタープラン/観光基本計画はか
世界遺産「白川郷合掌造り集落」を擁する村の「世界遺産マスタープラン」「観光基本計画」「川白村景観計画」の策定支援を通じ、世界遺産の価値継承と観光の質向上、周辺環境保全に取り組んでいます。

五稜川

● 包括連携推進事業(2012-)
「五稜川」の観光資源を活かした観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

旭川市

● 包括連携推進事業(2012-)
旭川市観光課と連携し、観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

旭川市

● 包括連携推進事業(2012-)
旭川市観光課と連携し、観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

ヨルダン

● JICA官報協力プロジェクト(2012-)
ザルト市における持続可能な観光開発
近代ヨルダン最初の首都ザルトのまち全体を歴史的な博物館に見立て、旅行者が民衆を巡る地域の「おたから」を通る観光まちづくりを、観光開発者、ザルト市、地元NGOとの協働で展開しています。

フィンランド・ラップランド大学

● 国際観光
共同研究を推進するとともに、専任員・学生との交流も積極的に行っています。

フランス(パリ市)

● 国際観光
観光客の誘致や観光客の満足度を高めるための取り組みを行っています。

エチオピア

● JICA官報協力プロジェクト(2012-)
シメエン国立公園および周辺地域における
官民協働によるコミュニティ・ツーリズム開発
農地拡大によって危機感を感じてきたシメエン国立公園を、住民の日常生活を体験する農村ツアーによる収益収入の確保を通じて危機から救う世界で初めての試みです。

エチオピア

● JICA官報協力プロジェクト(2012-)
シメエン国立公園および周辺地域における
官民協働によるコミュニティ・ツーリズム開発
農地拡大によって危機感を感じてきたシメエン国立公園を、住民の日常生活を体験する農村ツアーによる収益収入の確保を通じて危機から救う世界で初めての試みです。

エチオピア

● JICA官報協力プロジェクト(2012-)
シメエン国立公園および周辺地域における
官民協働によるコミュニティ・ツーリズム開発
農地拡大によって危機感を感じてきたシメエン国立公園を、住民の日常生活を体験する農村ツアーによる収益収入の確保を通じて危機から救う世界で初めての試みです。

フィジー

● JICA官報協力プロジェクト(2014-)
レバカ地域におけるコミュニティを基盤とした
遺産管理と観光開発のシステム構築
「歴史的漁港都市レバカ」をフィールドに、世界遺産としての管理計画策定、観光計画の策定に関する事業を現地政府、ナショナルトラスト、地域コミュニティと共に進めています。

フィジー

● JICA官報協力プロジェクト(2014-)
レバカ地域におけるコミュニティを基盤とした
遺産管理と観光開発のシステム構築
「歴史的漁港都市レバカ」をフィールドに、世界遺産としての管理計画策定、観光計画の策定に関する事業を現地政府、ナショナルトラスト、地域コミュニティと共に進めています。

フィジー

● JICA官報協力プロジェクト(2014-)
レバカ地域におけるコミュニティを基盤とした
遺産管理と観光開発のシステム構築
「歴史的漁港都市レバカ」をフィールドに、世界遺産としての管理計画策定、観光計画の策定に関する事業を現地政府、ナショナルトラスト、地域コミュニティと共に進めています。

フィジー

● JICA官報協力プロジェクト(2014-)
レバカ地域におけるコミュニティを基盤とした
遺産管理と観光開発のシステム構築
「歴史的漁港都市レバカ」をフィールドに、世界遺産としての管理計画策定、観光計画の策定に関する事業を現地政府、ナショナルトラスト、地域コミュニティと共に進めています。

フィジー

● JICA官報協力プロジェクト(2014-)
レバカ地域におけるコミュニティを基盤とした
遺産管理と観光開発のシステム構築
「歴史的漁港都市レバカ」をフィールドに、世界遺産としての管理計画策定、観光計画の策定に関する事業を現地政府、ナショナルトラスト、地域コミュニティと共に進めています。

フィジー

● JICA官報協力プロジェクト(2014-)
レバカ地域におけるコミュニティを基盤とした
遺産管理と観光開発のシステム構築
「歴史的漁港都市レバカ」をフィールドに、世界遺産としての管理計画策定、観光計画の策定に関する事業を現地政府、ナショナルトラスト、地域コミュニティと共に進めています。

ペルー

● JICA官報協力プロジェクト(2013-)
クエラップ遺跡の世界遺産登録に係る
計画策定支援
遺跡とその周辺集落が持つ文化的遺産の価値向上、遺跡としての管理計画の策定を現地政府と協働で行っています。

ペルー

● JICA官報協力プロジェクト(2013-)
クエラップ遺跡の世界遺産登録に係る
計画策定支援
遺跡とその周辺集落が持つ文化的遺産の価値向上、遺跡としての管理計画の策定を現地政府と協働で行っています。

ペルー

● JICA官報協力プロジェクト(2013-)
クエラップ遺跡の世界遺産登録に係る
計画策定支援
遺跡とその周辺集落が持つ文化的遺産の価値向上、遺跡としての管理計画の策定を現地政府と協働で行っています。

ペルー

● JICA官報協力プロジェクト(2013-)
クエラップ遺跡の世界遺産登録に係る
計画策定支援
遺跡とその周辺集落が持つ文化的遺産の価値向上、遺跡としての管理計画の策定を現地政府と協働で行っています。

ペルー

● JICA官報協力プロジェクト(2013-)
クエラップ遺跡の世界遺産登録に係る
計画策定支援
遺跡とその周辺集落が持つ文化的遺産の価値向上、遺跡としての管理計画の策定を現地政府と協働で行っています。

ペルー

● JICA官報協力プロジェクト(2013-)
クエラップ遺跡の世界遺産登録に係る
計画策定支援
遺跡とその周辺集落が持つ文化的遺産の価値向上、遺跡としての管理計画の策定を現地政府と協働で行っています。

出典：北海道大学観光学高等研究センター(2015年時点)



エチオピアでの説明会の様子

のエコミュージアムの考え方で、自然公園や歴史的町並み、古代遺跡などさまざまな場所を対象に、「屋根のない博物館」というモデルを適用した。

CBTは、一般的に「コミュニティが主体性を持って自律的に観光振興を進めるあり方」と定義されるが、途上国での支援現場では、CBTを標榜しても一部の住民にしか裨益^{ひえき}しない事例がある。それを私が理解したのは、エチオピアの世界遺産シメエン国立公園でのプロジェクトである。我々の前に他国のドナーによって行われた国際支援では、一部の住民だけが利潤を得た

ため、集落内で軋轢^{けんりつ}が起きていた。これを受けて我々のプロジェクトの説明会(写真)では全世帯員から不満が噴出し、「今度も同じなのは」と厳しい追及を受けることとなった。

この時に事例を示して賛同を得たのが、日本のドナーによるフィジーの山間集落におけるエコツーリズム開発の先行事例で、観光で得た利益を分け合うだけでなく、「公共の財布」を作り、村人が困っている課題の解決に使うというルールだった。このフィジーの村では、それまで麓^{ふもと}の学校に寄宿させ離ればなれで暮らしていた子どもたちを毎日村から通わせたいと、最初に貯まったお金でピックアップトラックを購入した。子どもたちと毎日一緒に暮らせるという裨益^{ひえき}をコミュニティ全体にもたらしたのである。

この「公共の財布」という考え方は、日本のDMを検討する際にも、観光への投資に行政を巻き込み首長を説得する根拠になり得ると考える。エチオピアでのCBT支援はコミュニティ全体への裨益^{ひえき}を実現させ、発展を促すことが重要だと認識する大切な機会となった。

DESTINEーション イメージの 戦略的な構築と共有

DMで極めて重要なのがDESTINEーションイメージの戦略的な構築と共有である。

ハワイ観光は1900年代初頭、ハワイ島のキラウエア火山から始まった。第二次世界大戦後は、温暖な気候と美しい風景に惹かれ、戦時中に駐留していたアメリカ本土の軍人たちによる家族との再訪のニーズが高まった。

これにちなみ、ハワイビジターズビューロー(現、HTA)が構築した「アロハイメージ」だ。ハリウッドとの協働による映像化やハワイアンミュージック、フラダンスなどによる戦略的なイメージ作りによって、ハワイは一大観光地となった。

また、沖縄は1972年の本土復帰後に、ハワイの代替となるトロピカルリゾートとして宣伝に注力したが、晴天率の低さや夏の台風などにより顧客満足度が低く、この戦略はうまくいかなかった。その後は戦略を大きく変え

て文化的な面を打ち出し、再構築したDESTINEーションイメージが的を射て成功を収めている。

「観光の直接的な課題解決力」を 社会に示す研究を

21世紀になって明らかに観光の重要性は増し、観光には新しい風が吹いている。しかし、観光産業をいかに発展させるかに論が傾きがちで、観光自体の公益性について論じられていない。教育や福祉とは異なり、観光への税の投下が疑問視されるのは、公益目的が明示できていないからだと感じる。

観光研究者は、観光そのものによる「地域や国家の課題解決という直接的な貢献力」を社会に示す研究が求められており、「地域の多面的発展を推進する重要なエンジン」として観光が信頼を勝ち取るにはどうしたらいいかを考える必要がある。観光が生み出す草の根的な国際交流は、国家間の安全保障の基盤となり、その意味においても公益性は絶対に否定できないことを、もつと理論体系的に説明していく必要があると思う。

リスクヘッジと観光戦略研究

- ✓ マスコミの扱う観光報道への研究者の適切な対応
- ✓ オーバーツーリズムとは、需要予測を怠ってプロモーションや誘致に傾注した自治体や政府、あるいは民間事業者の非を指摘する言葉
- ✓ 「白川郷」の事例：山間地域で起きる観光爆発を予測できないまま世界遺産に登録した政府、自治体白川村、大いに宣伝したマスコミの責任
- ✓ 「北海道・美瑛町」の事例：農業者に相談なく行政や観光事業者が観光マップに有名木を記載しプロモーション、農業者には利益なき迷惑→単なる量的な問題を越えたオーバーツーリズム
- ✓ 「コンビニ越しに見る富士山」「漫画スラムダンクの鎌倉の踏切」→本質的な意味でオーバーツーリズムではない
- ✓ オーバーツーリズムの名のもとに、的外れな現象をやり玉に挙げたり、観光そのものを悪者扱いしたりするようなマスコミの風潮は、まさに**観光に対する誤った社会的認識の顕れ**
- ✓ バルセロナ市の**総量規制**という画期的な施策を生む元となった「**オーバーツーリズム**」の語
- ✓ 額面の意味だけ輸入し、何でもそのせいにしようとする傾向を正すのも観光研究者の仕事
- ✓ オーバーツーリズムと呼ばれている目の前の現象の原因解明と、被害者の実態解明に基づく見解
- ✓ 近い将来起こりうるインバウンドの過剰流入といった観光現象を事前に予測する手法開発
- ✓ プロモーションする事業者がそうした現象を予測できるような手法の開発
- ✓ オーバーツーリズムの発生を未然に防ぐ行政によるモニタリング手法と施策のあり方を解明
- ✓ キャリングキャパシティ研究の深化が必要
- ✓ こうした観光戦略手法の普及は、研究者が現場での経験と分析を通じて社会に問うべき内容
- ✓ そうしたリスクヘッジ研究を超えた、**公益性を主張できる観光政策そのものの戦略研究**が求められている

オーバーツーリズムについても触れ
ておきたい。私が考えるオーバーツー
リズムとは、需要予測を怠ってプロ
モーションや誘致に傾注した自治体や
政府、あるいは民間事業者の非を指摘
する言葉である。観光にまつわる問題
の全てをオーバーツーリズムと表現せ
ず、言葉の意味を限定して使うよう、
マスコミによる観光報道への研究者の
適切な対応が非常に重要だと感じる。

バルセロナ市などで行われている総
量規制などのオーバーツーリズム対策
は、1970年代のアメリカの都市計
画分野で発展した成長管理政策の思想
や方法論が応用されている。観光研究
者には、こうした他分野の理念や方法
論を深く理解して応用することや、15
年ほど前に行われていたキャリング
キャパシティの研究などをさらに発展
させることが求められているのではな
いかと思う。

おわりに

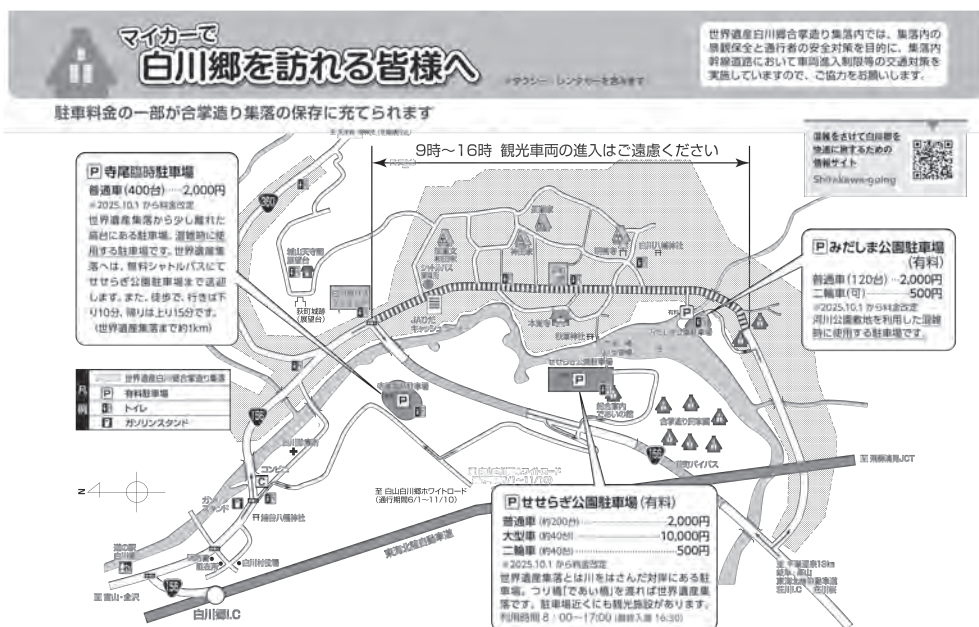
最後に、岐阜県白川郷の事例を紹介
したい。白川郷では、1970年頃か
ら「村を存続させるための観光」とい
う明快な意識のもと、住民主導で合掌

造り集落の保存運動を行っていた。し
かし、1995年の世界文化遺産登録
から数年後、観光客の爆発的增加によ
り、道路が大渋滞し、救急車の通行も
困難となり、住民や観光客が命の危険
にさらされる状況に陥った。これは需
要予測を怠った政府、自治体、マスコ
ミの責任と言えるだろう。

それから10年以上の歳月をかけ、2
014年、住民の努力や行政との折衝
などにより、観光客による車の乗り入
れ規制が導入された。以来、渋滞はほ
んど発生せず、白川郷の住民にとつ
ての「安全な暮らし」が実現された。

このシステム構築の初期に私も関
わったが、地域住民の膨大な努力のも
と、現状の成功ともいえる両立体制が
達成されている。白川郷のCBTと住
民にとつての世界遺産はまさにこの時
に始まったのではと考える。「世界遺
産に登録される」ような形式的な側面
だけでなく、その後に発生するさまざ
まな問題を、住民が自ら、外部の関係
者と相談し、解決することがCBTで
はないか。今回紹介した事例をはじめ、
これまでの10〜20年の国内外での経験
が、私のCBTやDMに対する考え方の
ベースになっている。

図2 白川郷の交通対策



白川郷で車乗り入れ規制 世界遺産の景観保護

岐阜県白川村は1日、世界文化遺産・白川郷の合掌造り集落の景観を保護するため、観光客による車の乗り入れ規制を本格的に開始した。集落の中心を通る村道約1キロで、4~11月の毎日午前9時~午後4時を通行禁止とする。(2014年4月1日/日本経済新聞より)

アーバニスト／ アーバニズム論からの 現代観光考

当財団では2025年度、研究顧問を招いてさまざまな角度から話題を提供いただき、研究員と対話する研究懇話会を実施している。

全6回の開催を予定しており、1月22日に行われた今回は、都市計画を専門とする中島氏から、アーバニスト及びアーバニズムという概念から、現代の観光及び「ツーリスト」の概念について捉え直すという趣旨で話題提供が行われた。

中島直人（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授・一般社団法人アーバニスト代表理事）

アーバニストは単なる「都市計画の専門家」ではない

私が専門とする都市計画は実践と研究が分かちがたく結びついていることから、研究室で学生たちと多様な地域でまちづくり支援のプロジェクトに携

わってきた。

例えば、東京都の上野で2019年に始めた「アーツ&スナック運動」は、スナックや街路などに芸術や文化を挿入し、文化的な歓楽街を創出しようという取り組みであった。2021年からは、上野恩賜公園の不忍池と上野のまちをいわば分断している不忍通りを、両者を「つながる場所」として再編

する社会実験に取り組んでいる。

山梨県の富士吉田市では、観光を地域の活力に転換するビジョンとアクションをデザインする取り組みを学生たちと10年以上行ってきた。私個人としては、ふるさと納税を原資として空き家や空き店舗の改修に助成し、まちの賑わいを生み出す仕組みの運営に関わっている。このほか、特定のまちに

限定しない二地域居住を都市と地方双方の再生の原動力にする研究も行ってきた。

また、私は一般社団法人アーバニストの代表理事も務めており、2021年にこの団体の仲間と共同執筆した『アーバニスト——魅力ある都市の創生者たち』¹⁾という書籍を上梓した。ここから本題に入り、最初に「アーバニスト」という言葉が誰を指すのか？について論じたい。

オックスフォードやコリンズなどの英英辞書でurbanistという言葉を引くと、どの辞書でも「都市計画の専門家」といった説明が書かれている。だが、都市計画に関するアメリカで最も有名なサイト「プラネタイゼン(Planetizen)」の特集記事「最も影響力のあるアーバニスト100選」の人選を見ると、その多くは都市計画の専門家、特に技術者に限らない。

例えば『アメリカ大都市の死と生』を著した著述家のジェイン・ジェイコブズや、ブラジルのクリチバ市長として都市再生を行ったジャイメ・レルネル、都市批評家のルイス・マシソンなどの名が挙げられている。こうした状況を見ると、アーバ

ニストを単に都市計画の専門家と称するのは、現実に即しておらず齟齬が生じると言える。

「生きる」「つくる」が 共生するアーバンニズム

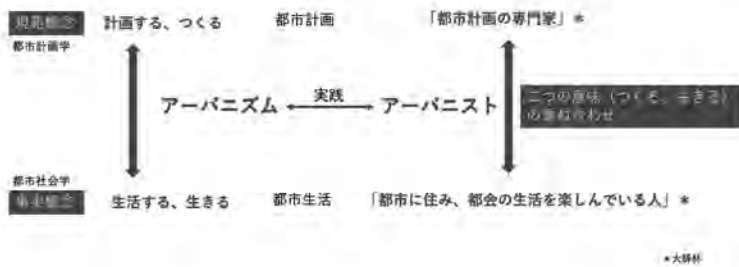
アーバニストとは誰かを考えるにあ

アーバンニズムの両義性

- ①都市社会学
ルイス・ワース (1897-1952)
「都市における生活様式」
・人口規模・密度・異質性
Wirth, Louis (1938), *Urbanism as A Way of Life*, *The American Journal of Sociology*, 44(1)
→その後、ホワイト、ガンス、フィッシャーらによって、都市はネガティブからポジティブへ
- ②都市計画学
エミリー・タレン
「ある確立された原理に沿って展開される、最良の居住地を実現させるためのビジョンと探究」
Talen, Emily (2005), *New Urbanism & American Planning*, Routledge
→1990年代以降のニューアーバニズム運動を皮切りに、都市計画・都市デザイン分野でアーバニズムは規範概念に。



アーバンニズムの実践者としてのアーバニスト



アーバニストという人たち

- ・アーバニストは個人である。
- ・アーバニストは職能ではなく、生き方である。
- ・都市を生きるのと同時に、都市に働きかける存在である。
- ・都市の魅力や資源を生かして、都市の人生を豊かにしていく。
- ・個々のアーバニストのアクションが共感により拡がって、運動(例えば、まちづくり)になっていく。
- ・特に都市を「つかいつづけていく」時代に重要な役割を持つ。
- ・アーバニストであることは、人間本来の創造性や総合性を回復していくことである。

当日発表資料

たり、アーバニストと深く結びついている「アーバニズム」という概念について考えたい。都市社会学的には、20世紀前半の社会学者ルイス・ワースが唱えた「都市における生活様式」を意味し、これは都市を「生きる」という「事実概念」に基づく。一方、都市計画学的には、都市計画家のエミリー・タレ

ンが整理した「ある確立された原理に沿って展開される、最良の居住地を実現させるためのビジョンと探究」を意味し、こちらは都市を「つくる」という「規範概念」に基づく。ワースが定義した「生きる」という事実概念は、1990年代のニュー・アーバニズム運動を経て、「都市はど

うあるべきか」というビジョンや探究を示す「つくる」規範概念へと拡張されてきた。

つまり、アーバニズムという概念は「生きる」と「つくる」の両義性を内包しており、アーバニズムを実践するアーバニストの中にも「生きる」と「つくる」という二つの役割が重なり合い、共生し融合していると言える。

話をまとめると、アーバニストとは都市計画の専門家であり、都市に住み、その魅力を楽しむ生活の実践者でもあるという両面を併せ持つ主体を指す。アーバニストの存在は、つくり上げられた都市を使い続けていく今の時代において重要な意味を持ち、都市の再生や成熟の原動力として不可欠と言える。都市が魅力的であり続けるには、将来のアーバニストを生み続け、育む環境を創り出すことが必要で、これは都市の持続可能性に深く関わる課題でもある。

ツーリズムとは何か

“Tourism is a social, cultural and economic phenomenon which entails the movement of people to countries or places outside their usual environment for personal or business/professional purposes.”

ツーリズムとは社会的・文化的・経済的現象であり、個人または業務・職業上の目的で、人々が日常の環境外にある国や場所へ移動することを伴う

Glossary of tourism terms | UNWTO

語源:

- ・「tour」「ろくろ」(ラテン語) → 「巡回」、「周遊」
- ・「-ism」「主義」「思想」「流儀」「スタイル」
- ・18世紀イギリス 長期的周遊(グランドツアー)の誕生
- ・「ツーリズム」の誕生(最古の使用例は1811年)

ツーリズムとは何か

tourism

noun (U)
US 49 / tuːrɪzəm / ˈtɔːrɪzəm / UK 49 / ˈtʊrɪzəm

the business of providing services such as transport, places to stay, or entertainment for people who are on holiday:

休暇中の人々に、輸送、宿泊施設、または娯楽などのサービスを提供する事業

- ・ Tourism is Venice's main industry.
- ・ These beautiful old towns have remained relatively untouched by tourism.

TOURISM | English meaning - Cambridge Dictionary

ツーリズムとツーリストの関係

ツーリズム

生きる
人々が日常の環境外にある国や場所へ移動する行為

↓
日常の環境外にある国や場所への移動を支える、様々なサービスを提供する産業や事業
つくる

ツーリスト

ゲスト
それぞれの楽しみ、関心に基づいて、日常の環境外の場所を訪れる人びと(観光客)

↑
X
ツーリストには「つくり手」(例:観光業者、観光プランナーなど)が含まれていない?あるいは、含むべきではない?
ホスト?

当日発表資料

ツーリズムとツーリストの「非対称性」

ここからはアーバニスト/アーバニズムの文脈に呼応する形で、ツーリスト/ツーリズムという概念についての

再考を試みたい。

世界観光機関(UN Tourism)は、ツーリズムを「社会的・文化的・経済的現象であり、個人または業務・職業上の目的で、人々が日常の環境外にある国や場所へ移動することを伴う」と定義している。一方、ケンブリッジ英英辞典で tourism という言葉を引く

と、「休暇中の人々に、輸送、宿泊施設、または娯楽などのサービスを提供する事業」と説明されている。

このことから、ツーリズムという言葉には日常の環境外にある国や場所へ「移動する行為」と、日常の環境外にある国や場所への移動を支えるさまざまなサービスを提供する「産業や事業」という二つの意味が内包されると考えられる。すなわちツーリズムという言葉もアーバニズムと同様に、「生きる」と「つくる」の両義性を持つと言える。

では、ツーリズムの実践者にあたるツーリストの定義についてはどうだろうか。ケンブリッジ英英辞典では tourist を「特に休日において、楽しみ、関心に基づいてある場所を訪れる人」と説明している。

ツーリズムが「生きる」「つくる」の両義性を持つのに対し、ツーリストは「ゲスト」という受動的な消費側面のみを指し、観光を支え、資源を創り出す「ホスト側」の主体性は含まれていない。現状では、ツーリストという言葉は単義的であり、共に両義的な意味合いを持つアーバニズム/アーバニストの関係とは異なる点の特徴と言える。

ツーリズム/ツーリストの関係を図式化すると、右下の部分に欠落している状態で、「この部分を埋めるものは何か?」を考えることが、これからの観光についての議論につながるのではないだろうか。

「日常化する観光」から考える新たなツーリスト像

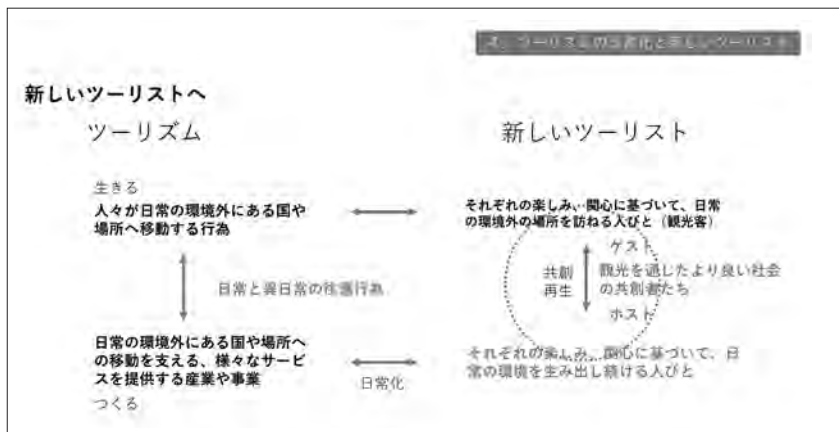
近年の観光は関心が日常化し、「非日常から異日常へ」とよく称される。2000年代になるまでAirbnbなどの民泊に代表されるように、日常の中にツーリズムが入っていくための様々なインフラが登場してきた。観光の対象が「日常の環境」そのものへと移行したことによって、「誰が日常という観光資源を創り出しているのか」という、つくり手の主体性が極めて重要になっている。

例えば観光を意識していないまちづくり活動や、アーバニストが個々の日常的な実践で創り出した都市の魅力などが観光対象となっているが、このように「日常化する観光」において、ゲストとホストの関係はもはや固定的なものではなくなっている。そうした中で、ゲストとホストの関係をどう捉え直すかが、今問われていると考える。

近年の観光研究では、地域住民の旅行履歴と観光に対する意識には強い相

関関係があり、ゲスト(生きるツーリスト)としての経験が、ホスト(つくるツーリスト)を育む可能性があるとして示唆されている²⁾。

また、地域を訪れたゲストと、ホストとして迎える地域住民が、共に新たな価値を創造するクリエイティブ・ツーリズムでは、ゲストは単なる消費



当日発表資料

者にとどまらず、ホストと「共創」する存在であることが求められる³⁾。観光を通じて地域社会や環境にプラスの影響を与えることを目指すリジェネラティブ・ツーリズム(再生型観光)では、ゲストとホストはいわば「統合」した存在と言える⁴⁾。

このように、近年のツーリズムは、ゲストとホストの境界の変化や立場の転換などが生まれ、ツーリストという言葉の意味が広がってきている。これまで、ゲストという役割のみだったツーリストは「それぞれの楽しみ、関心に基づいて、日常の環境を生み出し続ける」ことで、ホストにもなり得ると言える。

アーバニストが「生きる」「つくる」の二つの役割を歩き来する存在であるように、ゲストにもホストにもなり得る「新しいツーリスト」をどのように生み出していくかが、今後の観光で大事なポイントではないかと考える。

<参考文献>

- 1) 中島直人「一般社団法人アーバニスト『アーバニスト——魅力ある都市の創生者たち』、筑摩書房、2021年
- 2) 西川亮「自身の観光欲求及び観光嗜好と観光客受け入れ側としての観光に対する住民意識の関係性 京都・鎌倉・金沢・川越居住者を対象として」『都市計画論文集』、60巻3号、pp.1242-1249、2025年
- 3) 竹谷多賀子『クリエイティブツーリズム論』、水曜社、2025年
- 4) Bellato, L., Frantzeskaki, N., & Nygaard, C. A. (2023). Regenerative tourism: a conceptual framework leveraging theory and practice. *Tourism Geographies*, 25(4), 1026-1046

”観光を学ぶ” “ということ”

ゼミを通して見る大学の今

第28回 帝京大学 経済学部観光経営学科

山下ゼミ

ゼミ長が振り返る
1年間の歩み

1. はじめに

山下ゼミを一言で表すと「仲間と共に、人として成長し合えるゼミ」である。ゼミでの活動を通して「素直・謙虚・感謝」をモットーにゼミの信用ブランドを磨き上げることに共感する学生を募っており、書類選考と現役生との面接を経てゼミ生が選ばれる。今年度はゼミ全体の研究テーマを「持続可能な観光地域づくり」とし、観光地域づくりに精通する山下晋一教授のもと「スマートシティ」「Maas

(Mobility as a Service)」「エアライン」の3つの研究グループに分かれて研究を行った。

21名の個性溢れるゼミ生と週に1回、1時間半の授業時間を用いて日々取り組んでいる。

2. 活動内容

主に研究報告のプレゼンテーションに向けたグループワークを行っており、ゼミ生が主体性を持って取り組んでいる。

4月～7月の春季と9月～1月の秋

季それぞれに中間発表2回と最終発表1回を行うスケジュールのもと、年間で計5回プレゼンを行う。

限られた時間の中で精度の高い研究を行い、より良いプレゼンを作り上げるために授業外の時間も積極的に活用しているゼミ生がほとんどであった。ゼミがない日も連絡を取り合い、必要に応じてオンラインで打ち合わせを行っている姿も多く見受けられた。

こういった数多くの発表の機会が毎回完成度の高いプレゼンを行えるよう、計画的な準備期間の過ごし方を求められる環境は山下ゼミならではの緊



山下晋一（やましたしんいち）

帝京大学経済学部観光経営学科教授。北海道帯広市出身、早稲田大学商学部卒業、日本航空株式会社に勤務、整備本部業務部長、台湾支店長、JALグループサービス株式会社取締役東京支社長、釧路空港ビル株式会社常務取締役を経て定年退職。2015年NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構専務理事を務め、2021年度から現職。2022年マサチューセッツ州立大学ローウェル校MBA取得。研究テーマは「持続可能な観光地域づくりとDX」。観光庁「アフターコロナ時代における地域活性化と観光産業に関する検討会」委員、台湾政府観光庁長官主催フォーラム「構築観光新未来フォーラム」基調講演講師などを務める。

張感と成長実感に満ちている。

実際に多くのゼミ生がその忙しさに苦労したと話すのが、全て自身の成長につながっていると全員が実感しており、私自身も非常に良い取り組みであったと感じる。

また、チームの進捗報告を毎週欠かさず教授に行っている。その週のゼミで行ったことやチーム内のできごと、今後のスケジュール等をレポートにまとめ、見直しを持って研究活動ができるようチーム全員が毎週の課題として進捗報告書を教授に提出するのである。



【写真1】チームプレゼンテーション

この報告書を作成するにあたり意識していたことは、自分自身がプロジェクトのリーダーを担っているという当事者意識を全員が持つことである。

リーダーという立場でチームを俯瞰した際に見えてくる現状を把握した上で、上司と位置付けられる教授が何を知りたがっているのかという視点でレポートをまとめる必要がある。行ったことをただ書き連ねるのでは伝わる報告書にはならないため、工夫が必要であった。

報告書の中から、山下教授が良いと感じたものを全体に共有することで、ゼミ生同士が刺激し合いながら日々技術を磨き上げることができた。

このような相手に伝わる報告を行うという習慣をはじめ、山下ゼミでは社会に出てから役立つ取り組みを積極的に行っている。学生である今のうちから今後必要になるスキルを習得できる点が山下ゼミの魅力である。

3. 研究内容

先ほど紹介した各チームの研究テーマはゼミ生自身が選定したものである。

今年度は「スマートシティと地方創生」「日本国民の幸福度向上のためのMaas」「地方空港を拠点とした持続可能な観光分散モデルの提案」というテーマを設定し、年度末の発表に向けて1年間研究活動を行った。

また二〇二五年度からは、最終発表のテーマだけでなく中間発表のテーマもゼミ生が選定した。中間発表では最終レポートを作成する際に材料となる知識や情報を得るため各チームで研究し、研究内容を報告するというものである。

ただ決められたことをするのではなく、全て自分達で選び、実行するという行為は非常に難しく、チーム内でき

め細かい認識の統一が必要だった。社会課題に対して問題意識を持つことをはじめ、何を研究するべきか、どの方面にアプローチするべきなのかという0から1を生み出す思考力が試され、計画の作成で戸惑うチームがほとんどであった。しかし前向きな学生ばかりであったため、とにかくやってみることを大切に壁にぶつかっても手を止めることなく常に前進することができた。

特に悩んだ具体的な例として、日本の法制度をはじめとするDX (Digital Transformation) 拡充の障壁となる基盤整備の不十分さである。日本が世界の中でも遅れをとっていることは認識していたものの、その詳細な要因に関してはゼミでの研究を進める中で初めて知り、触れる機会がなかった法律の知識と、国レベルというスケールの大きな話題にどう触れるべきなのか悩んだチームがほとんどだった。

しかし、山下教授のアドバイスのもと、あるべき姿から逆算して今するべきことを考えるバックキャストイング、客観的データに基づき判断するEBPM (Evidence Based Policy Making) が強く求められ、さまざま

な世界ランキング指標を調査する中で日本の現在地を理解し海外と比べるといかに遅れているのかという点に注目した。日本のデジタル競争力ランキングは30位、世界幸福度ランキングは55位、スマートシティインデックスが東京108位、大阪99位。他にも多くの指標で日本という国の立ち位置を知り、世界という括りだけではなくアジアの中でどの立ち位置も把握することで、危機感や日本が目指す姿の方向性が明確になっていった。

4. プレゼンテーション

研究内容だけでなく、プレゼン技術の向上にも重きを置いてきた。人前で話すことが苦手な学生も、堂々と立派にプレゼンする仲間の姿に刺激を受け、さまざまな工夫を凝らして理想の姿を追い求めた。

全員が共通してチームプレゼンの際には原稿をなるべく読まず、真つすぐ前を向いて聴衆の表情を確認しながら自身の言葉で伝えることを目標にし、良いと感じる人の発表を真似たり、互いにアドバイスし合いながら磨きをかけてきた。

またパワーポイント資料も、人に伝わるものを意識して作り上げた。文字の大きさや配色、アニメーションの統一といった細かな部分まで気を配り、全てのスライドを同じ人が作ったと感じるレベルのものを追求した。

このような相手に寄り添うプレゼンを各チームが実現することで、発表内容の印象や聞き手の理解度が大きく変わることを聞き手としても話し手としても実感した。

5. 教授の魅力

山下教授は日本航空出身で整備本部業務部長、台湾支店長、JALグループサービス東京支社長などを経験され、定年後、阿寒観光協会まちづくり推進機構（地域DMO）において持続可能な観光地域づくりを推進、2021年に帝京大学からの招聘により現在の観光経営学科教授をされている。特に日本航空の経営破綻の経験の中で当時の稲盛和夫会長から学んだ「人として正しいかどうかで判断すること」、「人生成功の方程式（能力×熱意×考え方）」におけるプラスの考え方（素直・謙虚・感謝・利他の心）の実践、「時

間を守る・約束を守るの積み重ね」による信用ブランドの磨き上げの大切さなどをゼミ生に求めており、ゼミ生も積極的に実践し、就職活動においてもとても大きな力になっている。

山下教授は自由に何事にも挑戦させてくれた。ただ見ているだけ、と自負している通り、本当に教授自身から口を出すことはないが「どうすればいいですか」という問い以外に対しては必ず答えて下さった。自分自身で考えることを放棄せず、自分なりの意見を



【写真2】ゼミでの古希祝い

持った上での疑問や考えに対しては親身に受け止めていただいた。

また、昨年のお祝いを盛大に行うほどゼミ生に愛されている教授である。紫のちゃんちゃんこを身に纏う教授に、大好きなビールを美味しく飲んでいただけのように、名前に「Don't drink too much」というメッセージ入りのタンブラーをプレゼントした。

そのイベントが思い出に残っているというゼミ生も多く、日頃の感謝の気持ちを伝えられたことや教授に喜んでいただけたことが私自身も非常に嬉しく感じた。

6. ゼミ生の雰囲気

社会課題に問題意識を持ち、より深く理解して現状を変えたいという思いを持つ人が多くいたと感じる。実際にグループワークの様子を見ても、お互い素直に意見交換をして謙虚に受け止め、次の学びにつなげるというサイクルを体現できるゼミ生が多かった。

もちろん全員初めてのゼミ活動であり、手探りな部分も多かったと感じる

が、成長に対する前向きな姿勢は私自身も日々見習いたいと感じることが多くあった。

特にルーブリックという評価シートを用いたプレゼンの講評でゼミ生の向上心を強く感じた。ルーブリックは、プレゼン内容の充実度、プレゼンの構成、プレゼン資料の完成度、発表姿勢、発表時間の過不足の計5項目をゼミ生全員が評価し、次回のプレゼンにつなげるという評価方法である。

ルーブリックでの講評はゼミ生と相性が良く、自身の素直な感想や指摘を包み隠さず全て伝え合っている点が非常に良かったと考える。良い点は詳細に、具体的に伝え、改善点はシンプルにわかりやすく。時には自身の体験も交えた講評をしてくれるゼミ生もいた。そういった姿を目の当たりにし、仲間が共に成長したいと思ってくれていることを実感した瞬間の心強さは、何物にも代え難い原動力になっていたと感じる。

そういう真面目な一面もありつつ、定期的開催される懇親会を楽しんだり、ラグビー部やラクロス部などの部活動を行っているゼミ生の試合に駆けつけ応援したり、ゼミの研究以外も非

常に充実した時間を仲間と共に過ごしている。

ゼミ生も教授も、大勢で盛り上がる
ことが何より好きのため、ラグビー応
援など集合ができれば1期生の先輩方
から現役の4期生まで集まり、2次会
までほぼ人数を変えずに過ごすことが
定番である。

52名の中から選ばれた21名のゼミ
生だが、やはり3年のゼミ生と教授が
面接官になって選ぶゼミ生だけあり、
仲間同士の結束力は強い。卒業後も
我々後輩の面倒をよく見てくださる先
輩方とのご縁の大切さを感じており、
今後も変わらず集まりたいと常々感じ
る。

山下教授は日本航空の利光松男元社
長から学んだミラーボール経営を心が



【写真3】ラグビー部応援後の懇親会

けていて、ゼミ生が輝くことで山下ゼ
ミと山下教授は輝くということを常に
おっしゃり、最終授業で「ゼミ生の皆
が輝き、その結果として山下ゼミと私
がとても輝くことができた」という感
謝の言葉をいただき、とても達成感を
感じることができた。

7. ゼミの今後

山下ゼミには似たもの同士の明るく
元気な学生が集まっている。初対面の
仲間が多い中でもすぐに打ち解け、懇
親会では大騒ぎ。その情熱はゼミの研
究に対しても同様で、一度決めたこと
は最後までやり抜きたいという思いか
ら活発な議論を何度も重ねて最終発表
まで駆け抜けた。

山下教授は70歳という節
目を迎え、一つの区切りと
してゼミ生募集を終了さ
れた。

大学の中でも惜しまれる
声を多く聞くが、最後の経
済学部ゼミ研究報告会で3
チーム合同のプレゼンを行
った後、山下教授に花束
贈呈をした際に、「今年度



【写真4】ゼミ成果報告会後の定年祝花束贈呈

のゼミは最後の集大成に相応しいもの
であった」と言っていた。ゼミ生は
皆とても嬉しく思っている。

山下教授からゼミ4期生へ宛てて以
下の感想をいただきました。

「課題はかなり厳しいものを数多く提
示してきた中で、この1年で各ゼミ生
が大きく成長したことをとても嬉しく
思います。また大切にしたいとお
願っていた素直・謙虚・感謝・タラ

イの水（利他の心）の心構えをゼミ生
の皆が実践し、とても明るく楽しい前
向きなゼミの雰囲気作りを心がけてい
ただきました。ラグビー部やラクロス
部の応援、クリスマス懇親会、オーブ
ンキャンパスでのゼミ紹介、たまた来
連携EXPO2025出展、経済学部
ゼミ研究報告会などの数多くのイベン
トに皆さんが積極的に参加し盛り上げ
ていただき、とても思い出に残る充実
した1年間のゼミ活動であったと思ひ
ます。ゼミ生の皆さん一人一人に心か
ら感謝いたします。」

ゼミが終わり、4期生が卒業し、山
下教授が退職されても、必ずこのご縁
を大切に続けたいと感じる。このゼ
ミに出会えたことが人生の財産であ
る。
(文：ゼミ長 上條芽生)

観光文化

購読のご案内

「観光文化」の創刊は1976年。
読者は、観光にかかわる省庁・各地方公共団体の方々が最も多く、
次いで大学等の研究機関、観光産業界、全国の大学図書館、
公立図書館の順となっています。
季刊誌として年4回の発行です。

（ 定期購読のご案内 ）

当財団ホームページで全文公開している「観光文化」ですが、
「毎号続けて冊子で読みたい」というご要望をいただくことも多いため、
定期購読のお申し込みも承っております。
当財団ホームページからお申し込みください。

<https://www.jtb.or.jp/book/subscription-2/>

期間

1年間

(年4冊。季刊)

※お申し込み時点の最新号から4回分をお送りします。開始号については変更可能です。

購読料

4,400円(税込、4冊分送料込)

(1冊あたり定価1,540円(税込)ですので約28%off)

※途中キャンセルはできませんこと、予めご了承ください。

※お申し込みの確認がとれ次第、請求書をお送りいたします。

※お支払いは銀行振込のみとなります。※振込手数料はご負担をお願いいたします。

※自動継続としておりません。

4冊分お送りした後、次号発行の1か月前を目安に、

メールで継続の意思確認をさせていただきます。

ご返信いただかなければ自動解約となります。

（ 単号販売のご案内 ）

単号での販売も行っています。

オンデマンド印刷版として、創刊号(1976年)から最新号まで、全ての号をご購入いただけます。

アマゾン、楽天ブックス、三省堂書店オンデマンドでお買い求めください。

定価1,540円(税込。215号～264号は1,100円)。

（ お問い合わせ ）

観光文化 編集部までお願いいたします。

E-mail:jtbfbbook@jtb.or.jp

FAX:03-5770-8359

公益財団法人日本交通公社
および
「旅の図書館」
への
アクセス



〒107-0062

東京都港区南青山二丁目7番29号 日本交通公社ビル

東京メトロ銀座線、半蔵門線、都営大江戸線

「青山一丁目」5番出口から徒歩3分

- 青山通りからお越しの方…楽天クリムゾンハウス青山のビルをくぐり、レストラン『NARISAWA』の前の公開空地を通り抜けると正面左側が日本交通公社ビルです。
- 外苑東通りからお越しの方…1つめの角を西に曲がり、2つめの交差点を越え、約10m先左側が日本交通公社ビルです。
- 駐車場はございません。

機関誌

観光文化

第269号

第50巻 第2号 通巻 第269号

発行日●2026年4月27日

発行所●公益財団法人日本交通公社

〒107-0062 東京都港区南青山二丁目7番29号 日本交通公社ビル

☎03-5770-8350 <https://www.jtb.or.jp>

デザイン●川口繁治郎(川口デザイン)

写真●PIXTA

校閲・校正●株式会社ぶれす

制作・印刷●佐川印刷株式会社

企画・構成●山田雄一

発行人●小林高広

編集人●小松田淳

編集室●kankoubunka@jtb.or.jp

©2026 JTBF 禁無断転載
ISSN 0385-5554

機関誌

観光文化

第269号

第50巻 第2号 通巻 第269号



公益財団法人 日本交通公社
Japan Travel Bureau Foundation

〒107-0062 東京都港区南青山二丁目7番29号 日本交通公社ビル
TEL: 03-5770-8350
<https://www.jtb.or.jp>

禁無断転載

ISSN 0385-5554

機関誌 観光文化

別冊

観光資源一覽表

観光資源の評価に関する研究 ～第5期研究を終えて～

観光研究部 席主任研究員 五木田 玲子
観光研究部 研究員 工藤 亜稀

1. 観光資源研究の経緯

日本は魅力的な観光資源にあふれている。当財団における観光資源研究は、1968年度に実施した自主研究「観光資源調査の手法」を端緒とする。以来、半世紀以上にわたり、観光資源の魅力の基準を整理し、その基準に沿って全国の観光資源を客観的・総合的に評価して「全国観光資源台帳」として体系化する取り組みを継続してきた。個人の嗜好や人気投票に依拠するのではなく、万人が美しいと感じる魅力の源泉を探究するという基本姿勢を貫いており、その変遷は大きく以下の5つの段階に整理される。

第5期は、取り扱う件数が膨大であったため、着手から約10年間の歳月を要したが、このたび全都道府県の公開が完了に至った。そこで、本稿では、改めてその評価の枠組みについて整理しておきたい。

【第1期：研究の黎明とリスト化】

1971～1973年度にかけて、旧建設省道路局からの委託により「観光交通資源調査・観光行動調査」を実施した。これにより、約1万件にのぼる全国の観光資源が初めてリスト化された。これが、客観的評価に基づく台帳整備の始まりである。当時は高度経済成長期における道路網整備が進められており、国土の保護・保全・活用の優先順位づけや、観光資源の保全と効果的な活用の推進が強く求められていた。

【第2期：研究成果の公表と活用】

低迷が続いていた国内旅行需要の喚起を図るべく、台帳の見直しを行い、その成果として写真集『美しき日本—いちどは訪れたい日本の観光資源』を1999年に発刊した。これに伴い、それまで調査・研究用として内部活用していた評価の一部を一般に開示し、旅行需要の喚起へとつなげた。旅行の大衆化・大量化が進んだ時代にあって、日本の素晴らしさを見直し、観光の本質を問い直したのである。

【第3期：今日的価値基準による再構築】

観光の多様化、海外旅行経験率の上昇、外国人旅行者数の増加といった社会環境の変化を踏まえ、評価対象とする観光活動および評価の視点の拡充、観光資源種別の再編など、評価の枠組みの再構築と観光資源の再評価を試みた。資源の魅力の本質を探究する方針はあくまで堅持し、2014年に写真集『美しき日本—旅の風光』として成果を発表した。なお、ここまでの詳細な研究の経緯は、『観光文化』222号（2014年7月発行）の「特集：観光資源評価研究『美しき日本 旅の風光』」にまとめている。

【第4期：特別地域観光資源の再整理】

我が国を代表する特A級・A級資源の再評価が進む一方で、各地方を代表しアイデンティティを示す観光資源の再評価が課題として残されていた。そこで、都道府県や市町村を代表する特別地域観光資源について、定義・評価基準の再整理および選定を行った。なお、第4期の研究詳細については、『観光文化』234号（2017年7月発行）所収の「観光資源の評価に関する研究～“特別地域観光資源”の魅力と評価について」にまとめている。

【第5期：ウェブサイト『美しき日本 全国観光資源台帳』の公開】

研究の集大成として、独自の「観光資源台帳」と、かつて詳細な観光案内として定評のあった『JTB新日本ガイド』（現在は絶版）の全コンテンツデータ（約44,000件）を統合・精査した。観光研究者・実務家による「観光資源調査委員会」での再評価や、地域の実情に精通した専門家による現地調査を経て、ウェブサイト『美しき日本 全国観光資源台帳』として、解説や見どころを含む詳細な情報を広く公開するに至った。

2. 観光資源評価の枠組み

①観光資源の考え方

観光資源の定義については、既存研究を継承している。

【観光資源の定義】

観光資源とは、人々の観光活動のために利用可能なものであり、観光活動がもたらす感動の源泉となり得るもの、人々を誘引する源泉となり得るもののうち、観光活動の対象として認識されているものである。

観光活動とは、見ることや、その場に身を置くこと、体験することにより、感性や知性を通して観光資源の「素晴らしさ」を感じることで、人生が豊かなものになり、人間的な成長を促される行為である。魅力ある観光資源とは、自然や人間が長い時間をかけて創り出したものであり、現在のお金や技術で容易には創り出すことができない「固有性」や「土着性」、「独自性」を持ち、他に代替がきかないものである。その資源が本来有している魅力に加え、その整備状況も評価の対象とし、資源の現在のあり様を評価対象とする。ただし、アクセスの容易さのように、資源のあり様と関係の薄い要因によって多くの観光客が訪れることもあり、多くの観光客が訪れているからといって観光資源の魅力が高いということにはならない。

【評価対象とした観光資源】

●観光資源の定義を満たすもので、スポーツのように特別な技能を要さない、ごく一般的な利用方法によって認識できる部分を評価対象とする。

- 観光地は複数種類の観光資源や観光施設が集積して構成されている。今回の評価対象として取り上げるのは、あくまで個々の観光資源であり、観光地は評価対象とはならない。
- 視点場は評価対象とならない。感動の源泉となり人々を誘引する源泉となるのは、視対象であるためである。
- 一時期の社会的流行や風潮によらず、資源が本来有している魅力を評価するため、社会的に評価が定まっていると考えられる資源を評価対象とし、観光対象となってから原則としておおむね20～30年程度が経過したものを中心に評価を行う。

②観光資源ランク

各地を代表する観光資源の中でも、特に強く私たちの心に響き私たちに惹きつける資源を、特A級資源、A級資源、特別地域観光資源として選定している【表1】。どのような観光資源に心惹かれるかは人それぞれだが、その中にあってもこれらの資源は、普遍的な力を持ち、より多くの人が素晴らしいと感じ、その資源と対峙したときに大きな感動を覚えるものである。

③観光資源種別

観光資源の性質に応じて、山岳や湖沼などの「自然資源」10種類、寺社や郷土景観などの「人文資源」14種類、計24種類の観光資源種別を設定している【表2】。

④評価の視点

大きな感動を生み出す観光資源には、いくつかの共通する特徴があり、こうした特徴を14の評価の視点として設定した【表3】。ここでは、美しさや大きさといった視覚的・直感的な要素だけでなく、住民や歴史的事象・人物とのつながりといった、深く知ることによって初めて理解できる要素も含まれる。評価にあたっては、これら全ての項目を満たしている必要はなく、一つでも傑出した要素があれば高く評価している。なお、資源種別ごとの特徴を踏まえた評価のポイントについては、【表2】に整理している。

3. 観光資源の評価

①評価方法

事務局・委員および地域資源に精通した研究者・実務者による現地調査を実施したうえで、調査結果を委員会での審議に諮った。評価にあたっては、これまでの評価方法を踏襲し、長年にわたって観光の現場を見続けてきた観光研究者・観光実務の専門家である溝尾良隆氏（立教大学名誉教授）、林清氏（元当財団常務理事）、志賀典人氏（元当財団会長）、寺崎竜雄氏（元当財団常務理事）による「観光資源調査委員会」を設置し、一つ一つの観光資源について議論し、総合的な判断を行った。

②評価結果

第5期では全2,906件の観光資源が選定され、その内訳は特A級56件、A級421件、特別地域観光資源2,429件であった。資源種別の資源件数は【表4】に示す通りである。自然資源では、「山岳」が172件、「植物」が165件、「海岸・岬」が131件の順に多い結果となった。人文資源では、「神社・寺院・教会」が突出して多く625件、「年中行事」が245件である。地方別の観光資源件数については、【表5】に示した。自然資源の件数を見ると、中部地方が151件と最多で、以下、東北地方（122件）、関東地方（111件）、九州地方（110件）と続く。人文資源については、近畿地方が474件、関東地方が411件で他地方より顕著に多かった。総数では関東・近畿が多いものの、資源構成を見ると、近畿地方が人文資源中心であるのに対し、北海道や沖縄県では自然資源の件数が人文資源を上回るなど、地域ごとに資源構成の特色が表れている。すべての観光資源の一覧は【表6】に掲載している。

4. おわりに

本来、歴史や自然に裏打ちされた観光資源の評価というもの、そう簡単には変わるものではない。しかしながら、社会情勢や人々の価値観、観光を取り巻く環境は常に変化し続けている。普遍的な価値を尊重しつつも、評価の基準や個々の資源に対する評価そのものについては、時代に即した不断の見直しが不可欠であると認識している。今後も、変わりゆく時代の中で変わらぬ価値を見極め、日本の観光資源の魅力を正しく伝えていく取り組みに、真摯に向き合っていきたい。

最後に、本調査の実施にあたり多大なるご尽力をいただいた委員の皆様、現地調査および本サイトへの掲載にご協力いただいた関係各位、ならびに事務局一同に、心より感謝申し上げます。

ウェブサイト『美しき日本』の使い方

ウェブサイト『美しき日本 全国観光資源台帳』の最大の特徴は、各観光資源の概要に加え、観光研究の専門的な視点を交えた解説にある。単なる情報掲載にとどまらず、その資源がなぜ美しいのかという「魅力の根拠」や、どこを見るべきかという「鑑賞のポイント」を深く解説している。検索機能については、「都道府県」「資源タイプ（種別）」「評価ランク（級）」による絞り込みが可能であるほか、地図上からの検索や、任意のキーワード、複数条件を組み合わせた検索にも対応している。なお、選定された資源であっても、関係者の意向等により掲載を見合わせている場合があるため、すべての資源が網羅されているわけではない点に留意されたい。



【表 1】 観光資源ランクの定義

資源ランク	定義
特 A 級資源	わが国を代表し日本イメージの基調となっている資源であり、世界にも誇示しうるもの。日本人の誇り、日本のアイデンティティを強く示すもの。人生のうちで一度は訪れたいもの。
A 級資源	特 A 級に準じ、わが国を代表し日本イメージの基調となっている資源であり、日本人の誇り、日本のアイデンティティを示すもの。人生のうちで一度は訪れたいもの。
特別地域観光資源	その都道府県や市町村を代表する資源であり、その土地のアイデンティティを示すもの。その土地を訪れた際にはぜひ立ち寄りたいたいもの。また、その土地に住んでいる者であれば一度は訪れたいもの。

【表 2】 観光資源種別の定義、種別ごとに特徴的な評価のポイント

観光資源種別	定義	資源種別ごとに特徴的な評価のポイント
1. 山岳	2万5千分の1の地形図に山岳として名称が記載されているもので、観光的に魅力のあるもの。山岳の範囲は、山頂、山腹、山麓・裾野を含めた広い範囲とする。 なお、山岳のまとまりとして一般的に認識され、親しまれているものは、地理的条件（一目で眺望可能、縦走可能）、精神的な結びつきなども考慮したうえで、まとまりの山岳名称を用いることもある。	- 独立峰で遠方からも目立つ - 雪をかぶった姿が印象的 - 独特な形状：円錐形、迫力、山頂部の特徴的な形状、個性的、美しい稜線 - 特に優れた興味対象：花、湿原、池、紅葉、地形 - 優れた眺望 - 信仰の対象 - シンボル性
2. 高原・湿原・原野	2万5千分の1の地形図に、名称が記載されている高原、原野またはこれに類するものと、沼沢以外の湿原で、観光的に魅力のあるもの。 なお、名称にかかわらず、地形が高原状または平原状のものを対象とする。一般的にまとまりとして認識され、親しまれているものについては、まとまりの名称を用いることもある。	- 山頂部に立地 - 特に優れた興味対象：植物、動物、池塘、川 - 周囲の景観 - 優れた眺望 - 原始性、神秘性
3. 湖沼	2万5千分の1の地形図に湖沼として名称が記載されているもの（群名・水域総称含む）、またはそれに類するもので、観光的に魅力のあるもの。 なお、自然地形を活かして造成されたダム湖も対象とする。	- 山頂部に立地 - 独特な形状、肢節量：入り組んだ湖岸、丸い湖岸 - 水質：透明度、水の色 - 特に優れた興味対象：動物、植物、島 - 周囲の景観、特に山岳との一体性 - 原始性、神秘性
4. 河川・峡谷	河川風景（河川+周辺）および一般的に〇〇峡、〇〇峡谷、〇〇谷と呼ばれるもので、観光的に魅力のあるもの。 なお、同一河川であっても、上流と中流・下流で、それぞれ観光的に異なる魅力がある場合は、別の観光資源として扱う。	全流域共通 - 急流、勢い - 水量 - 堂々とゆったりとした流れ - 水質：透明度、水の色 - 特に優れた興味対象：滝、湿原、植生、紅葉、地質的特徴 - 周囲の景観、特に田園景観との一体性 - 人工物が織りなす景観との一体性：SL、沈下橋 - 神秘性 - アクティビティ要素：川下り 上流域 - 勢いのある水の流れと渓谷 中流域 - 周辺都市との一体性 - 船下りやいかだ下りの観光の利用 - 自然景観と船との一体感 河口域 - 河口の都市との一体性
5. 滝	2万5千分の1の地形図に滝または諸瀑として名称が記載されているもので、観光的に魅力のあるもの。 なお、複数の滝が一つのまとまりとして同一名称で呼ばれるものは、その名称を用いることもある。	- 落差 - 幅 - 水量 - 独特な形状 - 繊細さ - 周囲の景観との一体性：岩、植物 - 集積度 - 神秘性、原始性 - 信仰の対象 - アプローチの環境、眺望地点：適正性、意外性
6. 海岸・岬	砂浜、砂丘、砂州、岩礁、断崖などによって構成される海岸風景（後背地、松原も含める）、および容易に見ることができる海中景観で、観光的に魅力のあるもの。	海岸 - 砂質 - 海浜の大きさ：長さ、幅 - 切り立った崖の迫力（リアス式） - 水質：海水の透明度、海水の色 - 珍しさ：鳴き砂（国天然記念物） - 特徴的な形状の岩 - 特に優れた興味対象：松林、島、植物、動物 - 歴史性 岬 - 郷愁を誘う立地（最果て）
7. 岩石・洞窟	岩柱、洞窟、洞穴、岩門、鍾乳洞、溶岩流、溶岩原、糞の河原、断崖、岸壁、岩礁、海蝕崖、海蝕洞などの地質及び地形上の興味対象で、観光的に魅力のあるもの。	- 地球活動のダイナミズム - 規模 - 独特な形状 - 繊細さ - 周囲の景観との一体性：滝、植物 - 集積度 - 神秘性、原始性 - 信仰の対象
8. 動物	日本特有の動物、日本の自然環境における特有の動物、日本著名の動物及びその生息地で、観光的に魅力のあるもの。 なお、生息地が定まらないもの、見ることが偶然性に左右されるもの、動物園などで活動範囲を限定して保護・飼育されているものは対象外とする。	- 群れ、個体数 白鳥：700～800羽以上 ウミネコ：5千～1万羽以上 哺乳類：一度に大量に見られる - 特徴ある動き、鳴き声、表情 クジラ類：ブリーチングなど迫力のあるジャンプ サルの入浴 - 親近感 - 住民による保全活動 - レクリエーション活用が確立（ホエールウォッチングなど） クジラ類：安定的に見られる

観光資源種別	定義	資源種別ごとに特徴的な評価のポイント	
自然資源	9. 植物	<p>名木、巨樹、老樹、並木、森林、植物帯、植物群落、自生地、限界地などで、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、複数の植物が見られる場合は、原則としてより評価の高い方で代表させる。寺社や城、園地などにある植物は、原則としてそれらの種別に含めて評価するが、寺社や城などとの関わりがあっても、そのもの以上に植物が特徴的な場合には、この種別で評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 集積度 <ul style="list-style-type: none"> サクラ類：1,000本以上 アジサイ：3万株以上 シバザクラ：5万㎡かつ100万株以上、際立った特徴 サクラソウ：際立った特徴（高密度の群生、自生地など） スイセン：300万本以上 シャクナゲ：15万本以上 - 大きさ <ul style="list-style-type: none"> 巨木類：樹高50m以上、幹回り15m - 斜面に広がる - 生育環境および周囲の景観：川沿いの桜 - 信仰の対象 - 歴史性 - シンボル性（市民や信者によって育まれてきたもの）
	10. 自然現象	<p>火山現象（噴火・泥火山現象、地獄現象など）、潮流現象（渦流、潮流など）、気象現象（樹氷、霧氷、流氷など）などの自然現象で学術的に価値の高いもの、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、夕日や星空等、日本全国どこでも共通して見られるものは対象外とする。「不知火」「蜃気楼」等、出現箇所や出現時期が限定されるものを対象とする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 集積度 - 季節性 - 意外性 - 迫力
	11. 史跡	<p>生活、政治、祭、信仰、教育学芸、社会事業、産業土木、外国人などに関する遺跡（城跡は除く）で、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>国分寺跡、関所、古戦場、住居跡、古墳等、現存しないが、思いをはせる対象として観光的に魅力のあるものを取り上げる。なお、城や現役の寺社、復元建造物は、それぞれ独立した種別として扱う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 認知度（日本人が常識的に知っているもの） - 保存状態 - ガイダンス機能 - 面積 - 調査に基づく復元・整備状況 - 周囲の景観
	12. 神社・寺院・教会	<p>由緒ある建築的に優れた社寺、文化財を所蔵または付帯する社寺、境内（庭園を含む）が優れている社寺などで、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、付帯する塔頭、庭園や植物を含めて評価する。寺社境内の植物は、原則としてこの種別に含めて評価するが、寺社以上に植物が特徴的な場合は、「植物」種別で評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 塔頭 - 庭園や植物 - 非常に価値のある仏像（例：東大寺大仏、鎌倉大仏、広隆寺の弥勒菩薩半跏像など） ※なお、大きな仏像は、地元の人に親しまれていること、風景に溶け込んでいること、必然性があることを考慮して判断する
	13. 城跡・城郭・宮殿	<p>古代から近世に至る軍事や行政等の目的で建造された城跡・城郭（庭園を含む）・宮殿で、観光的魅力のあるもの。</p> <p>なお、城内の植物は、原則としてこの種別に含めて評価するが、城以上に植物が特徴的な場合には、「植物」種別で評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 築城技術の独自性 - 歴史的事件の舞台 - 保存状態：城郭、石垣が大規模に残存 - 調査に基づく復元・整備状況
	14. 集落・街	<p>農山漁村や歴史的街並み、繁華街、商店街などにより、その土地の自然や歴史、文化を表す特徴的な集落・街区を構成している地区で、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、伝統的建造物群保存地区は基本的に「集落・街」種別、文化的景観の多くは「郷土景観」種別で評価する。常設の商店街は「集落・街」種別、市場は「郷土景観」種別で評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 保存状態 - 人の織りなす雰囲気 - 歩く楽しさ - 特異性のある町並み - 地場産業の集積
	15. 郷土景観	<p>生業や風習、その土地の産業、人の織りなす風景（動作を含む）など、その土地の自然環境や歴史、文化を表す特徴的な景観や、それを構成している地区で、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、伝統的建造物群保存地区は基本的に「集落・街」種別、文化的景観の多くは「郷土景観」種別で評価する。常設の商店街は「集落・街」種別、市場は「郷土景観」種別で評価する。「道」は、「郷土景観」種別で評価する。植物が産業として栽培されている場合は、「植物」種別ではなく、「郷土景観」種別で評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 集積度 <ul style="list-style-type: none"> 梅林：35,000本以上 棚田：1,000枚以上 - 保存状態 - 周囲の景観との一体性
	16. 庭園・公園	<p>鑑賞や散策などのために作庭および造成された庭園・公園で、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、社寺、城郭等に含まれるもの、自然公園は対象外とする。体験要素の強い公園は「テーマ公園・テーマ施設」種別で評価する。</p>	
	17. 建造物	<p>建物、橋、塔などの建築物や構築物（社寺、城郭に含まれるものを除く）で観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、複数の建造物が集積しているものは、「集落・街」種別、または「郷土景観」種別で評価する。昔の建造物が現在も残っている場合・昔の建造物が復元されている場合には、「建造物」種別で評価する。</p>	
	18. 年中行事 (祭り・伝統行事)	<p>社寺や市町村あるいは各種団体が開催日を決め年中行事・式年行事として行っているもののうち、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、祭り（宗教性のある行事を起源とする）および、地域固有のものであり地域に根付いたイベントを一部含む。盆踊りに類するもの、花火大会に類するものは「年中行事」種別で評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 地域由来の伝統技術 - 規模 - 美しさ：装飾、所作など - 歴史性 - 特徴的な囃子、音楽、歌 - 特徴的な踊り - スピード感、迫力 - 入出が多く賑わう - 火を用いる - 水の中に入り込む
19. 動植物園・水族館	<p>国内外の動植物を収集、飼育・栽培・保管、展示し、教育や調査研究などの事業を行う施設で、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、生息する動植物に特徴があっても、入域が管理されているものは、「動物」「植物」種別ではなく、「動植物園・水族館」種別で評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 展示方法 - 施設規模 - 館内・園内の整備状況 - 展示のオリジナリティ 	
20. 博物館・美術館	<p>国内外の歴史的資料・科学的資料や美術作品（絵画、彫刻、工芸品等）を収集、保存、展示している施設、および歴史的事象などの記録、保存等のために作られた園地で、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、博物館、野外博物館、美術館、文学館、科学館、記念館などを対象とする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 展示方法 - 展示物の価値（屋外、庭園も含む） - 展示施設の歴史的・文化的価値 	
21. テーマ公園・ テーマ施設	<p>特徴的な概念（テーマ）を表現し、それを体験するために作られた園地や施設で、観光的に魅力のあるもの。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 施設規模 - 施設の多様性 - 施設の歴史的・文化的価値 - テーマの普遍性、際立った特徴 - テーマの表現力 	
22. 温泉	<p>温泉浴を体験できる施設またはその場での温浴行為で、観光的に魅力のあるもの。</p> <p>なお、温泉旅館等の温泉場に付帯する宿泊施設は対象外とする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 湧出現象、お湯そのもの - 浴場・建物 - 入浴環境：眺望など - 温泉文化：入浴方法、飲泉方法、利用方法、歴史的背景など - 街並み - 特徴ある共同浴場、小温泉地 	

【表2】観光資源種別の定義、種別ごとに特徴的な評価のポイント

観光資源種別	定義	資源種別ごとに特徴的な評価のポイント
人文資源	23.食 日本または地域の自然や歴史、文化を表す特徴的な食事や食文化、食事環境で、観光的に魅力のあるもの。 なお、料理を対象とし、食材は対象外とする。特定の店の料理は対象外とするが、老舗でその土地の名物として認識されているものは対象とする。主食や主菜を主たる対象とし、お土産は原則として評価対象外であるが、菓子類は観光における重要な楽しみの一つであるので対象とする。なるべく場所を特定する。	- 人の織りなす雰囲気（食事環境として、賑やかさ、猥雑さ、祝祭性など） - 店舗数 ※なお、遠方からであっても、食べるためにそこに行くものをA級とする
	24.芸能・スポーツ 日本または地域の風土、歴史、文化を表す芸能やスポーツで、観光的に魅力のあるもの。 なお、民謡大会系、音楽祭系は「芸能・スポーツ」種別で評価する。土地との結びつきが弱いもの、歴史が浅いものは対象外とする（最低10年以上継続しているもの、音楽祭系は30年を基準とする）。	- 上演・開催頻度 - ドラマ性

【表3】観光資源評価の視点

・美しさ
・大きさ
・古さ
・珍しさ
・静けさ
・日本らしさ
・地方らしさ
・住民とのつながりの深さ
・歴史的事象との関わりの深さ
・歴史的人物とのつながりの深さ
・人間の技術
・集積度
・広がり
・周囲の環境

【表4】観光資源の資源種別選定件数

	特A級	A級	特別地域観光資源	合計	
自然資源	1.山岳	6	47	119	172
	2.高原・湿原・原野	1	10	32	43
	3.湖沼	1	13	53	67
	4.河川・峡谷	2	12	67	81
	5.滝	0	5	36	41
	6.海岸・岬	3	21	107	131
	7.岩石・洞窟	0	8	51	59
	8.動物	0	10	18	28
	9.植物	3	16	146	165
	10.自然現象	0	8	20	28
合計	16	150	649	815	
人文資源	11.史跡	2	12	76	90
	12.神社・寺院・教会	15	82	528	625
	13.城跡・城郭・宮殿	5	13	69	87
	14.集落・街	2	18	121	141
	15.郷土景観	0	21	121	142
	16.庭園・公園	2	11	72	85
	17.建造物	0	12	125	137
	18.年中行事（祭り・伝統行事）	5	25	215	245
	19.動植物園・水族館	0	5	46	51
	20.博物館・美術館	3	18	136	157
	21.テーマ公園・テーマ施設	1	4	32	37
	22.温泉	2	24	77	103
	23.食	2	18	94	114
	24.芸能・スポーツ	1	8	68	77
合計	40	271	1,780	2,091	
全体計	56	421	2,429	2,906	

【表5】地方別の観光資源件数

	自然資源			人文資源			計			
	特A級	A級	特別地域観光資源	特A級	A級	特別地域観光資源	特A級	A級	特別地域観光資源	
北海道	1	21	69	0	12	52	1	33	121	155
東北	4	26	92	2	20	188	6	46	280	332
関東	2	17	92	7	48	356	9	65	448	522
北陸	4	18	68	1	10	123	5	28	191	224
中部	2	28	121	5	32	242	7	60	363	430
近畿	1	9	33	18	81	375	19	90	408	517
中国	1	6	28	3	15	141	4	21	169	194
四国	1	7	33	1	13	82	2	20	115	137
九州	2	16	92	2	33	195	4	49	287	340
沖縄	1	12	43	1	10	29	2	22	72	96

※複数地方にまたがる資源もあるため、地方別の合計件数とは一致しない。

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
1. 山岳	特A級	大雪山	北海道	1. 山岳	特別地域観光資源	夕張岳	北海道	1. 山岳	特別地域観光資源	朝日岳	富山
		剣岳	富山			芦別岳	北海道			大日岳	富山
		立山	富山			トムラウシ山	北海道			青葉山	福井
		富士山	山梨・静岡			暑寒別岳	北海道			荒島岳	福井
		穂高岳	長野・岐阜			羅臼岳	北海道			大菩薩嶺	山梨
		阿蘇山	熊本			樽前山	北海道			茅ヶ岳	山梨
	A級	駒ヶ岳	北海道			有珠山	北海道			鳳凰三山	山梨
		羊蹄山	北海道			昭和新山	北海道			瑞牆山	山梨
		十勝岳連峰	北海道			幌尻岳	北海道			燕岳	長野
		利尻山	北海道			然別火山群	北海道			大天井岳	長野
		斜里岳	北海道			ニベソツ山	北海道			恵那山	長野・岐阜
		八甲田山	青森			雌阿寒岳	北海道			鳥甲山	長野
		岩木山	青森			雄阿寒岳	北海道			白砂山	長野・他
		岩手山	岩手			アトサヌプリ火山群	北海道			蓼科山	長野
		早池峰山	岩手			姫神山	岩手			金峰山	長野・山梨
		月山	山形			栗駒山	岩手・他			五龍岳	長野・富山
		鳥海山	山形・秋田			焼石岳	岩手			岩菅山	長野
		飯豊山(飯豊連峰)	山形・他			森吉山	秋田			甲武信ヶ岳	長野・他
		吾妻連峰	福島・山形			秋田駒ヶ岳	秋田・岩手			国師ヶ岳	長野・山梨
		磐梯山	福島			蔵王山	山形・宮城			雨飾山	長野・新潟
		男体山	栃木			朝日連峰	山形			焼岳	長野・岐阜
		谷川岳	群馬・新潟			神室山	山形・秋田			黒姫山	長野
		赤城山	群馬			葉山(村山)	山形			光岳	長野・他
		三原山	東京			燧ヶ岳	福島			空木岳	長野
		苗場山	新潟・長野			会津駒ヶ岳	福島			南駒ヶ岳	長野
		妙高山	新潟			安達太良連峰	福島			烏帽子岳	長野・富山
		黒部五郎岳	富山			筑波山	茨城			爺ヶ岳	長野・富山
		水晶岳(黒岳)	富山			高原山(釈迦ヶ岳)	栃木			戸隠山	長野
		薬師岳	富山			那須岳(茶臼岳)	栃木・福島			高妻山	長野
		白山	石川			女峰山	栃木			四阿山	長野・群馬
		白根三山	山梨			皇海山	栃木・群馬			唐松岳	長野・富山
		甲斐駒ヶ岳	長野・山梨			至仏山	群馬			鷲羽岳	長野・富山
		仙丈ヶ岳	長野・山梨			日光白根山	群馬・栃木			三俣連華岳	長野・他
		塩見岳	長野・静岡			武尊山	群馬			野口五郎岳	長野・富山
		八ヶ岳	長野・山梨			白根山(草津白根山・小白根山)	群馬			鋸岳	長野・山梨
		乗鞍岳	長野・岐阜			荒船山	群馬・長野			針ノ木岳	長野・富山
		常念岳	長野			榛名山	群馬			烏帽子岳	長野
		木曾駒ヶ岳・宝剣岳	長野			妙義山	群馬			黒斑山	長野・群馬
		赤石岳	長野・静岡			武甲山	埼玉			北八ヶ岳	長野・群馬
		荒川三山	長野・静岡			両神山	埼玉			伊吹山	岐阜・滋賀
		鹿島槍ヶ岳	長野・富山			西山(八丈富士)	東京			天城山	静岡
		槍ヶ岳	長野・岐阜			雲取山	東京			大室山	静岡
		浅間山	長野・群馬			大山	神奈川			三上山(近江富士)	滋賀
		白馬三山	長野・他			丹沢山地(蛭ヶ岳・丹沢山)	神奈川			六甲山	兵庫
		聖岳	長野・静岡			箱根火山後期中央火口	神奈川			氷ノ山	兵庫・鳥取
御嶽山	長野	越後駒ヶ岳	新潟	大峰山	奈良						
笠ヶ岳	岐阜	浅草岳	新潟	三瓶山	鳥根						
大山	鳥取	平ヶ岳	新潟	剣山	徳島						
石鎚山	愛媛	荒沢岳	新潟	飯野山	香川						
雲仙岳(平成新山・普賢岳)	長崎	守門岳	新潟	笹ヶ峰	愛媛・高知						
開聞岳	鹿児島	雪倉岳	新潟・富山	皿ヶ嶺	愛媛						
桜島	鹿児島	焼山	新潟	鬼岳火山群	長崎						
宮之浦岳	鹿児島	米山	新潟	英彦山	福岡・大分						
特別地域観光資源	無意根山	北海道	巻機山	新潟	由布岳	大分					
恵庭岳	北海道	八海山	新潟	祖母山	大分・宮崎						
函館山	北海道	火打山	新潟	くじゅう連山	大分						
ニセコアンヌプリ	北海道			霧島山	宮崎・鹿児島						

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
1. 山岳	特別地域観光資源	大崩山	宮崎	3. 湖沼	特別地域観光資源	三方五湖	福井	4. 河川・峡谷	特A級	奥入瀬溪流	青森
		永田岳	鹿児島			河口湖	山梨			黒部峡谷	富山
特A級	尾瀬ヶ原	群馬・他	琵琶湖			滋賀	層雲峡		北海道		
	A級	雨竜沼湿原	北海道			オコタンベ湖	北海道		最上川	山形	
サロベツ原野		北海道	朱鞠内湖			北海道	阿賀野川		新潟・福島		
釧路湿原		北海道	白金 青い池			北海道	昇仙峡		山梨		
霧多布湿原		北海道	クッチャロ湖			北海道	西沢溪谷		山梨		
八幡平		岩手	網走湖			北海道	大杉谷		三重		
戦場ヶ原・小田代原		栃木	サロマ湖			北海道	静峡		和歌山		
五色ヶ原		富山	倶多楽湖			北海道	三段峡		広島		
弥陀ヶ原		富山	オンネトー			北海道	四万十川		高知		
雲ノ平		富山	然別湖			北海道	耶馬溪		大分		
大台ヶ原		奈良・三重	ペンケトー・パンケトー			北海道	高千穂峡		宮崎		
2. 高原・湿原・原野	特別地域観光資源	原始ヶ原	北海道			風蓮湖	北海道		浦内川(西表島)	沖縄	
		沼ノ平	北海道			羅臼湖	北海道		石狩川	北海道	
		沼ノ原	北海道			オタマリ沼	北海道		天塩川	北海道	
		別寒辺牛湿原	北海道			十二湖	青森		天人峡	北海道	
		春国岱(根室)	北海道			蔦七沼	青森		城ヶ倉溪流	青森	
		標津湿原(ポー川史跡自然公園)	北海道			十三湖	青森		薬研溪流	青森	
		大雪高原温泉(池沼群)	北海道			宇曽利山湖	青森		北上川	岩手	
		宗谷丘陵	北海道			小川原湖	青森		久慈溪流	岩手	
		八甲田山麓の湿地・湿原	青森			岩洞湖	岩手		狛鼻溪	岩手	
		種山ヶ原	岩手			田沢湖	秋田		北上川(下流)	宮城	
	特別地域観光資源	千沼ヶ原	岩手			桧原湖	福島		鳴子峡	宮城	
		平庭高原	岩手			小野川湖	福島		雄物川	秋田	
		早坂高原	岩手			秋元湖	福島		只見川	福島	
		芝草平	宮城			猪苗代湖	福島		那珂川	茨城	
		雄国沼湿原	福島			沼沢湖	福島		龍王峡	栃木	
		田代山湿原	福島			霞ヶ浦	茨城		吾妻峡	群馬	
		駒止湿原	福島			渡良瀬遊水地(谷中湖)	栃木・他		照葉峡	群馬	
		鬼怒沼湿原	栃木			湯ノ湖	栃木		長瀬岩畳	埼玉	
		アヤマ平	群馬			丸沼・菅沼	群馬・栃木		利根川(下流)	茨城・千葉	
		芳ヶ平	群馬			野反湖	群馬		信濃川(大河津分水)	新潟	
3. 湖沼	特A級	十和田湖	青森・秋田			奥利根湖(矢木沢ダム)	群馬		小滝川ヒスイ峡	新潟	
		A級	支笏湖			北海道	榛名湖		群馬	信濃川(河口付近)	新潟
	大沼		北海道			大沼・小沼	群馬		庄川峡	富山	
	知床五湖		北海道			手賀沼	千葉		神通峡	富山	
	洞爺湖		北海道			宮ヶ瀬湖(宮ヶ瀬ダム)	神奈川		常願寺川	富山	
	阿寒湖		北海道			加茂湖	新潟		手取峡谷	石川	
	摩周湖		北海道			福島潟	新潟		白鳳溪谷	山梨	
	屈斜路湖		北海道			佐潟	新潟		富士川(山梨・静岡県境周辺)	山梨・静岡	
	五色沼		福島			奥只見湖	新潟・福島		千曲川(小諸周辺)	長野	
	中禅寺湖		栃木			本栖湖	山梨		梓川(沢渡周辺)	長野	
	芦ノ湖		神奈川			精進湖	山梨		梓川(上高地)	長野	
						山中湖	山梨		寝覚の床	長野	
				西湖	山梨	高瀬溪谷	長野				
				白駒の池	長野	千曲川(千曲市～飯山市周辺)	長野				
			大正池	長野	天竜川(上流部)	長野					
		野尻湖	長野	寸又峡	静岡						
		諏訪湖	長野	大井川	静岡						
		仁科三湖	長野	香嵐溪	愛知						
		浜名湖	静岡	木曾川・中流	愛知・岐阜						
		余呉湖	滋賀	宇治川	滋賀・他						
		溝濃池	香川	保津川	京都						
		蘭牟田池	鹿児島	鴨川	京都						
		池田湖	鹿児島	桂川(嵐山周辺)	京都						

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
4.河川・峡谷	特別地域観光資源	天滝渓谷	兵庫	5.滝	特別地域観光資源	西椎屋の滝	大分	6.海岸・岬	特別地域観光資源	羽伏浦海岸	東京
		紀の川	和歌山			原尻の滝	大分			御蔵島の黒崎高尾山断崖	東京
		千丈渓	島根			行藤の滝	宮崎			大野亀(外海府海岸)	新潟
		断魚渓	島根			尾鈴山瀑布群	宮崎			親不知・子不知	新潟
		立久恵峽	島根			曾木の滝	鹿児島			笹川流れ	新潟
		鬼の舌震	島根			千尋の滝	鹿児島			千里浜海岸	石川
		裏匹見峽	島根			大川の滝	鹿児島			九十九湾	石川
		江の川	広島			ピナイサーラの滝(西表島)	沖縄			若狭和田ビーチ	福井
		帝釈峽	広島			比地大滝	沖縄			東尋坊	福井
		太田川(下流)	広島			北山崎	岩手			水晶浜	福井
		寂地峽	山口	特別A級	瀬戸内海の多島海景观	広島・他	気比の松原			福井	
		長門峽	山口	A級	慶良間諸島の海	沖縄	南伊豆の海岸(石廊崎～波勝崎)			静岡	
		祖谷渓	徳島		知床半島の海岸	北海道	三保松原			静岡	
		大歩危小歩危	徳島		仏ヶ浦	青森	堂ヶ島海岸			静岡	
		吉野川(下流域)	徳島		浄土ヶ浜	岩手	千本松原			静岡	
		新町川	徳島		松島	宮城	浜岡砂丘			静岡	
		寒霞渓	香川		南島	東京	城ヶ崎海岸			静岡	
		滑床渓谷	愛媛		英虞湾	三重	伊良湖岬			愛知	
		面河渓	愛媛		天橋立	京都	五ヶ所湾			三重	
		仁淀川	高知		鳥取砂丘	鳥取	七里御浜			三重	
		筑後川(中下流)	福岡		国賀海岸	島根	鬼ヶ城			三重	
球磨川(人吉付近)	熊本	足摺岬	高知	琴引浜	京都						
菊池渓谷	熊本	関門海峽	福岡・山口	香住海岸・但馬御火浦	兵庫						
鹿川渓谷	宮崎	浅茅湾	長崎	白良浜海岸	和歌山						
北川	宮崎	九十九島	長崎	千畳敷	和歌山						
5.滝	A級	三条ノ滝	福島	大金久海岸・百合ヶ浜	鹿児島	煙樹ヶ浜	和歌山				
		袋田の滝	茨城	ニシ浜(波照間島)	沖縄	白崎海岸	和歌山				
		華厳ノ滝	栃木	新城島の海岸(新城島)	沖縄	弓ヶ浜	鳥取				
		称名滝	富山	川平湾(石垣島)	沖縄	浦富海岸	鳥取				
		那智の瀧(飛瀧神社)	和歌山	東平安名崎(宮古島)	沖縄	石見畳ヶ浦	島根				
	特別地域観光資源	オシンコシンの滝	北海道	与那覇前浜(宮古島)	沖縄	稲佐の浜	島根				
		カムイワッカ湯の滝	北海道	ハテの浜(久米島)	沖縄	白島海岸	島根				
		暗門の滝	青森	オクマビーチ	沖縄	黒島ヴィーナスロード	岡山				
		松見の滝	青森	積丹半島の海岸	北海道	青海島	山口				
		秋保大滝	宮城	宗谷岬	北海道	佐田岬	愛媛				
		法体の滝	秋田	能取岬	北海道	由良半島	愛媛				
		安の滝	秋田	襟裳岬	北海道	桂浜	高知				
		平滑ノ滝	福島	納沙布岬	北海道	室戸岬	高知				
		霧降ノ滝	栃木	野付半島	北海道	沖の島	高知				
		竜頭ノ滝	栃木	滝瀬海岸(シラフラ)	北海道	大堂海岸	高知				
		湯滝	栃木	スコトン岬	北海道	柏島	高知				
		吹割の滝	群馬	種差海岸	青森	生の松原	福岡				
		苗名滝	新潟	尻屋崎	青森	虹の松原	佐賀				
		龍双ヶ滝	福井	権現崎	青森	塩俵の断崖	長崎				
		米子瀑布群(不動滝・権現滝)	長野	大間崎	青森	若松瀬戸	長崎				
		白糸の滝	長野	龍飛崎	青森	大瀬崎断崖	長崎				
		田立の滝	長野	黒崎	岩手	天草西海岸	熊本				
		白水滝	岐阜	鞠の巢断崖	岩手	天草松島	熊本				
		白糸の滝	静岡	碓石海岸・碓石岬	岩手	日南海岸	宮崎				
		浄蓮の滝	静岡	山田湾	岩手	長目の浜	鹿児島				
安倍の大滝	静岡	巨釜半造	宮城	吹上浜	鹿児島						
赤目四十八滝	三重	男鹿西海岸	秋田	佐多岬	鹿児島						
神庭の滝	岡山	九十九里浜	千葉	あやまる岬	鹿児島						
轟九十九滝	徳島	谷津干潟	千葉	田皆岬	鹿児島						
白猪の滝	愛媛	三番瀬	千葉	東崎(与那国島)	沖縄						
清水の滝	佐賀	犬吠埼	千葉	西崎(与那国島)	沖縄						
五老ヶ滝	熊本	富津岬	千葉	真栄田岬	沖縄						

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	
6.海岸・岬	特別地域観光資源	残波岬	沖縄	7.岩石・洞窟	特別地域観光資源	野島断層(北淡震災記念公園)	兵庫	8.動物	特別地域観光資源	与那国の与那国馬(与那国島)	沖縄	
		渡嘉志久ビーチ(渡嘉敷島)	沖縄			玄武洞	兵庫			座間味のクジラ	沖縄	
		古座間味ビーチ(座間味島)	沖縄			橋杭岩	和歌山		特A級	日光杉並木街道	栃木	
		コンドイ浜(竹富島)	沖縄			三段壁	和歌山			吉野山のサクラ	奈良	
		仲本海岸(黒島)	沖縄			知夫赤壁	島根			屋久島の森	鹿児島	
		底地ビーチ(石垣島)	沖縄			多古のセツ穴	島根			礼文島の高山植物群落	北海道	
		平久保崎(石垣島)	沖縄			加賀の潜戸	島根			白神山地のブナ原生林	青森・秋田	
		砂山ビーチ(宮古島)	沖縄			屏風岩	島根			弘前城のサクラ	青森	
		吉野海岸(宮古島)	沖縄			井倉洞	岡山			北上展勝地のサクラ	岩手	
		新城海岸(宮古島)	沖縄			景清洞	山口			角館武家屋敷のシダレザクラ	秋田	
		通り池(下地島)	沖縄			須佐ホルンフェルス	山口			三春滝ザクラ	福島	
		イーブビーチ(久米島)	沖縄			阿波の土柱	徳島			千鳥ヶ淵・牛ヶ淵のサクラ	東京	
		万座毛	沖縄			八釜の甌穴群	愛媛			青木ヶ原の樹海	山梨	
		野甫ビーチ(野甫島)	沖縄			四国カルスト	愛媛・高知			高遠のサクラ	長野	
		二見ヶ浦海岸(伊是名島)	沖縄			平尾台	福岡		霧ヶ峰のニッコウキスゲ	長野		
		阿波連ビーチ(渡嘉敷島)	沖縄			千仏鍾乳洞	福岡		マキノ高原のメタセコイア並木	滋賀		
		嘉比島	沖縄			芥屋の大門	福岡		大船山のミヤマキリシマ	大分		
		安室島	沖縄			大和町巨石群	佐賀		霧島山のミヤマキリシマ	宮崎・鹿児島		
		安慶名敷島	沖縄			猿岩	長崎		縄文杉	鹿児島		
		北浜(阿嘉島)	沖縄			球泉洞	熊本		仲間川の mangrove (西表島)	沖縄		
		ブセナビーチ	沖縄			風連鍾乳洞	大分		やんばるの森	沖縄		
		ムーンビーチ	沖縄			青島の隆起海床と奇形波蝕痕(鬼の洗濯板)	宮崎		札幌のライラック	北海道		
		万座ビーチ	沖縄			関之尾の甌穴群	宮崎		松前のサクラ	北海道		
		エメラルドビーチ	沖縄			甌島の断崖	鹿児島		能取湖畔のアッケシソウ	北海道		
		高那崎(波照間島)	沖縄			昇竜洞	鹿児島		小清水原生花園	北海道		
辺戸岬	沖縄	大山水鏡洞	鹿児島	瀧沸湖畔の原生花園	北海道							
7.岩石・洞窟	A級	龍泉洞	岩手	8.動物	A級	奥武島の曇石(奥武島)	沖縄	9.植物	特別地域観光資源	芝ざくら滝上公園のシバザクラ	北海道	
		鬼押出	群馬			伊江島城山(伊江島)	沖縄			二十間道路の桜並木	北海道	
		三宅島溶岩地形	東京			釧路のタンチョウ	北海道			アポイ岳高山植物群落	北海道	
		青ヶ島二重式カルデラ火山	東京			燕島のウミネコ	青森			阿寒湖のマリモ	北海道	
		秋吉台・秋芳洞	山口			小笠原のクジラ・イルカ	東京			ひがしもと芝桜公園のシバザクラ	北海道	
		龍河洞	高知			トキの森公園	新潟			十勝牧場の白樺並木(十勝平野の並木道)	北海道	
		龍串・見残し	高知			立山のライチョウ	富山			八甲田のブナ林	青森	
		玉泉洞	沖縄			地獄谷野猿公苑のサル温泉浴	長野			芦野公園のサクラ	青森	
		特別地域観光資源	鍋釣岩			北海道	豊岡のコウノトリ			兵庫	白石川堤の桜(一目千本桜)	宮城
			日本キャニオン			青森	奈良のシカ			奈良	徳仙丈山のツツジ	宮城
			縫道石山(縫道石)			青森	出水のソル			鹿児島	定禅寺通のケヤキ並木	宮城
			岩手山焼走り溶岩流			岩手	永田いなか浜のウミガメ			鹿児島	桧木内川堤のソメイヨシノ	秋田
	滝観洞		岩手		天売島の海鳥	北海道	真人公園のサクラ		秋田			
	安家洞		岩手		知床のオジロワシ・オオワシ	北海道	天然秋田杉の古里「仁別国民の森」		秋田			
	磐司岩		宮城		ウトナイ湖の渡り鳥	北海道	風の松原		秋田			
	材木岩		宮城		浅所海岸の白鳥(小湊のハクチョウ)	青森	東根の大ケヤキ		山形			
	入水鍾乳洞		福島		伊豆沼・内沼・蕪栗沼・化女沼の渡り鳥	宮城	ベニバナ		山形			
	あぶくま洞		福島		鯛の浦のタイ	千葉	烏帽子山公園のサクラ		山形			
	特別地域観光資源		不二洞		群馬	御蔵島のイルカ	東京		山五十川の玉スギ	山形		
			フォッサマグナパーク		新潟	小笠原のアオウミガメ	東京		花見山公園	福島		
			見附島		石川	瓢湖の白鳥	新潟		須賀川牡丹園	福島		
		蘇洞門	福井		長坂のオオムラサキ	山梨	越代のサクラ		福島			
		屋根岩	長野		長岡のゲンジボタル	滋賀	筑波山梅林		茨城			
		根尾谷断層	岐阜		大浜海岸のアカウミガメ	徳島	水郷のアヤメ		茨城			
		飛騨大鍾乳洞	岐阜		土佐湾のクジラ	高知	かみね公園・平和通りのサクラ		茨城			
美山鍾乳洞		岐阜	高崎山のサル	大分	万葉自然公園かたくりの里	栃木						
大滝鍾乳洞		岐阜	都井岬の御崎馬	宮崎								
駒門風穴		静岡	幸島のサル	宮崎								

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	
11.史跡	特別地域観光資源	上杉家廟所	山形	11.史跡	特別地域観光資源	王塚古墳	福岡	12.神社・寺院・教会	A級	三十三間堂(蓮華王院)	京都	
		慧日寺跡	福島			竹原古墳	福岡			南禅寺	京都	
		白河関跡	福島			日岡古墳	福岡			東福寺	京都	
		水戸徳川家墓所(瑞竜山)	茨城			日本二十六聖人殉教地	長崎			鞍馬寺	京都	
		足尾銅山跡	栃木			出島	長崎			慈照寺(銀閣寺)	京都	
		侍塚古墳群	栃木			鷹島神崎遺跡	長崎			平安神宮	京都	
		下野薬師寺跡	栃木			原の辻遺跡	長崎			西芳寺(苔寺)	京都	
		岩宿遺跡	群馬			チブサン古墳	熊本			龍安寺	京都	
		上野三碑(金井沢碑・山上碑・多胡碑)	群馬			普光寺磨崖仏	大分			天龍寺	京都	
		保渡田古墳群	群馬			田染荘	大分			醍醐寺	京都	
		さきたま古墳公園	埼玉			薩摩国分寺跡	鹿児島			妙心寺	京都	
		和銅採掘遺跡	埼玉			玉陵	沖縄			八坂神社	京都	
		吉見百穴	埼玉			ひめゆりの塔	沖縄			浄瑠璃寺	京都	
		草加松原	埼玉			中尊寺	岩手			高台寺	京都	
		上総国分尼寺跡	千葉			日光東照宮	栃木			萬福寺	京都	
		加曾利貝塚	千葉			伊勢神宮	三重			知恩院	京都	
		百八やぐら	神奈川			豊受大神宮(外宮)	三重			伏見稲荷大社	京都	
		永福寺跡	神奈川			皇大神宮(内宮)	三重			石清水八幡宮	京都	
		佐渡国分寺跡	新潟			比叡山延暦寺	滋賀・京都			建仁寺	京都	
		前田家墓所	石川			清水寺	京都			仁和寺	京都	
		雨の宮古墳群	石川			特A級	鹿苑寺(金閣寺)			京都	賀茂別雷神社(上賀茂神社)	京都
		森將軍塚古墳	長野			平等院	京都			北野天満宮	京都	
		関ヶ原古戦場	岐阜			法隆寺	奈良			賀茂御祖神社(下鴨神社)	京都	
		登呂遺跡	静岡			東大寺	奈良			相国寺	京都	
		新居関跡	静岡			高野山	和歌山			大徳寺	京都	
		松平氏遺跡	愛知	熊野三山	和歌山	四天王寺	大阪					
		三河国分寺跡・国分尼寺跡	愛知	出雲大社	島根	住吉大社	大阪					
		齋宮跡	三重	厳島神社	広島	観心寺	大阪					
		応神天皇陵古墳	大阪	トラビスト修道院	北海道	圓教寺	兵庫					
		心合寺山古墳	大阪	毛越寺	岩手	春日大社	奈良					
		今城塚古墳	大阪	立石寺(山寺)	山形	興福寺	奈良					
		沼島	兵庫	出羽三山神社	山形	薬師寺	奈良					
		藤ノ木古墳	奈良	鹿島神宮	茨城	唐招提寺	奈良					
		頭塔	奈良	日光二荒山神社	栃木	長谷寺	奈良					
		山田寺跡	奈良	大猷院霊廟	栃木	吉野山寺社群	奈良					
		馬見丘陵公園(馬見古墳群)	奈良	日光山輪王寺	栃木	室生寺	奈良					
		藤原宮跡	奈良	氷川神社	埼玉	金峯山寺	奈良					
		紀伊国分寺跡	和歌山	成田山新勝寺	千葉	奥之院	和歌山					
		広村堤防	和歌山	明治神宮	東京	金剛峯寺	和歌山					
		岩橋千塚古墳群	和歌山	浅草寺	東京	壇上伽藍	和歌山					
		友ヶ島	和歌山	円覚寺	神奈川	三徳山三佛寺	鳥取					
		妻木晩田遺跡	鳥取	円覚寺舍利殿	神奈川	吉備津神社	岡山					
		石見銀山遺跡	島根	建長寺	神奈川	金刀比羅宮	香川					
		荒神谷遺跡	島根	鶴岡八幡宮	神奈川	大山祇神社	愛媛					
		田儀櫻井家たたら製鉄遺跡	島根	高德院(鎌倉大仏殿)	神奈川	英彦山神宮	福岡					
造山古墳	岡山	彌彦神社	新潟	太宰府天満宮	福岡							
大久野島毒ガス関連遺跡	広島	永平寺	福井	宗像大社	福岡							
板東俘虜収容所跡	徳島	身延山久遠寺	山梨	高良大社	福岡							
塩飽勤番所跡	香川	諏訪大社	長野	祐徳稲荷神社	佐賀							
屋島	香川	善光寺	長野	大浦天主堂	長崎							
陸軍芸予要塞米島要塞	愛媛	久能山東照宮	静岡	浦上天主堂	長崎							
ロシア兵墓地	愛媛	熱田神宮	愛知	宇佐神宮	大分							
別子銅山跡	愛媛	三井寺(園城寺)	滋賀	斎場御嶽	沖縄							
石人山古墳	福岡	日吉大社	滋賀	特別地域観光資源	北海道神宮	北海道						
岩戸山古墳	福岡	東寺(教王護国寺)	京都	トラビスト修道院	北海道							
三井三池炭鉱跡	福岡・熊本	東本願寺	京都	函館八幡宮	北海道							
大宰府政庁跡	福岡	西本願寺	京都	柳引八幡宮	青森							

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	法光寺	青森	12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	高崎白衣大観音	群馬	12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	大山阿夫利神社	神奈川
		岩木山神社	青森			少林山達磨寺	群馬			称名寺	神奈川
		金剛山 最勝院	青森			榛名神社	群馬			明月院	神奈川
		長勝寺と禅林街	青森			三夜沢赤城神社	群馬			瑞泉寺	神奈川
		高山稻荷神社	青森			大光院	群馬			長谷寺	神奈川
		達谷窟毘沙門堂	岩手			一之宮貫前神社	群馬			杉本寺	神奈川
		陸奥国分寺	宮城			妙義神社	群馬			海蔵寺	神奈川
		大崎八幡宮	宮城			久伊豆神社	埼玉			銭洗弁財天(宇賀福神社)	神奈川
		輪王寺	宮城			熊谷寺	埼玉			光明寺	神奈川
		瑞鳳殿	宮城			金鎖神社	埼玉			寒川神社	神奈川
		金華山黄金山神社	宮城			平林寺	埼玉			平間寺(川崎大師)	神奈川
		瑞巖寺	宮城			竹寺(八王寺)	埼玉			箱根神社	神奈川
		竹駒神社	宮城			玉敷神社	埼玉			清浄光寺(遊行寺)	神奈川
		志波彦神社・鹽竈神社	宮城			妻沼聖天山歓喜院	埼玉			江島神社	神奈川
		仙台東照宮	宮城			喜多院	埼玉			妙宣寺(阿仏房妙宣寺)	新潟
		大徳寺(横山不動尊)	宮城			宝登山神社	埼玉			林泉寺	新潟
		円通院	宮城			三峯神社	埼玉			西福寺	新潟
		赤神神社五社堂	秋田			秋父神社	埼玉			根本寺	新潟
		湯殿山神社	山形			高麗神社	埼玉			蓮華峰寺	新潟
		即身仏の寺(湯殿山表口別当寺)	山形			子ノ権現天龍寺	埼玉			雲洞庵	新潟
		善寶寺	山形			慈光寺	埼玉			八海神社	新潟
		本山慈恩寺	山形			中山法華経寺	千葉			普光寺(浦佐毘沙門堂)	新潟
		熊野大社	山形			本土寺	千葉			大岩山日石寺	富山
		福満虚空蔵菩薩圓藏寺	福島			誕生寺	千葉			勝興寺	富山
		新宮熊野神社(長床)	福島			清澄寺	千葉			瑞龍寺	富山
		白水阿弥陀堂	福島			鋸山・日本寺	千葉			雄山神社(峰本社・祈願殿・前立社壇)	富山
		勝常寺	福島			香取神宮	千葉			井波別院瑞泉寺	富山
		恵隆寺(立木千手観音)	福島			飯高寺	千葉			妙成寺	石川
		願成寺(会津大仏)	福島			笠森寺(笠森観音)	千葉			氣多大社	石川
		筑波山神社	茨城			柴又帝釈天(帝釈天題経寺)	東京			妙立寺(忍者寺)	石川
		笠間稻荷神社	茨城			富岡八幡宮	東京			尾山神社	石川
		楽法寺(雨引観音)	茨城			亀戸天神社	東京			那谷寺	石川
		牛久大仏	茨城			泉岳寺	東京			白山比咩神社	石川
		西明寺	栃木			増上寺	東京			總持寺祖院	石川
		唐沢山城跡・唐沢山神社	栃木			武蔵御嶽神社	東京			紙祖神岡太神社・大瀧神社	福井
		古峯神社	栃木			ニコライ堂(東京復活大聖堂)	東京			瀧谷寺	福井
		鏝阿寺	栃木			神田明神(神田神社)	東京			舟津神社	福井
		雲巖寺	栃木			寛永寺	東京			平泉寺白山神社(白山平泉寺)	福井
		太平山神社	栃木			上野東照宮	東京			明通寺	福井
		満願寺	栃木			池上本門寺	東京			若狭彦神社・若狭姫神社	福井
		乃木神社	栃木			築地本願寺	東京			西福寺	福井
		日光二荒山神社中宮祠	栃木			深大寺	東京			羽賀寺	福井
		滝尾神社	栃木			正福寺地藏堂	東京			恵林寺	山梨
		常行堂・法華堂(二つ堂)	栃木			高幡不動尊(高幡山明王院金剛寺)	東京			栖霞寺	山梨
		慈眼堂	栃木			大國魂神社	東京			大善寺	山梨
		日光山中禪寺立木観音	栃木			根津神社	東京			雲峰寺	山梨
		カトリック松が峰教会	栃木			護国寺	東京			放光寺	山梨
		宇都宮二荒山神社	栃木			湯島天満宮	東京			武田神社(武田氏躰躑ヶ崎館跡)	山梨
		高勝寺	栃木			総持寺	神奈川			甲斐善光寺	山梨
		足利織姫神社	栃木			浄智寺	神奈川			金櫻神社	山梨
愍宗寺(佐野厄除大師)	栃木	寛園寺	神奈川	七面山敬慎院	山梨						
大雄寺	栃木	寿福寺	神奈川	北口本宮富士浅間神社	山梨						
迦葉山弥勒寺	群馬	東慶寺	神奈川	貞祥寺	長野						
大洞赤城神社	群馬	浄妙寺	神奈川	穂高神社	長野						
鎌原観音堂	群馬	英勝寺	神奈川	光前寺	長野						
黒瀧山不動寺	群馬	最乗寺	神奈川	牛伏寺	長野						
茂林寺	群馬										

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	安楽寺	長野	12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	猿田彦神社	三重	12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	愛宕神社	京都
		仁科神明宮	長野			苗村神社	滋賀			城南宮	京都
		戸隠神社	長野			兵主大社	滋賀			豊国神社	京都
		前山寺	長野			御上神社	滋賀			光明寺	京都
		華厳寺	岐阜			大笹原神社	滋賀			等持院	京都
		横蔵寺	岐阜			福田寺	滋賀			真如堂(真正極楽寺)	京都
		永保寺	岐阜			龍潭寺	滋賀			聖護院	京都
		南宮大社	岐阜			石塔寺	滋賀			御香宮神社	京都
		安国寺	岐阜			石馬寺	滋賀			藤森神社	京都
		飛騨国分寺	岐阜			永源寺	滋賀			随心院	京都
		長滝白山神社	岐阜			阿賀神社	滋賀			廬山寺	京都
		富士山本宮浅間大社	静岡			渡岸寺観音堂(向源寺)	滋賀			平野神社	京都
		大石寺	静岡			宝蔵寺	滋賀			今宮神社	京都
		奥山方広寺	静岡			都久夫須麻神社	滋賀			常寂光寺	京都
		秋葉山本宮秋葉神社	静岡			大通寺	滋賀			祇王寺	京都
		龍潭寺	静岡			浮御堂(満月寺)	滋賀			長岡天満宮	京都
		伊豆山神社	静岡			西教寺	滋賀			三室戸寺	京都
		智満寺	静岡			石山寺	滋賀			興聖寺	京都
		可睡斎	静岡			近江神宮	滋賀			出雲大神宮	京都
		法多山尊永寺	静岡			建部大社	滋賀			成相寺	京都
		油山寺	静岡			滋賀院門跡	滋賀			笠置寺	京都
		静岡浅間神社	静岡			多賀大社	滋賀			法観寺(八坂の塔)	京都
		臨濟寺	静岡			西明寺	滋賀			清凉寺	京都
		小國神社	静岡			油日神社	滋賀			常照皇寺	京都
		三嶋大社	静岡			大池寺	滋賀			愛宕念仏寺	京都
		了仙寺	静岡			櫛野寺	滋賀			二尊院	京都
		玉泉寺	静岡			常楽寺	滋賀			安楽寺	京都
		修禪寺	静岡			善水寺	滋賀			夷相院	京都
		願成就院	静岡			長寿寺	滋賀			梅宮大社	京都
		摩訶耶寺	静岡			長命寺	滋賀			鹿王院	京都
		甚目寺(甚目寺観音)	愛知			日牟禮八幡宮	滋賀			地藏院	京都
		妙興寺	愛知			観音正寺	滋賀			勝持寺	京都
		真清田神社	愛知			百濟寺	滋賀			圓光寺	京都
		尾張大國霊神社(国府宮)	愛知			金剛輪寺	滋賀			貴船神社	京都
		瀧山寺	愛知			田村神社	滋賀			瑠璃光院	京都
		伊賀八幡宮	愛知			圓通寺	京都			智恩寺(切戸の文珠)	京都
		大樹寺	愛知			酬恩庵(一休寺)	京都			元伊勢籠神社	京都
		八百富神社	愛知			智積院	京都			正法寺	京都
		田縣神社	愛知			青蓮院門跡	京都			妙法院	京都
		鳳来寺山	愛知			詩仙堂丈山寺	京都			勝尾寺	大阪
		定光寺	愛知			旧嵯峨御所 大本山大覚寺	京都			大阪天満宮	大阪
		津島神社	愛知			泉涌寺	京都			道明寺天満宮	大阪
		豊川稲荷(妙厳寺)	愛知			永観堂(禅林寺)	京都			施福寺	大阪
		大須観音(寶生院)	愛知			光悦寺	京都			葛井寺	大阪
		知立神社	愛知			三千院	京都			杭全神社	大阪
雲興寺	愛知	曼殊院	京都	南宗寺	大阪						
専修寺	三重	化野念仏寺	京都	枚岡神社	大阪						
瀧原宮(内宮別宮)	三重	高山寺	京都	大鳥大社	大阪						
伊雑宮(内宮別宮)	三重	広隆寺	京都	久米田寺	大阪						
多度大社	三重	神護寺	京都	石切劔箭神社	大阪						
花窟神社	三重	本法寺	京都	上之太子叡福寺	大阪						
月読宮(内宮別宮)	三重	法金剛院	京都	鶴林寺	兵庫						
倭姫宮(内宮別宮)	三重	松尾大社	京都	一乗寺	兵庫						
金剛證寺	三重	宇治上神社	京都	浄土寺	兵庫						
二見興玉神社	三重	くろ谷 金戒光明寺	京都	湊川神社	兵庫						
椿大神社	三重	善峯寺	京都	太山寺	兵庫						
月夜見宮(外宮別宮)	三重	靈鑑寺	京都	須磨寺	兵庫						

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	多田神社	兵庫	12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	熊野速玉大社	和歌山	12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	雲辺寺	徳島
		高源寺	兵庫			熊野本宮大社	和歌山			鶴林寺	徳島
		名草神社	兵庫			熊野那智大社	和歌山			大麻比古神社	徳島
		斑鳩寺	兵庫			青岸渡寺	和歌山			大窪寺	香川
		大乘寺	兵庫			道成寺	和歌山			志度寺	香川
		岡寺	奈良			紀州東照宮	和歌山			屋島寺	香川
		橘寺	奈良			紀三井寺	和歌山			八栗寺	香川
		飛鳥寺	奈良			日前神宮・國懸神宮	和歌山			神谷神社	香川
		信貴山朝護孫子寺	奈良			和歌浦天満宮	和歌山			白峯寺	香川
		法起寺	奈良			鞆淵八幡神社	和歌山			弥谷寺	香川
		中宮寺	奈良			大山寺	鳥取			本山寺	香川
		元興寺	奈良			一ノ宮倭文神社	鳥取			善通寺	香川
		新薬師寺	奈良			観音院	鳥取			和霊神社	愛媛
		秋篠寺	奈良			大神山神社	鳥取			岩屋寺	愛媛
		圓成寺	奈良			鳥取東照宮	鳥取			大宝寺	愛媛
		般若寺	奈良			太鼓谷福成神社	島根			石手寺	愛媛
		不退寺	奈良			物部神社	島根			太山寺	愛媛
		法華寺	奈良			神魂神社	島根			伊佐爾波神社	愛媛
		正暦寺	奈良			八重垣神社	島根			伊豫豆比古命神社(通称:椿神社)	愛媛
		帯解寺	奈良			月照寺	島根			西山興隆寺	愛媛
		大安寺	奈良			熊野大社	島根			伊曾乃神社	愛媛
		白毫寺	奈良			美保神社	島根			石鎚神社	愛媛
		西大寺	奈良			佐太神社	島根			龍潭寺	愛媛
		靈山寺	奈良			日御碕神社	島根			(金山)出石寺	愛媛
		海龍王寺	奈良			一畑薬師(一畑寺)	島根			如法寺	愛媛
		石上神宮	奈良			鰐淵寺	島根			竹林寺	高知
		長岳寺	奈良			萬福寺	島根			土佐神社	高知
		天河大辨財天社	奈良			医光寺	島根			金剛頂寺	高知
		松尾寺	奈良			玉若許命神社	島根			最御崎寺	高知
		慈光院	奈良			水若許神社	島根			豊楽寺	高知
		金剛山寺(矢田寺)	奈良			雲樹寺	島根			(土佐)国分寺	高知
		長弓寺	奈良			清水寺	島根			聖福寺	福岡
		寶山寺	奈良			中山神社	岡山			香椎宮	福岡
		大神神社	奈良			備中国分寺	岡山			宮崎宮	福岡
		談山神社	奈良			熊野神社	岡山			住吉神社	福岡
		聖林寺	奈良			円通寺	岡山			承天寺	福岡
		安倍文殊院	奈良			誕生寺	岡山			観世音寺	福岡
		南法華寺(壺阪寺)	奈良			最上稻荷	岡山			宮地嶽神社	福岡
		榮山寺	奈良			曹源寺	岡山			多久聖廟	佐賀
		當麻寺	奈良			吉備津彦神社	岡山			大興善寺	佐賀
		榎原神宮	奈良			向上寺	広島			崇福寺	長崎
		久米寺	奈良			西國寺(西国寺)	広島			長崎孔子廟	長崎
		宇太水分神社	奈良			浄土寺	広島			万松院	長崎
		大峯山寺	奈良			千畳閣(豊国神社本殿)	広島			和多都美神社	長崎
吉野水分神社	奈良	不動院	広島	大野教会堂	長崎						
如意輪寺	奈良	明王院	広島	出津教会	長崎						
玉置神社	奈良	佛通寺	広島	田平天主堂	長崎						
丹生川上神社(中社)	奈良	赤間神宮	山口	黒島天主堂	長崎						
法輪寺	奈良	東光寺	山口	頭ヶ島天主堂	長崎						
根來寺	和歌山	住吉神社	山口	旧五輪教会堂	長崎						
長保寺	和歌山	防府天満宮	山口	江上天主堂	長崎						
丹生都比売神社	和歌山	常栄寺・雪舟庭	山口	堂崎天主堂	長崎						
粉河寺	和歌山	瑠璃光寺五重塔	山口	旧野首教会	長崎						
丹生官省符神社	和歌山	周防国分寺	山口	崎津教会	熊本						
金剛三昧院	和歌山	大照院	山口	青井阿蘇神社	熊本						
慈尊院	和歌山	太龍寺	徳島	藤崎八幡宮	熊本						
神倉神社	和歌山	箸蔵寺	徳島	本妙寺	熊本						

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
12.神社・寺院・教会	特別地域観光資源	阿蘇神社	熊本	13.城跡・城郭・宮殿	特別地域観光資源	掛川城	静岡	14.集落・街	A級	道頓堀界限(道頓堀、千日前、法善寺横丁)	大阪
		大江教会	熊本			小牧山城跡	愛知			神戸北野異人館群	兵庫
		富貴寺	大分			松坂城跡	三重			今井町の街並み	奈良
		両子寺	大分			伊賀上野城	三重			倉敷川畔の街並み	岡山
		宮崎神宮	宮崎			安土城	滋賀			知覧武家屋敷群	鹿児島
		青島神社	宮崎			岸和田城	大阪			竹富島の赤瓦屋根の民家群(竹富島)	沖縄
		高千穂神社	宮崎			明石城	兵庫			すすきの	北海道
		天岩戸神社	宮崎			郡山城	奈良			金森倉庫群と末広町周辺の街並み	北海道
		鶴戸神宮	宮崎			和歌山城	和歌山			小樽の運河と石造り倉庫群	北海道
		新田神社	鹿児島			鳥取城	鳥取			弘前の洋館群	青森
		杖間神社	鹿児島			米子城	鳥取			金ヶ崎町城内諏訪小路	岩手
		照國神社	鹿児島			津和野城跡	島根			登米町の歴史的建造物群	宮城
		霧島神宮	鹿児島			津山城	岡山			村田の町並み	宮城
						鬼ノ城	岡山			増田町の内蔵と町並み	秋田
		13.城跡・城郭・宮殿	特A級			江戸城跡	東京			14.集落・街	特別地域観光資源
桂離宮	京都			岡山城	岡山	喜多方蔵のまち並み	福島				
京都御所	京都			広島城	広島	真壁の町並み	茨城				
大阪城	大阪			福山城	広島	栃木市の町並み	栃木				
姫路城	兵庫			萩城跡	山口	小幡の町並み	群馬				
五稜郭	北海道			徳島城跡	徳島	佐原の町並み	千葉				
金沢城	石川			丸亀城	香川	大多喜の町並み	千葉				
松本城	長野			高松城	香川	六本木	東京				
犬山城	愛知			屋嶋城	香川	代官山	東京				
名古屋城	愛知			宇和島城	愛媛	渋谷	東京				
彦根城	滋賀			今治城	愛媛	新宿	東京				
元離宮二条城(二条城)	京都			大洲城	愛媛	新大久保	東京				
竹田城跡	兵庫			高知城	高知	神田古書店街	東京				
松江城	島根			小倉城	福岡	丸の内	東京				
松山城	愛媛			福岡城	福岡	合羽橋道具街	東京				
熊本城	熊本	大野城跡	福岡	秋葉原	東京						
首里城	沖縄	名護屋城	佐賀	ア×横	東京						
今帰仁城	沖縄	唐津城	佐賀	谷根千(谷中・根津・千駄木)	東京						
13.城跡・城郭・宮殿	特別地域観光資源	松前城(福山城)	北海道	平戸城	長崎	巢鴨地藏通り商店街	東京				
		弘前城	青森	原城跡	長崎	池袋	東京				
		根城	青森	島原城	長崎	浅草	東京				
		仙台城跡	宮城	人吉城	熊本	横浜山手西洋館	神奈川				
		小峰城	福島	鞠智城	熊本	宿根木集落	新潟				
		二本松城跡(福島県立霞ヶ城公園)	福島	岡城跡	大分	高岡市金屋町の町並み	富山				
		若松城(鶴ヶ城)	福島	臼杵城跡	大分	加賀東谷の町並み	石川				
		金山城跡	群馬	飫肥城	宮崎	橋立町の船板住宅群	石川				
		鉢形城跡	埼玉	中城城跡	沖縄	金沢の武家屋敷	石川				
		小田原城	神奈川	座喜味城跡	沖縄	ひがし茶屋街	石川				
		石垣山城	神奈川	勝連城跡	沖縄	卯辰山山麓寺院群	石川				
		新発田城跡	新潟	白川郷合掌造り集落	岐阜	主計町茶屋街	石川				
		富山城	富山	祇園	京都	にし茶屋街	石川				
		七尾城跡	石川	函館山山麓周辺の街並み	北海道	奥能登の黒瓦の集落群	石川				
		丸岡城	福井	大内宿	福島	熊川宿	福井				
福井城跡	福井	川越蔵造りの町並み	埼玉	赤沢宿	山梨						
越前大野城	福井	原宿	東京	小布施の町並み	長野						
上田城	長野	銀座通り	東京	海野宿	長野						
高遠城	長野	五箇山の合掌造り集落	富山	妻籠宿	長野						
小諸城址(懐古園)	長野	奈良井宿	長野	美濃町の町並み	岐阜						
松代城跡	長野	高山三町の町並み	岐阜	飛騨古川の瀬戸川と白壁土蔵街	岐阜						
苗木城跡	岐阜	木曾三川の輪中集落	岐阜・他	馬籠宿	岐阜						
岩村城	岐阜	関宿	三重	恵那市岩村町本通りの町並み	岐阜						
郡上八幡城	岐阜	美山かやぶきの里	京都								
岐阜城	岐阜	伊根の舟屋群	京都								
駿府城跡(駿府城公園)	静岡										

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
14.集落・街	特別地域観光資源	松崎町のなまこ壁と鏝絵	静岡	14.集落・街	特別地域観光資源	筑後吉井の町並み	福岡	15.郷土景観	特別地域観光資源	笠間焼	茨城
		有松の町並み	愛知			新川田筆の町並み	福岡			大谷石の里	栃木
		御城番屋敷	三重			浜庄津町浜金屋町の町並み	佐賀			益子焼の町並み	栃木
		おはらい町・おかげ横丁	三重			浜中町八本木宿の町並み	佐賀			おもちゃのまち	栃木
		木津呂集落	三重			塩田津の町並み	佐賀			嬌恋村のキャベツ畑	群馬
		伊勢河崎のまちなみ	三重			神浦の町並み	長崎			榛名梅林	群馬
		彦根の街並み	滋賀			長崎市東山手・南山手の洋風建築群	長崎			足袋とたび蔵	埼玉
		東近江市五個荘金堂の町並み	滋賀			豆田町の町並み	大分			狭山茶茶畑風景	埼玉
		黒壁スクエア	滋賀			杵築武家屋敷群	大分			大宮盆栽村・大宮盆栽美術館	埼玉
		坂本門前町の街並み	滋賀			美々津の町並み	宮崎			三富新田	埼玉
		近江八幡の町並み	滋賀			飢肥城下町の町並み	宮崎			野田の醤油づくり関連施設群	千葉
		上賀茂の街並み	京都			入来麓武家屋敷群	鹿児島			銚子漁港	千葉
		嵯峨島居本の街並み	京都			出水麓の町並み	鹿児島			水郷佐原あやめパーク	千葉
		錦市場商店街	京都			国際通り	沖縄			南房総の花畑	千葉
		伏見の街並み	京都			渡名喜島の町並み(渡名喜島)	沖縄			銚子の醤油づくり関連施設群	千葉
		産寧坂の街並み	京都			函館山からの夜景	北海道			大山千枚田	千葉
		先斗町の街並み	京都			美瑛の丘の農村風景	北海道			豊洲市場	東京
		丹後ちりめん街道	京都			弘前のりんご畑	青森			江ノ島電鉄	神奈川
		富田林の街並み	大阪			霊場恐山	青森			油壺	神奈川
		梅田の地下街	大阪			湯畑	群馬			川崎臨海工業地域の工場群	神奈川
		鶴橋・生野のコリアタウン	大阪			小笠原の見送り	東京			箱根登山電車	神奈川
		御堂筋	大阪			築地場外市場	東京			黒部峡谷トロッコ電車	富山
		天神橋筋商店街	大阪			白米千枚田	石川			雪の大谷	富山
		新世界	大阪			甲府盆地の桃畑	山梨			砺波平野のチューリップ畑	富山
		丹波篠山の町並み	兵庫			軽井沢保養地	長野			砺波平野の散居村(散村)	富山
		魚の棚商店街	兵庫			高山の朝市	岐阜			ホタルイカ漁	富山
		「ならまち」の街並み	奈良			ぎふ長良川の鶴飼	岐阜			片野鴨池の坂網猟	石川
		天理の街並み	奈良			牧之原の茶畑	静岡			近江町市場	石川
		五條市五條新町の町並み	奈良			大井川鐵道のSL列車	静岡			輪島の朝市	石川
		宇陀市松山の町並み	奈良			丸山千枚田	三重			越前和紙の里	福井
		水木しげるロード	鳥取	和束町の茶畑	京都	越前大野湧水のまち	福井				
		打吹玉川の町並み	鳥取	熊野古道	和歌山	越前陶芸村	福井				
		津和野の町並み	島根	四国八十八ヶ所・お接待	徳島・他	甲府盆地のブドウ畑	山梨				
		大森の町並み	島根	八女中央大茶園	福岡	甲府盆地のフィナリー群(勝沼を中心として)	山梨				
		神門通り	島根	有田焼窯元群	佐賀	漆工町 木曾平沢	長野				
		矢掛の宿場町	岡山	牧志公設市場	沖縄	姨捨の棚田	長野				
		津山市城東町並み	岡山	札幌市中央卸売市場	北海道	札幌二条市場	北海道				
		吹屋の町並み	岡山	函館の朝市	北海道	北竜町ひまわりの里	北海道				
		御手洗の街並み	広島	富良野エリアのラベンダー	北海道	日高の競走馬牧場群	北海道				
		竹原の街並み	広島	日高のコンブ干し	北海道	野付湾の打瀬舟による北海シマエビ漁	北海道				
		鞆の浦	広島	八食センター	青森	八食センター	青森				
		上下白壁の街並み	広島	ストーブ列車	青森	ストーブ列車	青森				
		柳井市古市・金屋の町並み	山口	横浜町の菜の花畑	青森	横浜町の菜の花畑	青森				
		萩の城下町	山口	館鼻岸壁朝市	青森	館鼻岸壁朝市	青森				
		長府の町並み	山口	小岩井農場	岩手	小岩井農場	岩手				
脇町南町のうだつの町並み	徳島	三陸鉄道	岩手	三陸鉄道	岩手						
塩飽本島町笠島の町並み	香川	日本こけし館	宮城	日本こけし館	宮城						
琴平門前町	香川	気仙沼港	宮城	気仙沼港	宮城						
男木島の町並み	香川	浦戸諸島のノリひび・カキ棚の風景	宮城	浦戸諸島のノリひび・カキ棚の風景	宮城						
外泊「石垣の里」	愛媛	大湯村の「桜と菜の花ロード」と農業景観	秋田	大湯村の「桜と菜の花ロード」と農業景観	秋田						
内子の町並み	愛媛	南会津のそば畑	福島	南会津のそば畑	福島						
卯之町の町並み	愛媛										
安芸市土居廓中の町並み	高知										
八女福島の町並み	福岡										
黒木の町並み	福岡										
門司港周辺建造物群	福岡										
秋月城下町	福岡										

【表6】 観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	
15.郷土景観	特別地域観光資源	鴨川の納涼床	京都	16.庭園・公園	特別地域観光資源	水前寺成趣園	熊本	16.庭園・公園	特別地域観光資源	メリケンパーク	兵庫	
		黒門市場	大阪			A級	仙巖園			鹿児島	国営明石海峡公園	兵庫
		六甲山からの夜景	兵庫			識名園	沖縄			姫路城西御屋敷跡庭園好古園	兵庫	
		灘の酒蔵群(灘五郷)	兵庫			安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄	北海道			竹林院群芳園	奈良	
		丹波焼の里	兵庫			上野ファーム	北海道			琴ノ浦温山荘園	和歌山	
		月ヶ瀬梅林	奈良			十勝千年の森	北海道			養翠園	和歌山	
		山の辺の道	奈良			旧岩船氏庭園	北海道			鳥取県立とっとり花回廊	鳥取	
		洞川温泉の街並み	奈良			盛美園	青森			衆楽園(旧津山藩別邸庭園)	岡山	
		賀名生梅林	奈良			日和山公園	宮城			頼久寺の庭園	岡山	
		大和三山	奈良			旧池田氏庭園	秋田			千光寺公園	広島	
		あらぎ島	和歌山			長井市あやめ公園	山形			絡景園	広島	
		南部梅林	和歌山			南湖公園	福島			岩国城・吉香公園	山口	
		ヨズクハデ	島根			御菓園(会津松平氏庭園)	福島			ときわ公園	山口	
		大根島のボタン	島根			国営ひたち海浜公園	茨城			琴弾公園	香川	
		出雲平野の築地松	島根			古河公方公園(古河総合公園)	茨城			天赦園	愛媛	
		穴道湖のシジミ漁	島根			あしかがフラワーパーク	栃木			柳川藩主立花邸 御花	福岡	
		備前焼の里 伊部の街並み	岡山			那須フラワーワールド	栃木			河内藤園	福岡	
		児島ジーンズストリート	岡山			ぐんまフラワーパーク	群馬			大濠公園	福岡	
		牛窓オリーブ園	岡山			羽生水郷公園	埼玉			旧亀石坊庭園	福岡	
		北木島の石材	岡山			所沢航空記念公園	埼玉			ヒゴタイ公園	熊本	
		西川緑道公園	岡山			戸定邸・旧徳川昭武庭園	千葉			富岡製糸場	群馬	
		呉港の旧海軍関連等施設	広島			水元公園	東京			東京タワー	東京	
		西条酒蔵通り	広島			清澄庭園	東京			迎賓館赤坂離宮	東京	
		江戸市場	山口			国立科学博物館附属自然教育園	東京			国会議事堂	東京	
		小豆島のオリーブ	香川			殿ヶ谷戸庭園(随宜園)	東京			東京駅	東京	
		遊子水荷浦の段畑	愛媛			日比谷公園	東京			隅田川橋梁群	東京	
		今治造船風景	愛媛			六義園	東京			東京スカイツリー	東京	
		ひろめ市場	高知			小石川後楽園	東京			黒部ダム(黒部湖)	富山	
		柳川の掘割	福岡			旧古河庭園	東京			明石海峡大橋	兵庫	
		旦過市場	福岡			国営昭和記念公園	東京			旧閑谷学校	岡山	
		篠栗四国八十八カ所	福岡			山下公園	神奈川			錦帯橋	山口	
		呼子朝市	佐賀			三溪園	神奈川			瀬戸内しまなみ海道(橋梁群)	愛媛・広島	
大浦の棚田	佐賀	箱根強羅公園	神奈川	豊平館	北海道							
大川内山(伊万里焼)	佐賀	清水園	新潟	札幌市時計台(旧札幌学校演武場)	北海道							
島原湧水のまち	長崎	貞観園	新潟	北海道庁日本庁舎(赤れんが庁舎)	北海道							
稲佐山からの夜景	長崎	玉泉園	石川	北海道大学	北海道							
三菱重工長崎造船所	長崎	山中湖花の都公園	山梨	稚内港北防波堤ドーム	北海道							
土谷棚田	長崎	はままつフラワーパーク	静岡	博物館網走監獄	北海道							
五木・五家荘の渓谷	熊本	熱海梅園	静岡	旧国鉄土幌線アーチ橋梁群	北海道							
竹田の井路群	大分	日本平	静岡	鯉御殿	北海道							
安心院の鍍絵	大分	浜名湖ガーデンパーク	静岡	鶴の舞橋	青森							
北浦町地下の段々茶畑	宮崎	久屋大通公園	愛知	太宰治記念館「斜陽館」	青森							
桜島周辺地域の墓地	鹿児島	青岸寺庭園	滋賀	青函トンネル記念館	青森							
知覧の茶畑	鹿児島	玄宮楽々園	滋賀	岩手大学農学部農業教育資料館	岩手							
薩摩焼の里美山	鹿児島	慶雲館	滋賀	岩手銀行(旧盛岡銀行)旧本店本館	岩手							
壺屋やちむん通り	沖縄	無鄰菴	京都	旧第九十銀行本店本館	岩手							
由布島の水牛(由布島)	沖縄	白沙村荘 橋本関雪記念館	京都	紺屋町番屋	岩手							
		宝泉院	京都	宮守川橋梁(めがね橋)	岩手							
		白龍園	京都	旧有備館および庭園	宮城							
		八幡市立松花堂庭園・美術館	京都	旧小坂鉦山事務所	秋田							
		大河内山荘庭園	京都	十和田ホテル本館	秋田							
		重森三玲庭園美術館	京都	国際教養大学図書館(中嶋記念図書館)	秋田							
		服部緑地	大阪	旧料亭金勇	秋田							
		鶴見緑地	大阪	山居倉庫	山形							
		中之島公園の建築物群	大阪									
16.庭園・公園	特A級	兼六園	石川									
		修学院離宮	京都									
	A級	大通公園	北海道									
		モエリ沼公園	北海道									
		偕楽園	茨城									
		新宿御苑	東京									
		浜離宮恩賜庭園	東京									
		京都仙洞御所	京都									
		後楽園	岡山									
		栗林公園	香川									

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
17.建造物	特別地域観光資源	本間家旧本邸	山形	17.建造物	特別地域観光資源	韭山反射炉	静岡	18.年中行事(祭り・伝統行事)	A級	さっぽろ雪まつり	北海道
		山形市郷土館(旧済生館本館)	山形			名古屋市官庁街の歴史的建造物群	愛知			竿燈まつり	秋田
		旧有路家住宅(封人の家)	山形			六華苑	三重			大曲の花火	秋田
		旧致道館	山形			宇治山田駅	三重			山形花笠まつり	山形
		松ヶ岡開墾場	山形			琵琶湖疏水施設群	滋賀・京都			相馬野馬追	福島
		天鏡閣	福島			角屋もてなしの文化美術館	京都			秋父夜祭	埼玉
		日新館	福島			二條陣屋	京都			三社祭	東京
		西山御殿跡(西山荘)	茨城			同志社大学(今出川)	京都			おわら風の盆	富山
		弘道館	茨城			旧三井家下鴨別邸	京都			御柱祭	長野
		日立駅	茨城			杉本家住宅・庭園	京都			高山祭	岐阜
		足利学校跡	栃木			太陽の塔	大阪			郡上おどり	岐阜
		日光田母沢御用邸記念公園	栃木			鴻池新田会所	大阪			尾張津島天王祭(津島祭)	愛知
		中禅寺湖畔大使館等別荘群	栃木			通天閣	大阪			葵祭	京都
		日光金谷ホテル	栃木			神戸女学院	兵庫			時代祭	京都
		明治時代の別荘建築	栃木			関西学院大学(西宮上ヶ原)	兵庫			岸和田だんじり祭	大阪
		碓氷峠鉄道施設	群馬			武庫川女子大学甲子園会館	兵庫			天神祭(大阪天満宮)	大阪
		深谷の煉瓦とレンガ建物群	埼玉			奈良女子大学	奈良			東大寺二月堂修二会(お水取り)	奈良
		首都圏外郭放水路	埼玉			奈良ホテル	奈良			西条まつり	愛媛
		東京湾アクアライン(一般国道409号)	千葉・神奈川			JR奈良駅旧駅舎(奈良市総合観光案内所)	奈良			よさこい祭り	高知
		慶應義塾大学(三田)	東京			谷瀬の吊り橋	奈良			みあれ祭	福岡
		レインボーブリッジ	東京			仁風閣	鳥取			唐津くんち	佐賀
		東京女子大学	東京			旧大社駅	島根			長崎くんち	長崎
		明治生命館	東京			倉敷アイビースクエア	岡山			高千穂の夜神楽	宮崎
		旧東京音楽学校奏楽堂	東京			海上自衛隊第1術科学校(旧海軍兵学校)	広島			那覇大綱挽	沖縄
		旧岩崎邸	東京			旧毛利家本邸(毛利博物館・毛利氏庭園)	山口			エイサー	沖縄
		日本銀行本店本館	東京			山口県資料館	山口			YOSAKOIソーラン祭り	北海道
		湯島聖堂	東京			松下村塾	山口			姥神大神宮渡御祭	北海道
		東京カテドラル聖マリア大聖堂	東京			角島大橋	山口			八戸えんぶり	青森
		東京大学(本郷)	東京			関門トンネル	山口・福岡			八戸三社大祭	青森
		学習院大学	東京			祖谷のかずら橋	徳島			黒石よされ	青森
		立教大学(池袋)	東京			大鳴門橋	徳島・兵庫			お山参詣	青森
		羽田空港(東京国際空港)	東京			豊稔池堰堤	香川			恐山例大祭	青森
		旧前田家本邸	東京			萬翠荘	愛媛			田名部まつり	青森
		横浜三塔(神奈川県庁本庁舎・横浜税関本関庁舎・横浜市開港記念会館)	神奈川			旧藏内邸	福岡			北上・みちのく芸能まつり(鬼剣舞)	岩手
		横浜赤レンガ倉庫	神奈川			旧筑後川橋梁(筑後川昇開橋)	佐賀			チャグチャグ馬コ	岩手
		富士屋ホテル	神奈川			嘉瀬川の石井樋	佐賀			盛岡舟っこ流し	岩手
		横浜ベイブリッジ	神奈川			眼鏡橋	長崎			盛岡さんさ踊り	岩手
		鎌倉文学館	神奈川			椎根の石屋根倉庫	長崎			日高火防祭	岩手
		旧吉田茂邸	神奈川			第一白川橋梁	熊本			花巻まつり	岩手
		古我邸	神奈川			旧国鉄宮原線コンクリートアーチ橋梁群	熊本			旧南部領のナニヤドヤラ	岩手
		渡邊邸	新潟			通潤橋	熊本			仙台七夕まつり	宮城
		旧笹川家住宅	新潟			三角西港	熊本			塩竈みなと祭	宮城
		北方文化博物館	新潟			耶馬溪橋	大分			横手のかまくら	秋田
		市島邸	新潟			白水ダム	大分			男鹿のナマハゲ	秋田
		富岩運河(富岩運河環水公園)	富山			九重"夢"大吊橋	大分			西馬音内盆踊り	秋田
成巽閣	石川	院内町の石橋群	大分	大日堂舞楽	秋田						
時國家	石川	西の正倉院	宮崎	能代ねぶながし(能代役七夕)	秋田						
重要文化財・旧三笠ホテル	長野	古宇利大橋	沖縄	湯沢の七夕絵どうろう	秋田						
軽井沢教会群	長野	伊良部大橋	沖縄	犬っこまつり	秋田						
国史 旧開智学校校舎	長野	青森のねぶた・ねぶた	青森	角館祭りのやま行事	秋田						
牛伏川フランス式階段工	長野	式年遷宮	三重	毛馬内の盆踊	秋田						
読書発電所諸施設	長野	祇園祭	京都	土崎港曳山まつり	秋田						
高山陣屋	岐阜	阿波おどり	徳島	花輪ばやし(花輪祭の屋台行事)	秋田						
蓬莱橋	静岡	博多祇園山笠	福岡	羽黒山の松例祭	山形						

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
18.年中行事(祭り・伝統行事)	特別地域観光資源	新庄まつり	山形	18.年中行事(祭り・伝統行事)	特別地域観光資源	城端曳山祭(城端神明宮祭の曳山行事)	富山	18.年中行事(祭り・伝統行事)	特別地域観光資源	引接寺 千本糸んま堂大念佛狂言	京都
		黒川能	山形			金沢百万石まつり	石川			嵯峨お松明式	京都
		黒森歌舞伎	山形			青柏祭	石川			吉田神社の節分行事	京都
		天童桜まつり	山形			石崎奉燈祭	石川			八瀬赦免地踊	京都
		酒田まつり(酒田山王祭)	山形			伴旗まつり	石川			亀岡祭	京都
		米沢上杉まつり	山形			あばれ祭	石川			松尾祭	京都
		柳津七日堂裸詣り	福島			輪島大祭	石川			をけら詣り(八坂神社)	京都
		二本松の提灯祭り	福島			名舟大祭(御陣乗太鼓)	石川			賀茂競馬	京都
		田島祇園祭	福島			三国祭	福井			田原の御田	京都
		檜枝岐歌舞伎	福島			勝山左義長まつり	福井			久多の花笠踊	京都
		須賀川松明あかし	福島			敦賀まつり	福井			伏見稲荷大社田植祭	京都
		うねめまつり	福島			藤切り祭	山梨			京都の六斎念仏	京都
		古河堤灯竿もみまつり	茨城			信玄公祭り	山梨			壬生大念佛狂言	京都
		鹿島神宮祭頭祭	茨城			吉田の火祭り	山梨			堺市のふとん太鼓	大阪
		土浦全国花火競技大会	茨城			新野の盆踊り	長野			住吉大社御田植神事	大阪
		日立風流物	茨城			大鹿歌舞伎	長野			四天王寺聖霊会	大阪
		鹿沼今宮神社祭の屋台行事	栃木			善光寺前立本尊御開帳	長野			西宮神社の十日えびす	兵庫
		東照宮百物揃(千人行列)	栃木			田立の花馬祭り	長野			相生ペーロン祭	兵庫
		山あげ祭	栃木			野沢温泉の道祖神祭り	長野			灘のけんか祭り(松原八幡神社)	兵庫
		日光和楽踊り	栃木			谷汲踊	岐阜			春日若宮おん祭	奈良
		とちぎ秋まつり	栃木			古川祭	岐阜			若草山焼き行事	奈良
		入間基地航空祭	埼玉			久田見まつり	岐阜			三枝祭	奈良
		小鹿野歌舞伎	埼玉			どぶろく祭	岐阜			お燈祭り	和歌山
		南越谷阿波踊り	埼玉			大垣祭の軸行事	岐阜			那智の扇祭り	和歌山
		久喜提燈祭り「天王様」	埼玉			表佐の太鼓踊り	岐阜			しゃんしゃん祭	鳥取
		熊谷うちわ祭	埼玉			浜松風あげ	静岡			津和野弥栄神社の鷲舞	鳥根
		川越まつり	埼玉			藤守の田遊び	静岡			ホーランエンヤ	鳥根
		尾ノ内百景氷柱	埼玉			掛川大祭	静岡			出雲大社大祭礼	鳥根
		かつうらビッグひな祭り	千葉			三熊野神社大祭	静岡			備中神楽	岡山
		式年神幸祭	千葉			島田大祭(帯まつり)	静岡			加茂大祭	岡山
		佐原の大祭(八坂神社、諏訪神社)	千葉			国府宮はだか祭(尾張大國霊神社)	愛知			会陽(裸祭り)	岡山
		成田祇園祭	千葉			須成祭	愛知			壬生の花田植	広島
		江戸川区花火大会	東京			三谷祭	愛知			宮島の管絃祭	広島
		深川八幡祭り	東京			犬山祭	愛知			御神幸祭裸坊祭	山口
		世田谷ポロ市	東京			大海の放下	愛知			先帝祭	山口
		神田祭	東京			大提灯まつり(諏訪神社)	愛知			秋吉台山焼き	山口
		山王祭	東京			(豊浜)鯛まつり	愛知			山口七夕ちようちんまつり	山口
		西の市(浅草鷲神社)	東京			亀崎潮干祭の山車行事	愛知			さぬき豊浜ちようさ祭	香川
		入谷朝顔市	東京			豊橋祇園祭	愛知			金刀比羅宮大祭	香川
		府中くらやみ祭	東京			名古屋まつり	愛知			うわじま牛鬼まつり	愛媛
		隅田川花火大会	東京			伊勢大神楽	三重			宇和津彦神社秋祭	愛媛
		鎌倉宮の薪能	神奈川			桑名石取祭	三重			新居浜太鼓祭り	愛媛
		鶴岡八幡宮例大祭	神奈川			上野天神祭	三重			砂浜美術館のTシャツアート展	高知
		湘南ひらつか七夕まつり	神奈川			日野祭	滋賀			関門海峡花火大会	山口・福岡
		つがわ狐の嫁入り行列	新潟			長浜曳山祭	滋賀			戸畑祇園大山笠	福岡
十日町雪まつり	新潟	大津祭	滋賀	小倉祇園太鼓	福岡						
片貝まつり(浅原神社秋季例大祭奉納大煙火)	新潟	山王祭(日吉大社)	滋賀	黒崎祇園山笠	福岡						
新潟まつり	新潟	近江八幡左義長まつり	滋賀	福岡市民の祭り 博多どんたく港まつり	福岡						
白根大風合戦	新潟	勝部の火祭り	滋賀	玉せせり	福岡						
村上大祭	新潟	竹伐り会式(鞍馬寺)	京都	風治八幡宮 川渡り神幸祭	福岡						
長岡まつり大花火大会	新潟	鞍馬の火祭り	京都	伊万里のトンテントン	佐賀						
見附今町・長岡中之島大風合戦	新潟	花脊松上げ	京都	有田陶器市	佐賀						
綾子舞	新潟	宮津燈籠流し花火大会	京都	長崎ペーロン	長崎						
たてもん祭り(魚津のタテモン行事)	富山	京都五山送り火	京都	長崎の精霊流し	長崎						
高岡御車山祭(高岡御車山祭の御車山行事)	富山	三船祭	京都	長崎ランタンフェスティバル	長崎						
		やすらい祭	京都								

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県			
18.年中行事(祭り・伝統行事)	特別地域観光資源	八代妙見祭	熊本	19.動物園・水族館	特別地域観光資源	京都市動物園	京都	20.博物館・美術館	特別地域観光資源	JAXA筑波宇宙センター	茨城			
		山鹿灯籠まつり	熊本			京都府立植物園	京都			ミュージアムパーク茨城県自然博物館	茨城			
		藤崎八幡宮例大祭	熊本			天王寺公園	大阪			水戸芸術館	茨城			
		阿蘇の野焼き	熊本			森野旧薬園	奈良			茨城県天心記念五浦美術館	茨城			
		姪島盆踊り	大分			アドベンチャーワールド	和歌山			藤城清治美術館	栃木			
		日田祇園祭	大分			広島市安佐動物公園	広島			宇都宮美術館	栃木			
		鶴崎踊	大分			下関市立しものせき水族館「海響館」	山口			那珂川町馬頭広重美術館	栃木			
		師走祭り	宮崎			愛媛県立とべ動物園	愛媛			栗田美術館	栃木			
		悪石島のボゼ	鹿児島			高知県立牧野植物園	高知			那須野が原博物館	栃木			
		おはら祭	鹿児島			マリニワールド海の中道	福岡			群馬県立美術館・群馬県立歴史博物館	群馬			
		弥五郎どん祭り	鹿児島			福岡市動植物園	福岡			碓氷峠鉄道文化むら	群馬			
		与那原大綱曳	沖縄			到津の森公園	福岡			富弘美術館	群馬			
		那覇ハーリー	沖縄			長崎ペンギン水族館	長崎			埼玉県立自然の博物館	埼玉			
		糸満ハーレー	沖縄			大分マリンパレス水族館「うみたまご」	大分			原爆の図丸木美術館	埼玉			
		糸満大綱引	沖縄			九州自然動物公園アフリカンサファリ	大分			航空科学博物館	千葉			
		宮古島のパーントゥ(宮古島)	沖縄			いおワールドかごしま水族館	鹿児島			三菱一号館美術館	東京			
		多良間島の八月踊り(多良間島)	沖縄			熱帯ドリームセンター	沖縄			東京都現代美術館	東京			
		竹富島の種子取祭(竹富島)	沖縄			東南植物楽園	沖縄			松岡美術館	東京			
		西表島の節祭(西表島)	沖縄			東京国立博物館	東京			サントリー美術館	東京			
石垣島 四力字の豊年祭(石垣島)	沖縄	京都国立博物館	京都	東京都庭園美術館	東京									
19.動物園・水族館	A級	旭川市旭山動物園	北海道	特別地域観光資源	A級	平和記念公園	広島	20.博物館・美術館	特別地域観光資源	三鷹の森ジブリ美術館	東京			
		上野動物園	東京			鉄道博物館	埼玉			太田記念美術館	東京			
		名古屋市東山動植物園	愛知			国立歴史民俗博物館	千葉			山種美術館	東京			
		海遊館	大阪			日本科学未来館	東京			江戸東京たてもの園(東京都江戸東京博物館分館)	東京			
		沖縄美ら海水族館	沖縄			根津美術館	東京			SOMPO美術館	東京			
		札幌市円山動物園	北海道			東京国立近代美術館	東京			五島美術館	東京			
	特別地域観光資源	特別地域観光資源	おたる水族館	北海道	特別地域観光資源	特別地域観光資源	国立西洋美術館			東京	特別地域観光資源	特別地域観光資源	出光美術館	東京
			釧路市丹頂鶴自然公園	北海道			国立科学博物館			東京			皇居三の丸尚蔵館	東京
			サケのふるさと千歳水族館	北海道			鎌倉国宝館			神奈川			東京都美術館	東京
			北海道大学植物園	北海道			金沢21世紀美術館			石川			朝倉彫塑館	東京
			仙台商みの杜水族館	宮城			徳川美術館			愛知			東京藝術大学大学美術館	東京
			鶴岡市立加茂水族館(クラゲドリーム館)	山形			国立民族学博物館			大阪			アーティゾン美術館	東京
			環境水族館アクアマリンふくしま(ふくしま海洋科学館)	福島			奈良国立博物館			奈良			永青文庫	東京
			アクアワールド茨城県大洗水族館	茨城			島根県立古代出雲歴史博物館			島根			すみだ北斎美術館	東京
			那須どうぶつ王国	栃木			足立美術館			島根			日本民藝館	東京
			栃木県なかがわ水遊園	栃木			大原美術館			岡山			帆船日本丸・横浜みなと博物館	神奈川
			鴨川シーワールド	千葉			大塚国際美術館			徳島			神奈川県立歴史博物館	神奈川
			市原ぞうの国	千葉			ベネッセアートサイト直島			香川・岡山			横浜開港資料館	神奈川
			神代植物公園	東京			九州国立博物館			福岡			神奈川近代文学館	神奈川
			多摩動物公園	東京			北海道開拓の村			北海道			川崎市立日本民家園	神奈川
			小石川植物園	東京			ウボボイ(民族共生象徴空間)			北海道			川崎市岡本太郎美術館	神奈川
			サンシャイン水族館	東京			青森県立美術館			青森			川崎市 藤子・F・不二雄ミュージアム	神奈川
			よこはま動物園ズーラシア	神奈川			十和田市現代美術館			青森			彫刻の森美術館	神奈川
			野毛山動物園	神奈川			津軽三味線会館			青森			箱根美術館	神奈川
			神奈川県立大船フラワーセンター	神奈川			東北歴史博物館			宮城			ポーラ美術館	神奈川
			新江ノ島水族館	神奈川			リアス・アーク美術館			宮城			小田原文学館	神奈川
			雪国植物園	新潟			地底の森ミュージアム			宮城			松永記念館	神奈川
			のどしま臨海公園水族館	石川			秋田県立美術館			秋田			神奈川県立生命の星・地球博物館	神奈川
			富士サファリパーク	静岡			本間美術館			山形			岡田美術館	神奈川
			加茂荘花鳥園	静岡			土門拳記念館			山形			鎌倉歴史文化交流館	神奈川
			日本モンキーセンター	愛知			致道博物館			山形			鈴木牧之記念館	新潟
			名古屋港水族館	愛知			野口英世記念館			福島			YKKセンターパーク	富山
			鳥羽水族館	三重			笠間日動美術館			茨城			石川県立歴史博物館	石川
		徳川ミュージアム(旧徳川彰考館)	茨城	鈴木大拙館	石川									

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
20.博物館・美術館	特別地域観光資源	国立工芸館	石川	20.博物館・美術館	特別地域観光資源	神勝寺 禅と庭のミュージアム	広島	22.温泉	特A級	草津温泉	群馬
		こまつ杜	石川			ふくやま草戸千軒ミュージアム	広島			別府八湯	大分
		福井県立恐竜博物館	福井			金子みすゞ記念館	山口			登別温泉	北海道
		福井県年縞博物館	福井			藍の館	徳島			酸ヶ湯温泉	青森
		山梨県立美術館	山梨			北九州市立いのちのたび博物館	福岡			薦温泉	青森
		久保田一竹美術館	山梨			北九州市立松本清張記念館	福岡		玉川温泉	秋田	
		サントリー白州蒸溜所	山梨			福岡市博物館	福岡		乳頭温泉郷	秋田	
		平山郁夫シルクロード美術館	山梨			大分県立美術館	大分		後生掛温泉	秋田	
		碓山美術館	長野			尚古集成館	鹿児島		銀山温泉	山形	
		セゾン現代美術館	長野			鹿児島市 維新ふるさと館	鹿児島		蔵王温泉	山形	
		北斎館	長野			知覧特攻平和会館	鹿児島		那須湯本温泉 鹿の湯	栃木	
		安曇野ちひろ美術館	長野			種子島宇宙センター	鹿児島		奥日光湯元温泉	栃木	
		戦没画学生慰霊美術館 無言館	長野			田中一村記念美術館	鹿児島		万座温泉	群馬	
		市立大町山岳博物館	長野			東京ディズニーリゾート	千葉		伊香保温泉	群馬	
		MOA美術館	静岡			博物館 明治村	愛知		淡温泉	長野	
		静岡市立芹沢銈介美術館	静岡			鈴鹿サーキット	三重		野沢温泉	長野	
		浜松市楽器博物館	静岡			ユニバーサル・スタジオ・ジャパン	大阪		奥飛騨温泉郷	岐阜	
		トヨタ博物館	愛知			グラバー園	長崎		有馬温泉	兵庫	
		INAX ライブミュージアム	愛知			ねぶたの家 ワ・ラッセ	青森		城崎温泉	兵庫	
		豊田市美術館	愛知			遠野ふるさと村	岩手		道後温泉本館	愛媛	
		ミキモト真珠島	三重			スバリゾートハワイアンズ	福島		雲仙温泉	長崎	
		海の博物館	三重			道の駅うつのみやるまん ちっく村	栃木		由布院温泉	大分	
		神宮の博物館	三重			江戸ワンダーランド日光江戸村	栃木		鉄輪温泉	大分	
		伊賀流忍者博物館	三重			東武ワールドスクウェア	栃木		明礬温泉	大分	
		三重県総合博物館	三重			モビリティリゾートもてぎ	栃木		指宿温泉郷(指宿、山川伏目海岸)の砂むし温泉群	鹿児島	
		せんぐう館	三重	マザー牧場	千葉	霧島温泉郷	鹿児島				
		三重県立熊野古道センター	三重	東京ジョイボリス	東京	上の湯温泉	北海道				
		滋賀県立琵琶湖博物館	滋賀	よみうりランド	東京・神奈川	ニセコ湯本温泉	北海道				
		MIHOMUSEUM	滋賀	キッズニア東京	東京	層雲峡温泉	北海道				
		佐川美術館	滋賀	サンリオピューロランド	東京	十勝川温泉	北海道				
		銅鐸博物館(野洲市歴史民俗博物館)	滋賀	浅草花やしき	東京	川湯温泉	北海道				
		京都国立近代美術館	京都	東京ドームシティアトラクションズ	東京	屈斜路湖畔の温泉	北海道				
		泉屋博古館	京都	富士急ハイランド	山梨	黄金崎不老不死温泉	青森				
		アサヒグループ大山崎山荘美術館	京都	三代校舎ふれあいの里	山梨	青荷温泉	青森				
		京都鉄道博物館	京都	飛騨民俗村 飛騨の里	岐阜	温湯温泉	青森				
		河井寛次郎記念館	京都	安城産業文化公園デンパーク	愛知	夏油温泉	岩手				
		グンゼ博物館	京都	野外民族博物館リトルワールド	愛知・岐阜	藤七温泉	岩手				
		京都市京セラ美術館	京都	ノリタケの森	愛知	国見温泉	岩手				
		樂美術館	京都	ナガシマリゾート	三重	鉛温泉	岩手				
		相国寺承天閣美術館	京都	なばなの里	三重	花巻温泉	岩手				
		正木美術館	大阪	志摩スペイン村	三重	須川温泉	岩手・秋田				
		和泉市久保惣記念美術館	大阪	東映太秦映画村	京都	鎌先温泉	宮城				
		小林一三記念館	大阪	ひらかたパーク	大阪	鳴子温泉	宮城				
		国立国際美術館	大阪	サントリー山崎蒸溜所ウイスキー館	大阪	青根温泉	宮城				
		大阪市立東洋陶磁美術館	大阪	キッズニア甲子園	兵庫	義々温泉	宮城				
大和文華館	奈良	四国村ミウゼアム(四国民家博物館)	香川	泥湯温泉	秋田						
入江泰吉記念奈良市写真美術館	奈良	佐賀元祖忍者村 肥前夢街道	佐賀	蒸ノ湯温泉	秋田						
依水園・享楽美術館	奈良	ハウステンボス	長崎	強首温泉 縦峰苑	秋田						
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良	琉球村	沖縄	肘折温泉	山形						
南方熊楠記念館	和歌山	ピオスの丘	沖縄	滑川温泉	山形						
わらべ館の童謡・唱歌	鳥取			姥湯温泉	山形						
島根県立美術館	島根			高湯温泉	福島						
耕三寺博物館(耕三寺)	広島			木賊温泉	福島						
平山郁夫美術館	広島			甲子温泉	福島						
				板室温泉	栃木						
				三斗小屋温泉	栃木						
				塩原温泉郷	栃木						

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
22.温泉	特別地域観光資源	那須岳南東麓の温泉群(大丸温泉、弁天温泉、北温泉)	栃木	23.食	A級	貴船の川床	京都	23.食	特別地域観光資源	日間賀島のたことぶくの料理	愛知
		奥鬼怒温泉郷	栃木			京菓子	京都			なごやめし	愛知
		西の河原(露天風呂)	群馬			大阪のたこ焼き	大阪			一宮のモーニング	愛知
		四万温泉	群馬			山陰の松葉ガニ料理	兵庫・他			桑名のハマグリ料理	三重
		尻焼温泉	群馬			高野山の宿坊の精進料理	和歌山			赤福餅	三重
		宝川温泉	群馬			広島のカキ料理	広島			ふなずし	滋賀
		法師温泉	群馬			下関のふく料理	山口			八モ料理	京都
		地蛇温泉(式根島)	東京			香川の讃岐うどん	香川			京都の湯豆腐	京都
		五頭温泉郷(出湯温泉、今板温泉、村杉温泉)	新潟			カツオのたたき	高知			大阪のお好み焼き	大阪
		栃尾又温泉	新潟			博多の屋台	福岡			篠山のぼたん鍋	兵庫
		月岡温泉	新潟			沖縄そば	沖縄			神戸ビーフステーキ	兵庫
		立山地獄谷の温泉	富山			北海道のカニ料理	北海道			出石皿そば	兵庫
		山中温泉	石川			石狩鍋	北海道			明石焼(玉子焼)	兵庫
		山代温泉	石川			函館のイカ料理	北海道			柿の葉寿司	奈良
		和倉温泉	石川			釧路の炉端焼き	北海道			三輪そうめん	奈良
		ほったらかし温泉	山梨			釧路和商市場の勝手井	北海道			吉野葛	奈良
		下部温泉	山梨			長万部のかにめし	北海道			新宮のめはりずし	和歌山
		奈良田温泉	山梨			十三湖のシジミ料理	青森			太地の鯨料理	和歌山
		中房温泉	長野			いちご煮	青森・岩手			松江の奉書焼き	島根
		別所温泉	長野			盛岡冷麺	岩手			出雲そば	島根
		鹿教湯温泉	長野			もち膳	岩手			ままかり寿司	岡山
		仙仁温泉	長野			白石温麺	宮城			宮島のあなご飯	広島
		高峰温泉	長野		仙台市の牛たん	宮城	広島のお好み焼き			広島	
		白骨温泉	長野		松島湾のカキ料理	宮城	岩国寿司			山口	
		濁河温泉	岐阜		気仙沼のフカヒレ料理	宮城	瓦そば			山口	
		熱海温泉	静岡		稲庭うどん	秋田	宇和島鯛めし			愛媛	
		稲取温泉	静岡		しょっつる鍋(ハタハタ鍋)	秋田	大洲のいもたき			愛媛	
		堂ヶ島温泉	静岡		山形板そば	山形	高知の血鉢料理			高知	
		伊豆下田河内温泉	静岡		芋煮会	山形	博多ラーメン			福岡	
		修善寺温泉	静岡		山都そば	福島	もつ鍋			福岡	
		湯村温泉	兵庫		喜多方ラーメン	福島	梅ヶ枝餅			福岡	
		南紀白浜温泉	和歌山		あんこう鍋	茨城	呼子イカの活き造り			佐賀	
		川湯温泉	和歌山		宇都宮餃子	栃木	有明海の魚料理			佐賀	
		湯の峰温泉	和歌山		下仁田のこんにゃく・下仁田ネギ	群馬	具雑煮			長崎	
		龍神温泉	和歌山		峠の釜めし	群馬	かんざらし			長崎	
		南紀勝浦温泉	和歌山		東松山のやきとり	埼玉	ちゃんぽん・皿うどん			長崎	
		三朝温泉	鳥取		なめろう(アジのたたき)	千葉	卓袱料理			長崎	
		温泉津温泉	島根		月島のもんじゃ焼き	東京	五島手延べうどん			長崎	
		玉造温泉	島根		両国のちゃんこ鍋	東京	佐世保バーガー			長崎	
		奥津温泉	岡山		三崎のマグロ料理	神奈川	熊本の馬刺し			熊本	
		武雄温泉の大衆浴場	佐賀		へぎそば	新潟	阿蘇のあか牛料理			熊本	
		黒川温泉	熊本		村上の鮭料理	新潟	城下かれい			大分	
		地獄温泉	熊本		ます寿司	富山	関あじ・関さば料理			大分	
		寒の地獄温泉の冷泉	大分		氷見の寒ブリ料理	富山	冷やし汁			宮崎	
湯平温泉	大分	シロエビ料理	富山	宮崎の地鶏炭火焼	宮崎						
長湯温泉	大分	越前がに料理	福井・他	きびなご料理	鹿児島						
23.食	特A級	江戸前の寿司	東京	越前おろしそば	福井	鹿兒島の豚料理	鹿児島				
		京料理	京都	ほうとう	山梨	チャンプルー	沖縄				
		ビール園のビールとジンギスカン	北海道	清泉寮ソフトクリーム	山梨	沖縄の豚肉料理	沖縄				
		札幌ラーメン	北海道	戸隠そば(信州そば)	長野	24.芸能・スポーツ	特A級	歌舞伎座	東京		
		盛岡市のわんこそば	岩手	小布施の栗菓子	長野			末廣亭で上演される演芸	東京		
		秋田県北部地方のきりたんぼ鍋	秋田	信州上田の松茸料理	長野			鈴本演芸場で上演される演芸	東京		
	横浜中華街の中華料理	神奈川	飛騨の朴葉みそ料理	岐阜	箱根駅伝(東京箱根往復大学駅伝競走)			神奈川・東京			
	浜松のうなぎ料理	静岡	丸子のとろろ汁	静岡	南座			京都			
	松阪牛のすき焼き	三重	三島のウナギ	静岡	都をどり(祇園甲部歌舞練場)			京都			
	A級	貴船の川床	京都	桜えびの料理	静岡	23.食	特別地域観光資源	出雲そば	島根		
		京菓子	京都	白石温麺	宮城			宮島のあなご飯	広島		
		大阪のたこ焼き	大阪	仙台市の牛たん	宮城			広島のお好み焼き	広島		
山陰の松葉ガニ料理		兵庫・他	松島湾のカキ料理	宮城	岩国寿司			山口			
高野山の宿坊の精進料理		和歌山	気仙沼のフカヒレ料理	宮城	瓦そば			山口			
広島のカキ料理		広島	稲庭うどん	秋田	宇和島鯛めし			愛媛			

【表6】観光資源一覧

種別	ランク	資源名	都道府県	種別	ランク	資源名	都道府県
24. 芸能・スポーツ	A級	全国高等学校野球選手権大会(夏の甲子園)	兵庫	24. 芸能・スポーツ	特別地域観光資源	なんばグランド花月(NGK)で上演されるお笑い	大阪
		宝塚大劇場	兵庫			国立文楽劇場で上演される文楽	大阪
		佐賀インターナショナルバルーンフェスタ	佐賀			淡路人形座	兵庫
	江差追分全国大会	北海道	永楽館			兵庫	
	ばんえい競馬	北海道	隠岐牛突き			島根	
	北海道バルーンフェスティバル	北海道	安来節とどじょうすくい			島根	
	アイヌ古式舞踊(阿寒湖アイヌシアターイコロ)	北海道	安芸高田神楽(神楽門前湯治村)			広島	
	久慈の平庭闘牛	岩手	徳島県立阿波十郎兵衛屋敷			徳島	
	登米能	宮城	旧金毘羅大芝居(金丸座)で上演される歌舞伎			香川	
	松島基地航空祭	宮城	宇和島闘牛			愛媛	
	康楽館	秋田	歌舞伎劇場内子座の芝居			愛媛	
	あきた芸術村	秋田	大濠公園能楽堂			福岡	
	相馬民謡全国大会	福島	博多座			福岡	
	磯節全国大会	茨城	田川市の炭坑節			福岡	
	草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル	群馬	嘉穂劇場			福岡	
	ながめ余興場	群馬	八千代座で上演される歌舞伎			熊本	
	日本スリーデーマーチ	埼玉	湯布院映画祭			大分	
	中山競馬場の有馬記念	千葉	霧島国際音楽祭			鹿児島	
	国立能楽堂	東京	徳之島の闘牛			鹿児島	
	国立競技場の全国高校サッカー選手権大会	東京	沖縄のプロ野球キャンプ地			沖縄	
	矢来能楽堂で上演される能・狂言	東京	沖縄の闘牛			沖縄	
	国立演芸場で上演される演芸	東京	組踊			沖縄	
	東京宝塚劇場	東京					
	浅草演芸ホールで上演される演芸	東京					
	特別地域観光資源		東京競馬場の日本ダービー			東京	
			宝生能楽堂で上演される能・狂言			東京	
			篠原演芸場で上演される大衆演劇			東京	
			国技館で開催される大相撲			東京	
			横浜能楽堂			神奈川	
			鎌倉能舞台			神奈川	
			佐渡の人形芝居			新潟	
			佐渡の能・狂言			新潟	
			越後山古志 牛の角突き			新潟	
			アース・セレブレーション			新潟	
			佐渡おけさ			新潟	
			大地の芸術祭			新潟	
			石川県立能楽堂			石川	
			能登演劇堂			石川	
			セイジ・オザワ 松本フェスティバル			長野	
			歌舞伎が上演される御園座			愛知	
			名古屋能楽堂			愛知	
			鴨川をどり(先斗町歌舞練場)			京都	
			京都競馬場の菊花賞			京都	
			京都観世会館			京都	
			金剛能楽堂			京都	
			北野をどり(上七軒歌舞練場)			京都	
			大阪松竹座			大阪	
		大槻能楽堂	大阪				
		天満天神繁昌亭	大阪				



2026年4月発行
表紙写真 iStock.com/picture cells
美しき日本 全国観光資源台帳 <https://tabi.jtb.or.jp>